いろ〳〵の傳說が殆ど無批判に集結せられて來てゐるが、荒唐奇拔、幼稚蕪雜、訓蒙的、童話的、迷信的、尙古「幽玄」、祕事口傳、伊勢・源氏、楊貴妃・李夫人、衣通・小町、和歌と連歌、音樂と歌舞（霓裳羽衣）、住吉・初瀨・石山・淸水、夢想懷胎、通夜託宣、歌德物語、本地物語、戀物語、纖子物語、捨子・拾子、遍歷・巡りあひ、武勇傳說に名木傳說、婦女庭訓に和合敬愛の祭、稚兒に化けた鬼が現るれば、宇受賣命の餘風を傳へる巫女があり、由緣の無い繼母御が割込めば、昔噺のおうぢとうばが乘出す。混沌變幻走馬燈の觀ある處、正に時代風尙の縮圖、而して無頓著の構想、手もと危けな表現、或意味での近古小說絕好の標本である。

近古小說の標本

紫式部

【素　材】 三才媛に關して實傳として或は傳說として流布してゐる資料の中から本書の素材と推知し得られる主な事項に就て擧げてみる事にする。

先づ紫式部に關しては、上東門院の女房であつたことは事實であるが、采女の上童は妙である。父は越後守藤原爲時、夫は左衞門權佐藤原宣孝、兄式部丞惟規の事は『紫式部日記』にも記されてゐるが、其の歌才談や好色談や臨終談やらが『今昔物語』（卷二四「藤原惟規讀二和歌一被レ免語第五七」・卷三一「藤原惟規父爲善共行二越中國一死語第二八」）や『俊祕抄』（卷下）（但しこれも「ためよし」の子「のぶのり」とある）『十訓抄』（卷上、第一「可レ定二心操振舞一事」）等に傳へられ、父の詩才よく國司の競爭に勝ち得た話も『今昔』（卷二四「藤原爲時作レ詩任二越前守一語第三〇」）や『古事談』（第一、王道后宮）に出てゐる。さて本書との交涉ある事柄として略說すべきは、

紫・泉兩女の關係

一　紫式部と和泉式部　同じ平安朝の、そして同じ御堂殿時代の、そして亦同じ上東門院（中宮彰子）の女房中の名媛で閨秀作家である。前者が物語作家としての天分が豐であるに對して、後者は情熱其のもののやうな人生詩人である事は誰も知る通りである。中宮への奉仕は紫女の方が先輩である。二人の性格はかなり異なつてゐるも

のがあるやうであるが、紫が『日記』の中で、赤染や淸少と並べて和泉を品騭してゐるのが面白い「はづかしげの歌よみやとは覺え侍らず」と負惜しみらしい事を言ひ添へてはゐるものの、そして和泉を批評家としては認めないが、創作家としての才には私かに一種の妬ましさをさへ感じてゐる自分を見出してゐるやうに見える。匡衡衞門には同感し共通するものが、性情なり趣味なりの上に無論多分にあつたのでもあらうが、又自己の心の底に藏してゐる優越感に迫進して來られない心安さがあつたのでもあらうかと臆測される。淸女に至つては更に遙に距つた性格者として相容れないのも尤ものやうな氣がする。同じ中宮の濟輩でない爲もあらう。

紫式部の女

紫式部の女は無論和泉式部ではない。大貳三位と越後の辨の二女があつたといふのが在來の說であるが、最近には兩女同一人說が提示せられてもゐる。（雜誌『國語と國文學』昭和二年十二月號、石村貞吉氏「紫式部と大貳三位」參照）

二　石山參籠說　紫式部が石山寺に籠つて『源氏物語』の「須磨」「明石」の卷に筆を染めたといふのは餘りに有名な傳說である。『湖月抄』の名義もこれに因由してゐるほど殆ど決定的の事實として長く信奉せられてもゐた。大齋院からの所望で上東門院の仰せによつて、石山に通夜して想を構へた事の由を述べてゐる『河海抄』（卷一「料簡」）が、既に夙く此の說の最も有力な承認者であり提唱者であつた。其の『河海抄』にやはり

石山參籠のロマンス

河海抄と無名草子

「後二罪障懺悔の爲に般若一部六百卷をみづから書きて奉納しける今に彼寺にありと云々」

と見えてゐる。

同書同條の冒頭に「此物語のおこり說々ありといへども」とある通り、紫女のかの大篇の創作動機に關する臆測說は無論一にして足らなかつたのであらう。『無名草子』にも、大齋院に關聯した門院下命說（石山參籠のことは含んでゐない）と寡居時代說とを揭げて「いづれかまことにて侍らむ」と未解決のまゝにしてゐる。所謂「准據」の

問題にも立入つた動機説も種々ある。が、『紫女七論』以後石山説は漸く顧みられなくなつて、寡居詩代説が略定説になつて來てゐるやうである。

紫女七論の快辯

「爲章若き程この河海の説を信じて、かの自筆の般若見まほしくて、石山にて相識れる坊に逗留して其事を尋ね探り侍りしに、はやくそらごとにてぞ侍りし。但し、源氏の間と名づけて式部が畫像を畫き、此頃やうの机硯などを設けたるは、いづれの世何人の好事にか」(『紫女七論』其七「正傳説誤」)

傳説としての石山參籠

「そらごと」「好事」の俗傳は小氣味よく一蹴せられてゐるが、(本輯二三五頁參照)かういふ俗傳が生み出され、作り上げられ、流布せられ、又それに實證さへも與へられようと企てられ、それが亦尊信せられ盲從せられた事實と意義とは、文學史的に、説話學・民俗學的に、民族心理學的に、種々の側から興味多い題目として輕視することは出來ない。且又かの『河海抄』の記述も一箇の藝術創作の動機傳説として之を觀る時、別樣の意義が生じて來る。

「大齋院(選子内親王村上女十宮)より上東門院へ珍らかなる草子や侍ると尋ね申させ給ひけるに、宇津保・竹取やうの古物語は目馴れたれば、新しく作り出して獻るべき由式部に仰せられければ、石山寺に通夜して此事を祈り申すに、折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心の澄み渡るまゝに、物語の風情空に浮びたるを、忘れぬさきにとて佛前にありける大般若の料紙を本尊に申受けて、先づ須磨・明石の兩卷を書き留めけり。」

石山參籠と時代習俗

何といふ美しいローマンスであらう。佛寺に結びつけられながら、なほ飽くまで藝術的・詩的而も創作體驗的なのが嬉しい。

石山參籠も許され得ない空想ではない。當時の人達には寧ろ普通の事であつた。廣く寺社參籠と言はず、石山だけに就て言つても、和泉式部も「七日ばかりあらむと思ひて」籠つた(『和泉式部日記』)。彼等よりは先輩の道綱の母も「石山に十日ばかりと思ひ立つ」て出た(『蜻蛉日記』)。赤染衛門も幾度か詣でたやうである(『赤染集』)。後の『更

級日記』の著者も參籠して夢想があつた(『更級日記』)。『源氏物語』の中にも屢、石山の事は書かれ、『紫式部集』には近江の湖邊での詠が數首收められてゐる。『伊勢大輔集』に

紫式部の清水參籠——伊勢大輔との贈答

「紫式部清水に籠りたりしに參りあひて、院(上東門院)の御料に諸共に御あかし獻りしを見て、樒の葉に書きておこせたりし」

と詞書して、次に二首づつの贈答の歌が載せてあり、其の後の方のは松に凍つた雪を見ての作で、

「奥山の松葉に氷る雪よりも我身世に經る程ぞ果敢なき」(式部)

「消えやすき露の命にくらぶればげにとゞこほる松の雪かな」(返し、大輔)

とあるのは、「椎本卷」の中君の歌

「奥山の松葉に積る雪とだに消えにし人を思はましかば」

の本づくところであらうとは、既に古人の注目したところであるが(『岷江入楚』卷四七所引稱名院並に三光院説參照)、佛寺に籠つて一部の創案作意の示唆を——靈感的にさへも——得たであらう想像も、稍生氣を與へられる形にならぬでもない。もとより五十四帖を書き綴る間には始終念頭を離れぬ構想や素材の捉へ方やに、さうした機會や事實が當然に度々あつたらうことを想像することは自由であらねばならぬ。同時に亦其の事が直ちに、あのローマンスがあのまゝの形の事實で在る爲の擧證とはならないことも勿論である。

源氏物語の六十卷説

扨其の『源氏物語』を「六十卷」(本輯二三五頁・二四二頁參照)といふのは天台六十卷に擬したと考へられたところから來てゐるのであるが(『細流抄』卷一「大意」參照)、五十四帖説(『明月記』元仁二年二月の條・『河海抄』序・『原中最秘抄』卷下「雲隱」の條・『增鏡』卷一〇「飛鳥川」・『本朝書籍目錄』「假名」部等。なほ『更級日記』には「五十よ卷」といひ、又「井卷」を一帖と數

へるものにあつては三十七帖であるが、それは必竟五十四帖説に同じと大體に於て言へる。）が明らかに認められてゐる一方に於て、之を認めつゝ、其の五十四帖が卽ち六十卷に相當するといふ意味であると妥協的な解釋（前記『細流抄』同條參照）すらせねばならぬほど、事實漠然ながら六十帖と傳へるものに『今鏡』（卷一〇「作り物語のゆくへ」）があり、『無名草子』「殘りの六十卷」と見えてゐる。）があり、後のものでは『眠江入楚』（卷四三「雲隱」）にも三光院實澄の説（「箋聞書」）を載せてゐる。謠曲『源氏供養』や『十二段草子』（六）ひのだんつかも六十帖説である。古く『拾芥抄』（上末「源氏物語」目錄部第三十）に出てゐる疑問の「浦傳」「狹席」が假に幷卷でなくて一卷の別名であるとしても、亦『奥入』（類從本）に

「一説には卷第二、かゞやく日の宮、此の卷もとよりなし」

とあるのが何人かの根據無き想像説（恐らく「桐壺卷」中の詞から出たと思はれるが）であるとしても、兎に角六十卷説が漠然と流布すると共に亦それを補充する心持も實現せられて來たのも無理ではない。所謂「雲隱」「巢守」「櫻人」「法の師」「ひばりこ」「やつはし」或は「櫻人」「巢守」「さしぐし」「八橋」「嵯峨野上下」の類である。

雲隱卷

此の六十帖説に深い交渉を有するのは、言ふまでもなく『雲隱』卷の存否説である。近來は否定説が擡頭して來たが（藤岡作太郎博士著『國文學全史（平安朝篇）』『源氏物語（一）—その梗概』、雜誌『國語と國文學』大正十四年十月特別號『源氏物語號』野村八良氏「雲隱否定説」參照）、『紫明抄』の頃までには、もう卷名だけは少くとも存したと信ぜられてゐるのであるから、隨分舊くからの問題である。扨此の卷が傳存せぬ爲に種々の祕説が傳會せられて、「名ばかりを聞きて卷を見ぬ事」「六條院頓滅の事」など、天台の四門や黄帝の昇天に假りた解釋が現れたり（『河海抄』卷一五「第二六、雲隱」參照）、『毛詩』の「小雅」の六篇の逸詩と同斷とせられたり（『花鳥餘情』卷二三「廿六、雲隱」）、「作者の趣向玄之玄者也」と歎賞されたり、（『細流抄』卷一二「にほふ宮」）特に滑稽なのは

雲隱の祕説

「或説云、雲隱の卷を讀みける人、皆道心を起して出家しけるほどに、宣旨を下されて、當卷ばかりを焚かせられけり云々」（『原中最祕抄』卷下「雲隱」）

といふ笑止な説が出たり（これは流石に「此義不」足二信用一」と也」と同書に記されてゐる。）してゐる。唯、源氏の薨去を敍すべき卷であることと、名のみで本が無いといふことだけは大抵一致してゐる。本書ではそれが、六十卷の内を五卷取つて自身深く藏したとあるのが珍説である。（本輯二四二頁參照）

雨夜の品定と式部日記

三　紫女の庭訓　道命法師との浮名が立つたとて呼び寄せて和泉に訓へる「よろづの事、女房の振舞」所謂「一大事の祕事」なるものの内容は、如何にも微笑を禁じ得ぬ底のものであるが、「雨夜の品定」の女性觀・妻室論からでも思ひついたのでもあらうか。『式部日記』の一部が子女に與へた消息文の攙入であるとの説が正しいとすれば、偶然にも其の母の心に相通ずるものがあることにもなる。（關根正直博士著『紫式部日記精解』總説參照）

或は直接紫女に關係なく、此の訓論が挿入せられて來たのかもわからない。もとより『徒然草』などの喜ばれた時代である。阿佛尼の『庭の訓』（一名『乳母のふみ』）も手本かも知れぬ。それよりも『めのとのさうし』『身のかたみ』の類がもつと手近い參考の教科書であつたらう。

めのとのさうし・身のかたみ

「目は、人の顔のうちの生物（いきもの）にて、大きなるも小きも、勢ひ殊なるものにて、さのみ思ふまゝに見いだし候へば、よき目つきも怖ろしくなり候。わろき目つきなれども、なつかしう、うら〳〵と見出し候へばよく候。

鼻は、人の顔のうちにさゝ出て高く、目に立つものにて候。相構へて〳〵白く御化粧（けはい）候まじく候。さし出てみにくき物にて候。

御口は、よくもあしくも、もてなしにて御入候。いかによき口つきも、思ふさまに笑みひろげ、喉の孔見え、舌のひろき、口わきより泡ぶく垂りて物言へば、如何に美しき口つきも、惡しくなり候。又惡しき口つきも、のど〳〵と物うち云ひ、

又おかしき事もうち笑みたる、にくからず」(『めのとのさうし』)

『身のかたみ』も同樣で、これは一層委しく且箇條書體である。何れも室町期のものであるらしい。阿佛尼の訓もかなり細心なもので、此の種の婦女庭訓に範を垂れてゐる事は爭はれない。此の近古の時代のものから次の時代へかけて『女五經』『女今川』『女大學』『女徒然草』『女重寶記』『女小學』などさま〴〵類種の一系統をなして發達してゐる婦女家庭讀本の精神と樣式とを本書の一部に含ませられてゐるといふわけである。而もそれが紫女に其の垂訓の源流を發してゐると信ぜられてゐることも事實であり、又偶然ではない。

「昔より女の心づかひ身もちなどの事、唐土・日の本にも侍りつれども、中比は女の心ばせ、起き臥したちゐまで、むげにしな下り侍りしにより、高松の女院・紫式部など深く歎き給ひて、上たる人は下を憐み、下たる者は上に仕へ、家を治め身を立て侍るべき事を、細々と書留め給ひしなり。此のこと書を御覽じて、御心をたしなみ給ふべし」(『めのとのさうし』冒頭の一節)

高松院は二條天皇の中宮(姝子)、紫式部と合議して婦女訓を作られたやうに聞えて可笑しい。

次に和泉式部に關してであるが、彼女は大江雅致の女、平安朝の代表的な女流歌人であると共に、『和泉式部日記』を遺して、日記文學の作家中にも伍してゐる。和泉守(陸奥守)橘道貞の妻であつたが、後、丹後守藤原保昌に再嫁した。その間彈正の宮爲尊親王、ついで弟宮なる帥の宮敦道親王との戀愛生活があり、後、一條天皇の中宮彰子(上東門院)へ宮仕することとなつた。そして小式部と母子であるのは勿論妄誕では無く、二人共中宮に奉仕したのも事實である。

附記 和泉式部の正傳に關しては、雜誌『國語國文の研究』(大正十六年一月號以下登載)の「和泉式部傳の研究」(岡田希雄氏)

及び日本古典全集本『和泉式部全集』解題(與謝野晶子夫人)等の研究がある。

本書の素材で、主として和泉式部に關する部分に就て、考察すると、先づ

俊祕抄所載の繼子の歌物語

四 「小鍋」の歌物語 母の紫式部が石山詣の留守に、繼母御の膝下にあつていたいけな歌を讀む段は、『俊祕抄』(卷上)にかの歌を載せて

「これは幼き稚兒をて、(父)が繼母に附けて置きたりけるが、親の物へ罷りたりけるほどに、土して小き鍋の形を作りたりけるを、繼母我が子には取らせて、此の繼子には取らせざりければ、欲しと思ひけれどえ乞はざりけるに、鶯の鳴きければ詠める歌也。ち(乳)なども欲しかりけるほどにや。幼き人も稚兒共も昔は歌をよみけると見せんためしになん」

とある繼子說話がその本據であることは疑を容れない。『袋草紙』(卷四)にも、もつと簡略にして出てゐる。(本輯二三五頁頭註參照) それが繼母を感動させた結果に於て歌德說話にまで進展し、「憎まるゝな」といふ實母の言葉に表されてゐる時代の繼子童話の常套心理が裏切られて、溫柔な繼母であるのが一寸珍しい。更にこれが紫・泉の兩女に關係してゐるところが又奇想である。

小式部內侍の詠歌逸話

五 鬼神感動の歌德說話——大患の平癒 これは普通には小式部の詠歌逸話として遍く知られてゐるところの傳說である。卽ち『古今著聞集』(卷五、和歌第六)に

「同式部が女、小式部內侍、この世ならず煩ひけり。かぎりになりて、人の顏なども見しらぬ程になりて臥したりければ、和泉式部傍に添ひ居て、額をおさへて泣きけるに、目をわづかに見上げて、母が顏をつく〴〵と見て、息の下に

いかにせんいくべきかたもおもほえず親に先立つ道を知られば

と弱りはてたる聲にていひければ、天井の上にあくびさしてやあらんと覺ゆる聲にて、あらあはれといひけり。さて身の暖かさもさめて、よろしくなりてけり」

『十訓抄』(巻下、第一〇「可レ庶二幾才能一事」(一四)にも殆ど同文で出てゐる。又『沙石集』(巻五、一三「神明歌を感じ人を助け給ふ事」)には

「小式部内侍、病重くして、心弱く覚えける時、母を見て聲の下に

いかにせん行くべき方もおもほえず　親に先立つ道を知られば

天井に感ずる聲ありて、病癒えにけり。神明の御助けにこそ」

と見えてゐる。(『無名草子』には唯、此の歌の爲に病が癒えたとのみある)これが本書では母なる和泉の上に轉移して、もつと誇張された形に進展してゐる。聲の主が正しく本體まで顯して來てゐる。そして積極的に説明や豫言までしてゐる。『著聞集』の同巻に見える松殿僧正行意が赤痢病に罹つて危篤に陥つた時の鬼神の感吟は、少し筋が違つて本人のではなく、家隆卿の詠であるが、歌徳によつて難病の本復したことは同斷である。そして所謂「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」る藝術の絶大神祕の靈力を高調した物語であるに於ては一である。家の破風から天に上つて行くのは、渡邊綱の許に腕を取返しに來た伯母御前の先縦を襲うたものであらう。(『太平記』巻三二、及び剣巻参照)

僧正行意の奇談——歌徳傳説

續詞花集所載の歌

然るに本書の歌は前記の所謂小式部の詠から出たものであるか如何かは明言出來ない。其の上句は如何しても、右の小式部の歌の本歌或は原傳説と見られるやうな『續詞花集』(巻九、哀傷)所載のそれから出てゐるとしか推定し得られない。(本輯二三七頁頭註参照)且同集のそれの詞書は

「日ごろ惱みける女俄に絶え入りて死にければ、父母願を立てて、我が命に召しかへよと泰山府君に申けるほどに、いき出でて此のむすめのよみける」

としてある。恐らくは『十訓』『著聞』の方から來たのでない爲に、小式部の物語を書きながら其の方に採らずして態々和泉に傳會してしまつたのではなからうか。前の小鍋の歌も『續詞花集』の撰者のものした歌物語にも出てゐることは既に述べた。それとも後に小式部を捨子にする爲に、意識してかういふ事に作りなしたのであらうか。巫女敬愛の祭も『沙石集』に出てゐるのに據つたとすれば、此の方も知つてゐた事になる。然しそれも『沙石集』とも稍變つた形になつてもゐるし、或は作者に素材として取扱はれる以前に、さうした物語、あゝいふ歌になつて傳へられてゐたのかも知れない。但し彼の歌が和泉の逸話として傳誦せられたといふ資料は別に一寸見當らない。

保昌と式部——丹後下り

六　保昌への婚嫁と大江山傳説　和泉式部が保昌と婚したのは實傳である。夫の任國丹後へ下つた事も空想では無い。『家集』にも

「丹後に在りける程、守上りて下らざりければ、十二月十餘日雪いじみう降るに」

と詞書のある歌(巻四)や、

「丹後より上りて、練りたる糸、宮に参らすとて」

と上東門院に練糸を獻じた時の歌(巻三)やが見える。『後拾遺集』(巻一七、雜三)には

「丹後の國にて保昌朝臣明日狩せむといひける夜鹿の鳴くを聞きてよめる」

といふ一首が出てゐる。(古典全集本『和泉式部歌集補遺』『後醍醐天皇宸翰本抄錄』参照)例の小式部の秀歌も丹後に母が下つてゐた頃の出來事である(後に述べる。)なほ『詞花集』(巻八、戀下)に

「藤原保昌の朝臣に具して丹後國へまかりけるに、忍びて物言ひける男の許へ言ひ遣はしける」

と詞書のある歌(古典全集本の『補遺』中にも同じ意味の詞書で出てゐる)は、『家集』(巻五)では、たゞ「また人に」とだけ

詞書がしてある。

兎に角、前に道貞の妻であつたのが、後に保昌に再嫁することとなつたのであるけれども、本書では初めて此の頼光朝臣と雙ぶ武將の妻となつたことになつてゐる。而もそれが大江山の鬼退治の行賞として、鵺退治の頼政もどきで菖蒲格といふのである。(尤も菖蒲を下し賜はるのと鵺退治とは、『源平盛衰記』(巻一六)では未だ別々の事件に止まつてゐるが。)鬼神を感泣させた歌の德で召し出され、鬼神を亡した功勞の引出物に下されるといふ、よく〳〵鬼に緣ある進退にされてしまつてゐる。

大江山傳說は**大蛇退治型**——さう決定せられぬまでも少くとも一種の怪物退治型の武勇傳說であることは言ふまでもない。そして**神話的武勇傳說**の轉化して史的英雄の上に移つた**史的武勇傳說**である。本書の記述は大體御伽草紙の『酒呑童子』に一致してゐる。鬼がもと寺稚兒であつたといふのも『酒呑童子』の鬼神自身の素性物語に見える。住吉明神の冥助、所謂「神變奇特—神便鬼毒—酒」の靈力もそれに記されてある。但し頼光・保昌兩將軍が任命されるのだけは、御伽本の頼光が大將軍として勅命を承るのと異なつてゐる。恐らく『香取本酒顚童子繪卷』(下總國香取社、大宮司家所藏本『大江山繪詞』一名『酒顚童子繪卷』又『酒顚童子草子』。今、同家に傳存してゐない由)の系統に屬するものであらう。そして此の方が御伽本よりは古いと言はれてゐるものである。(別に『大江山繪詞』と呼ばれてゐる所謂『古法眼本』があるが、又少しく異なつてゐる。)謠曲『大江山』にも、

「扨もこの度丹波國大江山の鬼神の事、占方の言葉にまかせつゝ、頼光・保昌に仰せ付けらる」

としてある。又本書では、頼光は所謂四天王でなく其の隨一たる羅生門傳說乃至戾橋傳說の勇者渡邊綱だけを召具する事になつてをり、又保昌の方は彼の綽名として後世に傳へられるその「一人武者」を隨へて行くのが面白

本書と御伽本及び香取本の酒呑童子

一人武者

い。(本輯二三八頁頭註參照)

此の傳說に就ては述ぶべき事が多々あり、又羅生門傳說・土蜘蛛傳說等との關係など論究すべき事が少なくないが、本書說話の本筋に餘り深い關係が無いから、此處ではこれだけに止める。

附記　此の傳說の本據を『白藤傳』とする論が『廣益俗說辨』(正編巻一〇、士庶「源頼光酒顚童子を討つ說附土蜘蛛の說」)に出てゐる。故芳賀先生(矢一博士)は妻尊大蛇退治神話の變形と推斷せられた。(大正二年度東京帝國大學文科大學「鎌倉室町時代小說史」講義)又藤澤衛彦氏著『日本傳說研究』(第一巻)の中に、「酒顚童子物語(鬼賊退治英雄傳說)」及びそれに附して「大江山繪詞傳考」「お伽草子の酒顚童子考」「酒顚考」等の興味ある詳細な研究が收められてゐる。

平井保昌

唯これが保昌の武勇譚に關した事であるが故に、其の妻の和泉式部に結びついて來ることも寧ろ自然であるとは言はねばならぬ。

なほ保昌(一六一八——一六九六天德二——長元九享年七九)は平井氏、藤原致忠の子、祖父は將門追討の大將軍に選ばれたことのある元方(菅根の子)で、先は南家の武智麿に出てゐる。左馬頭となり、肥後・丹後・大和・攝津等の守に歷任し、頼光・頼信兄弟等と武名を齊しうした。そして其の妹は卽ち多田滿仲の室であるから、此の頼光兄弟とは叔姪の間柄である。例の「盜人の大將軍」袴垂との市原野の風流だんまりは最も有名な傳說で、『今昔物語』(巻二五「藤原保昌朝臣値二盜人袴垂一語第七」)に早く傳へられ(『宇治拾遺』には巻二に「袴垂保昌に逢ふ事」として出てゐる。)又丹後下向の途に大矢左衞門尉致經の父の老武士に逢うた話が『古事談』(第四、勇士)・『宇治拾遺』(巻一一「丹後守保昌下向の時致經が父に逢ふ事」)・『十訓抄』(巻上、第三「不レ侮二人倫一事」(一一)等に出てゐる。

ところが後の馬琴の讀本『四天王劇盜異錄』(文化二年刊)では、かの五右衞門・長範と名を爭ふ大兇賊の袴垂が、

保昌と保輔

此の保昌朝臣と兄弟で、随つて和泉式部にも話が絡んで來るのに喫驚させられるが、然し驚くに及ばぬのである。名告の「保」の字が共通するところからだけの惡戯ではない。

「保輔爲二強盜主一事

被レ命云、致忠男保輔保昌兄也是強盜主也。事發覺繫レ獄之後、致忠到レ獄召二出其身一、以二己膚一觸二其身一云々」

といふ一節が『江談抄』(第三、雜事)に見えてゐるのである。『續古事談』(第五、諸道)には其の捕縛獄死の狀況を詳說してゐる。其の代りにこれが眞であることになれば、そしてそれを認めることになれば、市原野の活人畫は——其の市原野といふ背景は鬼同丸傳說(『著聞集』卷九、武勇第一二)からの移入であらう——幕を閉ぢさせられるか、或は變つた意味を加へられねば濟まなくなる。勿論傳說としての展開の上からは、別樣の意味でそれ〴〵意義があり、何れが事實に近くても大して他方の妨にはならないが、二人の間が全然路傍の人である方が、說話としての面白味が多い。これも併し本書に直接の關係はない。

高僧としての道命阿闍梨

七　道命阿闍梨との情話　道命法師は御堂殿の異母兄である彼の右大將道綱の子で、少にして天台山に登り、慈惠大師に事へた人、其の讀經の妙音に諸佛諸神も隨喜して聽聞に參集せられた話が『今昔物語』(卷一二、「天王寺別當道命阿闍梨語第三六」)に見え、『日本法華驗記』(卷下)『元亨釋書』(卷一九、靈怪篇)等にも載せてある。これらにあつては和泉式部とは全く關係の無い高僧として數々の驗德を語つてゐるのであるが、その『今昔』の佛神讀經聽聞の名譽談が稍改變を蒙つて、道命が不淨のまゝ讀經したので、平常は近づけぬ五條の道祖神が聽きに來たといふ說話になつてゐる『宇治拾遺』の所傳に於ては、和泉式部との關係が攙入せられ、且その不淨の因由に聯關してそれが說かれてゐる。

和泉式部との關係

「今は昔、道命阿闍梨とて、傳殿(東宮の傳藤原道綱)の子に色にふけりたる僧ありけり。和泉式部に通ひけり」(『宇治拾遺物語』卷一、道命阿闍梨和泉式部の許に於て讀經五條道祖神聽聞事)

と記してあり、同じ話を載せた『古事談』(第三、僧行)及び『東齋隨筆』(好色類)には「好色無雙の人也」としてある。『寶物集』(卷七、第一一「法華經を修行すべし財利益の事」)にも

「道命阿闍梨は泉式部に落つる不淨の僧なりしかども、法華經を讀誦の功德によりて往生の素懷を遂ぐ」

と辯じてある。

又『古今著聞集』(卷八　好色第一一)には、道命と式部とが同車した話が出てゐる。其の時に詠んだ道命のざれ歌

おそろしゝむきともむかじいが栗の　ゐみもあひなばおちもこそすれ

にも、二人の中のよそ〴〵しくないさまは窺はれる。平安末から鎌倉期へかけては、既に兩人の醜聞は傳說的にかなり有名となつてゐたらしい。

歌人としての道命

歌人としての道命は、『大鏡』(中卷「太政大臣頼家」)に「きはめたる和歌の上手」といひ、『中古歌仙三十六人傳』中にも數へられて

「東宮傳道綱卿男、母中宮少進源廣女郎家女房、法華八軸持者能讀、天王寺別當云々」

と見え、其の詠は『後拾遺』『詞花』以下の勅撰集に載せ、『著聞集』には前掲の歌の他、修行中にそまむぎを馳走されての卽興(卷一八、飲食第二八)なども傳へられてゐる。その勅撰集の歌の中から

風しらず

思ひ餘り云ひ出づる程に數ならぬ身をさへ人に知られぬる哉(後拾遺集卷一一、戀一)

返事せぬ女のこと人には遣ると聞きて

汐垂るゝ我身の方はつれなくてこと浦にこそ煙立つなれ（同）

題しらず　　讀人しらず

逢ふ事はさもこそ人目難からめ心ばかりはとけて見えなむ

かへし

思ふらむしるしだになき下紐に心ばかりの何かとくべき（同）

（此の次に和泉式部の「下消ゆる雪まの草の珍しくわが思ふ人にあひ見てしがな」の歌が出てゐる）

日ごろ今日とたのめたりける人のさもあるまじげに見え侍りければよめる

嬉しとも思ふべかりし今日しもぞいとゞ歎のそふ心地する（同）

年頃あはぬ人にあひて後につかはしける

逢見しを嬉しき事と思ひしはかへりて後の歎なりけり（同卷一四、戀四）

題しらず

夜な〳〵は目のみさめつゝ思ひやる心や行きて驚かすらむ（同）

春になりてあはむとたのめける女のさもあるまじげに見えければいひ遣はしける

山櫻つひに咲くべきものならば人の心をつくさざらなむ（詞花集卷七、戀上）

題しらず

つらさをば君にならひて知りぬるを嬉しき事を誰に問はまし（同）

冬の頃暮にあはむといひたる女に暮しかれていひ遣はしける

程もなくくると思ひし冬の日の心もとなき折もありけり（同）

と擧げて來るだけでも、全部が實際經驗の詠はれたのでなくとも、「無雙」は兎も角「色にふけりたる」の世評の煙が火の無い所に立たぬ徵證となるには十分であらう。

赤染集の歌

かたらはむといひて道命法師の許にまうできたる人のよみ侍りける　　讀人しらず

たえやせむ命ぞ知らぬ水無瀨川よし流れても心みよ君（後拾遺集卷一八、雜四）

といふ歌も見えてゐる。

『赤染衞門集』に

「道命阿闍梨なくなりて後、法輪に詣でたりしに、住みし坊の櫻の咲きたりしを見て

誰れ見よと猶匂ふらむ櫻花散るを惜みし人もなき世に」

の一首が收めてあるに觀れば、赤染よりは早世なのであらう。法輪は阿闍梨の籠つた所、前に記した『今昔』等の藏王・熊野・住吉・松尾の諸佛神の聽聞や、蛇身の祟りの病女の救はれたのも、此の寺の禮堂での事であつた。

和泉と赤染

八　赤染の諷諫　此の友輩の才女赤染衞門が歌を以て和泉の移り氣を諫めた事は、これ亦著名の話である。『和泉式部集』（卷二）にも『赤染衞門集』にも亦『新古今集』（卷一八、雜下）にも、詞書と共に贈答の詠が載つてゐる。但しそれは保昌・式部・道命の關係ではなくて、道貞・式部・敦道親王の關係なのである。（本輯二四三頁頭註・本文參照）

ところで『後拾遺集』（卷一五、雜一）に次の歌が見えてゐる。

「赤染、右大將道綱に名たち侍りける頃遣はしける　　大江匡衡朝臣

あるが上に又ぬぎかくる唐衣　みさをもいかがつもりあふべき」

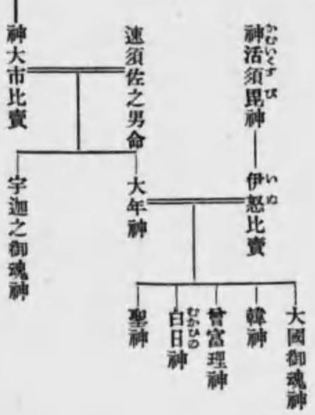
信太の森

式部の多情を戒めた當人が、小夜衣を重ね著たとて夫に抗議を申込まれてゐるも笑止、而も其の對手が、式部と浮名を流したといふ道命阿闍梨の父で、『蜻蛉日記』の著者の息といふに至つて、愈出でて愈興が深い。（右の歌は『大江匡衡朝臣集』『續群書類從和歌部所收』には出てゐない。）

和泉なる「信太の森」は名高い歌枕、『枕草子』（「森は」）にも無論數へられ、『古今著聞集』（卷五、和歌第六）にはこ

れを讀み込んだ本領安堵の一首を扇に認めて哀訴の尼に與へた頼朝の逸話が傳へられてゐる。殊に千枝の楠木（二四三頁頭註參照）とうらみ葛の葉（同上）とは、後の傳說界、淨瑠璃・歌舞伎界にそれ〴〵千枝狐・葛の葉狐となつて、『女夫狐』に『子別れ』に更に別樣の名聲を博するに至つたが、此處では直接必要が無いから詳說を略する。本書では少し文詞が明瞭を缺くが、其の信太の森が尾張の同名の森と夫婦の神で、男女の道の守神として民間信仰の對象となつてゐるらしい記述であるのが興味を惹く。さて其の信太大明神の祭神は大年神の御子聖の神であるといふ。其の叔父に當る神がかの宇迦之御魂神であるのを思へば、此の明神と狐との關係も全く緣由の無いことではないと言へる。

千枝の楠木とうらみ葛の葉



（『古事記』上卷に據る）

尾張のしのだの森とあはでの森

尾張のしのだの森といふのは未だ勘へ得ない。あはでの森は謠曲『あはでの森』に作られて、親子の悲劇を留めてゐる同國の一名所らしいが。

沙石集所載の說話

九　巫女の敬愛の祭

『沙石集』（卷一〇、一「佛敎の宗旨を得る人の事」）に

「和泉式部保政にすかられて、或巫をかたらひて、貴布禰にて敬愛の祭をせさせける。保政粗聞きて、かの社の木陰に立隱れて見ければ、年たけたる神子、赤幣立てならべたる周圍を樣々に作法して、鼓を打ち、まへをかき上げてたゝきて三返めぐりて、『是れ體にせさせ給へ』と云ふに、面打ちあかめて返事もせず。『何に是れほどの大事に、今は是れぱかりになりて、斯くはせさせ給はぬ。さらばなじに思食立ちける』とせむれば、保政くせ事を見てんずとをかしく思ふ程に、かくぞ詠じける。

ちはやぶる神のみる目もはづかしや　身を思ふとて身をや捨つべき

彼の心のうち、わりなく優に覺えければ、『保政これに候ぞ』と云ひて具して歸りて志淺からずなんありけり。これこそ格にかゝはりて振舞たらましかば、やがてぞ疎まれなまし。格を越えて却りて格にあたりて祈念も叶ひけるなるべし。」

とあるのが其の本據と思はれる。巫女の狀は、「胸乳を掛出で裳緒を忍垂れ」て、高天原をゆすり、八百萬神を咲ひどよませた「猨女君等が祖」神さながらの習俗である。

これとは別傳か或はこれの胚胎して來た原の傳說か一概には定められないが、神明感應の歌德傳說であると同時に、神明の詠歌傳說としても知られてゐるやはり和泉式部の歌に附隨した物語がある。そしてそれが又同じく貴布禰明神に關するものである。そしてそれが又やはり夫からすすめられた際の事なのである。卽ち『後拾遺集』（卷二〇、雜六、神祇）に

貴布禰明神の神詠說話

「男に忘られて侍りける頃、貴船にまゐりて、みたらし川に螢の飛び侍りけるを見てよめる」

と詞書のある「物思へば」の有名な歌と、それに對して「御かへし」とある「奥山に」の歌との一對の詠である。『俊祕抄』（卷上）・『袋草紙』（卷四、希代和歌「神明御歌」）・『十訓抄』（卷下、第一〇「可ゝ庶ニ幾才能一事」（一三）・『古今著聞集』（卷五、和歌第六）・『沙石集』（卷五（二〇）「行基菩薩の歌の事」）・『東齋隨筆』（詩歌類）の類何れも載せないものはない。社の中か

ら「忍びたる御聲にて」御返歌あつたといひ、誰とも知らず男の聲で式部の耳に聞えたともいひ、とりぐ〜その忝い御しるしを傳へようとしてゐる。『袋草紙』の如きは明らかに「貴布禰御歌」として掲げて怪しまない。

以上の諸書大抵「男に忘られて」或は「男のかれぐ〜になりける頃」と見えてゐるが、『俊祕抄』には

「和泉式部保昌に忘られて貴ぶれに參りて詠める歌」

と記し、『沙石集』には

「和泉式部保昌夫とかれぐ〜になりける頃、貴布禰に籠りて螢の飛ぶを見て」

とある。『無名草子』にあつては

「やすまさに忘られて、きぶれに百夜參りて」

と進展し、又『三國傳記』(卷一〔第二七〕和泉式部貴船參籠事。謂道德事)になると

「丹後ノ守橘ノ保昌ト契チ結タリケルニ、俄ニスサメテ漸カレ〳〵ニ成レリ。爰ニ貴船ノ大明神男女夫婦ノ中ヲ和ラケ玉フ御誓アリトテ、彼社ヘ詣テ此事ヲ祈リ申ケルニ」

といふやうになつてゐる。和泉式部の方も「越後ノ守大江雅輔カ女」といふので、「橘ノ保昌」と好對照をなしてゐる。

但し保昌との仲が圓滿でなくなつた事のあるのは或は眞であらうか。『家集』(卷四)に

「人の返りごとに

年を經て物思ふことは習ひにき花に別れぬ春し無ければ」

とある歌が『詞花集』(卷九、雜上)には

「保昌に忘られて侍りけるころ、兼房朝臣のとひて侍りければよめる」

といふ詞書で、初五が「人知れず」として出てゐる。が、事實は兎も角、傳說的にはなか〳〵振つた說話の形に進展したものである。

一〇 「山里」の詠歌問答

これは西行と人麿との歌道傳說が其の本據であらう。『三國傳記』(卷六〔第二一〕西行法師値ニ人丸一事)に次のやうに見えてゐる。

「(上略)西行宿ヲ尋ルニ、松一ト村ノ陰ニ尖頭(センカウ)ノ柴ノ戸アリ。内ニ白髮タル老翁一人坐メタノ月ニ嘯ケリ。西行立寄テ宿ヲ借ルニ、荒タル廬ノ習ナレハ、窓ヲ閉テモ月ヲ待。落葉ヲ拾テハ嵐ヲ燒キ、最幽ナル栖居ナリ。草ノ廬リ草枕、苔ノ衣苔莚、旅寢ノ殊ニ物哀ニテ、心ヲ傷シメケル折節、一村ノ松風暴クシテ十分ノ秋ノ月寒シ。西行一首ヲ讀テ主ノ翁ニ語リケルハ

山里ハイコソネラレネ寢(ヌレ)ハ(モスカラ)終夜松吹風ニヲトロカサレテ

老翁是ヲ聞テ不ニ取敢一申ケルハ

山里ハイコソネラルレ寢(ヌレ)コソ松吹風モヲトロカスラメ

ト讀捨テヌレハ、西行怪思ケルニ、曉風吹ニ客夢一夜月照ニ人愁一ヲ。夜既ニ明クヌレハ、主モ不レ見、廬モナシ。西行野キハノ里ニ歸テ、人ニ問ニ其當リニハ無ニシ人ノ栖家一。彼ノ松原ハ人丸ノ墓所ナリトモ云傳ヘタリトソ答ヘケル。サテハ彼ノ老人ハ人丸ニテヲハシケルニヤト日來ノ本望滿足シヌル上ハ、彌ゝ此ノ道ニ心ヲ盡メ過ケル程ニ、遂ニ建久九年二月十五日ニ、東山雙林寺ノ花下ニメ和歌ヲ詠シ、往生淨土ノ素懷ヲ遂ニケリ云々」

或は本書の所傳と雙方の本源をなした傳說が在つたのかもわからない。此の問答は小式部との間になされたのであるけれども、便宜此處で述べることにしたのである。

なほ、同じ近古文學で和泉式部をシテにした謠曲『誓願寺』『東北』(一名『軒端梅』)『和泉式部』(一名『書寫詣』)等の內容と本書とは素材上直接の關係は無い。

次はその小式部内侍である。本書では保昌と和泉との間に設けられたやうになつてゐるけれども、事實は橘道貞の妻であつた頃の子である。保昌の任地丹後に下るとて、都に殘し留める愛子を、中宮附の古參の女房大輔命婦に託した時の歌が『家集』(卷三)に見える。

「大輔の命婦に留まる人よく數へよとて

別れ行く心を思へ我身をも人の上をも知る人ぞ知る」

本書の紫式部が石山參籠に際して和泉式部を繼母御に委ねて行く構想の示唆を此處に得たのではあるまいかと強ひて臆測する要はなからうが、本書の紫の和泉に對する慈母の情は、かの「如何にせん」の歌德說話と共に和泉と小式部の上に移しても不都合はない。そして「親に先立つ道を知らねば」と傳說の歌に鬼神を動かした内侍は、やはり母に先立つて死出の山を越えた。母の和泉が哀傷悲歎の深かつたことは「諸共に苦の下には朽ちずして」(『家集』卷三、『金葉集』卷一〇、雜下・『寶物集』卷一「和泉式部並大江朝綱並大江匡房等歎の事」等參照)の有名な詠吟をはじめ、涙の手向を數々家集(特に卷三)や勅撰集(『後拾遺集』卷一〇、哀傷・『金葉集』(前出)等)や『榮華物語』(衣の珠卷)などに留めてゐるにも知られる。

小式部の情事

母の血を承けただけあつて、内侍は歌才に妙であつたが、又容姿も美しくしてローマンスの方にも後れをとつてゐない。關白教通・中納言定頼・頭中將公成など其の選まれたる對手であつた。

小式部内侍の許に二條前太政大臣はじめてまかりぬと聞きて遣はしける　堀河右大臣

人知らぬ(れすぃ)たさもねたしむらさきの根摺の衣うはぎにもせむ(やぃ)(なぃ)

かへし　和泉式部

ぬれぎぬと人にはいはむむらさきの根摺の衣うはぎなりとも」(後拾遺集卷一六、雜二)

といふ贈答には母が心得てあしらつてゐるし、其の大二條殿敎通に「死ぬはかり歎きにこそは」とよみかけた話は『袋草紙』(卷三)にも『宇治拾遺』(卷五、「大二條殿に小式部内侍歌よみかけ奉る事」)にも出てをり、歌は『後拾遺集』(卷一六、雜二)にも載つてゐる。其の御直衣の袖に刺した絲針の奇夢は『今物語』に傳へられ、公任大納言の子四條中納言定頼が、此の關白の臥してゐるのを知らずに内侍の局に訪ひ來て經を誦した話は、『宇治拾遺』(卷三、「小式部内侍定頼卿の經にめでたる事」)や『古事談』(第二、臣節)に見える。『古事談』にあつては敎通でなく、同じ道長の子頼宗(堀河右大臣)で、前の敎通が通つたと聞いて贈つた歌といひ、これも小式部に言ひ寄つた人の一人でもあつたらうが、右の傳說は何れが原であるかわからない。唯定頼の方だけは同じで、且同書の其の次の逸話と共に誦經の妙音は却つて道命阿闍梨と覇を爭はうとさへしてゐる。

『古今著聞集』(卷八、好色第一二)の記すところでは、「月」の字の下に「を」といふ文字ばかり書き添へて大二條殿に返した心得振、「さるすきもの、和泉式部が女なりければ」と、後の語りぐさにさへせられて不思議の面目を死後に施してゐる。(『鳴門中將物語』一名『なよ竹物語』の内容は、『著聞集』の此の條の說話と同じであり、無論それにも此の通り書かれてある。)

そして

「小式部の内侍といふ人、内大臣の御子などもたるが、此の年頃、滋野井の頭中將の子產みて亡せにけり」

とは『榮華物語』(衣の珠卷)の記すところである。内大臣は卽ち敎通、頭中將は中納言實成の子で祖父太政大臣公季に養はれて子となつた公成である。此の年頃とは萬壽三年、卽ち敎通の父御堂關白道長薨去の前年である。

併し本書はそれらに關係した資料には觸れてゐない。小才女、少歌人としての内侍を書き傳へようとしてゐる

だけである。それも、前に述べたやうに例の起死回生の歌徳の功は却つて母の方に奪はれてしまひ、有名な歌物語としては「いくのの道」の方だけが採られてゐる。

一一　「大江山」の秀歌　これは小式部の歌としては最も人口に膾炙せられてゐるもので、『百人一首』にも入つてゐることは誰も知る通りである上、それに關聯した逸話も亦有名である。そして其の對手がかの定頼の中納言である。『金葉集』(卷九、雜上)に出てゐる長い詞書にも

「和泉式部保昌に具して丹後國に侍りける頃、都に歌合のありけるに、小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを、中納言定頼局の方にまうで來て、歌はいかゞせさせ給ふ。丹後へ人は遣はしてけむや。使はまうで來ずや。いかに心もとなく思ずらむなど、たはぶれて立ちけるをひきとゞめてよめる」

とあり、こは如何にとばかり返歌にも及ばず、留められた袖を引放つて中納言は逃げ去り、小式部が「歌よみの世のおぼえ」これから出で來るに至つたと『十訓抄』(卷上、第三「不ノ侮ニ人倫一事」)及び『著聞集』(卷五、和歌第六)は記してゐる。『俊秘抄』(卷下)・『袋草紙』(卷一、「置白紙作法」)や『無名草子』等にも出てゐる。(謡曲「和泉式部」『新謡曲百番所收』)

初五だけで批判すまじき戒

では大納言經信としてある)本書では此の歌が、小松の祈りの歌徳説話に附随して語られてゐる。

一二　鳥ゐの歌と小松の歌　その姫小松の枯れたのを生かした事と、住吉の行幸に初めて帝の御前で「千早振る」の歌を詠じた二つの歌物語に就ては、未だ其の本據を勘へるに暨ばないが、後の『絵本姫文庫』や『絵本蘭奢待』の類に却つて之を載せてゐるのを看るのである。(五九四頁「影響」の項參照)

「千早振る」と詠みかけたのを母が制したといふに似た、初五だけで笑ふまじき戒の例話が『十訓抄』(卷上、第四「可ノ誡ニ入上多言事」)及び『著聞集』(卷五、和歌第六)に出てゐる。花園左大臣家の今參りの侍が、機織蟲を詠めとの

仰せを受けて取敢へず「青柳の」と打出したので女房共が笑ひ出した話と、寛平の歌合に「初雁」を友則が「春がすみ」と仕つた其の五文字が詠み上げられた時、右方の人々が辭を合せて嗤つた話とを類話として並べ、いづれも笑つた人々が却つて赤面した結果となつた名歌説話として掲げてある。

和泉式部の連歌

參考として掲ぐべきは、同じ「千早振る」を上に置いた連歌で、それが和泉式部に關してをり、社前の頓才といふ點では軌を一にするものである。

「加茂に參りたりしに、草鞋に足を食はれて、紙を卷きたりしを、何ちかやらん

ちはやぶる神をば足に卷くものか

と申したりしを

是れをぞ下の社とは云ふ

また同じ社にて

ちはやぶる神の忌垣も越えぬべし

と申したりしを

御幣共に如何で成るらん」、(日本古典全集本『和泉式部歌集補遺』(『後醍醐天皇宸翰本抄錄』))

前の方のは神主忠頼と和泉式部との連歌として『金葉集』(卷一〇、連歌)にも出てゐる。後のは上句だけは一層本書の歌に近い。場合と意味は全く異なるが、或は何か交渉を有つのであるかも測られない。而も其の上句は『伊勢物語』(七一段)の齋宮の女房の歌のそれと同じで、男の返しと共に『續千載集』(卷一三、戀三)にも收められてゐる。其の又『勢語』の昔男、『續千載』では明らかに「業平朝臣」にされてしまつた返歌の方は、『和泉式部日記』では式部から帥宮への御返しになつてゐるといふ複雑な關係がある。

伊勢物語と和泉式部日記

序に同じ上句を含む歌は『萬葉集』(巻一一)にもあり、それが『拾遺集』(巻一四、戀四)には下句が「わが身の」となつて「柿本人麿」として出てゐる。

枯木の蘇生と三十一文字の德

一方、枯れた蛭小松の蘇る歌の言靈は、「春な忘れそ」と說き示された主を慕うて心つくしへ雲を翔つた飛梅の傳說(『源平盛衰記』巻三二「北野天神飛梅」・『北野緣起』巻上・『榻鳴曉筆』巻二二「飛梅附老松」・『天神御本地』巻上等)にも劣らぬ奇蹟、「さりとては又天が下とは」の雨乞物語と同斷の三十一文字の歌德說話「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」ると同じく「力をも入れずして天地を動か」す藝術傳說たるに於て何れも變りはない。殊更、其の天地に訴へるに、小町も亦全く同じ「ことわりや」の理詰で呼びかけてゐるのであつた。(但し此の歌は慶長頃の或者の作つた狂歌であると、雄長老の『狂歌百首』附錄に見える由を述べて、『百人一首一夕話』(巻二)には辯じてゐる。)

紫式部の理想化

【構想・表現】 本書內容のどの部分が、又どの程度まで、作者の創意に成るものか、或は素材としての傳說の結象を觀てゐたのか、一々明確に察知することは困難である。前項に於て攻究したところも唯其の概見に過ぎない。これは本書に限らぬ事で、大體近古小說に於ては其の素材の本據が近代の馬琴流の讀本類に於けるが如く解明せられ易くない。それと共に亦作者の個人色よりも、國民的時代的民衆的な點に多くの興味と意義とが懸つてゐる事も當代文學の特質の一である。

『源氏物語』の作者紫式部が、妄語墮獄の方便說(『寶物集』巻四「不妄語成沙汰の事」・『今物語』・聖覺の『源氏物語表白』・謠曲『源氏供養』・御伽草紙『紫式部の卷』等)に應罰を蒙らされてゐる一面に於て、觀音の化身にまで神聖化せられ了る(『水鏡』巻下「第五十五代仁明天皇」・『今鏡』第一〇「作り物語のゆくへ」・『河海抄』巻一「料簡」・『石山寺緣起』・謠曲『源氏供養』等)ほどの傳統精神の中に育成崇敬せられて、かの不朽の藝術が愛好尊仰せられるにつけて、人間としても才貌性行

萬般に亙つて理想化・完全化せられて來るのは毫も怪しむに足らない現象であるが、本書の冒頭にもそれが遺憾なく表されてゐる。唯此の「院中」の「花」が、御定まりの或夜の不思議の夢想によつて身ごもるのは兎も角として、生んだのが和泉式部であるに至つては、何としても奇拔を極めてゐる。

和泉式部の可憐化

その又和泉式部が甚だしく理想化・可憐化せられてゐる。(後に述べる『別本小式部』では「貞女の心深かりし」人物になつてゐる。)才色の形容はこれも如何にも仰山であるけれども、所謂式部の歌らしい歌は餘り顧みられてゐない。其の正傳の生活の眞髓にも殆ど觸れようとしてゐない。此の人が霓裳羽衣の舞をゆるされるといふ滑稽事も目立つが、敬愛の祭では一段と其の測るべからざる妙技を發揮すべく餘儀なくされてゐる。尤も謠曲『誓願寺』では、佛果を得て「極樂の歌舞の菩薩」になつてゐると自身名告る位であるから、歌舞の下地はあつてもよいわけである。小鍋の歌を讀まされる爲に、俄拵への織母御に預けられねばならぬのも、當人には氣の毒で有難く、

顯著な時代色

作者には窮して通じ、讀者には迷惑で面白い。實母の紫が、歌をよみ習へと訓へるのは、そして

「いかにも古き歌の面白きを見て、それを本とせよ。伊勢・小町が詠みたらん歌を、よく〳〵夜晝二心なく稽古すべし」

(本輯二三四頁)

捨子

と敎へるのは、時代の歌道修行の精神と方式とを示してゐて肯けるが、これを茶化して一首をつらねる姫の方にも、時代の或氣分と歌風との新生面がおのづから顯れてゐる。「女房の振舞」の敎育方針は微に入つて、目・口の使ひ方に及んでゐるあたり、時代の他の敎科用書に劣らず懇切を極めるが、やがて伊勢物語の講義が始まつて、此處でも業平の異常の理想化と河內通の名歌の解釋と其の物語の說述とに時代色が溢れてゐる。

捨子に至つて又更に笑止千萬である。雲の上に宮仕する身が子持になつたのを恥ぢての決行である。而も公然

御伽草紙和泉式部と本書

と婚嫁を許されたばかりか、忝くも恩賞に下し賜はつた妻である。夢想さへあれば父無し子(?)を設けても許されるらしい官女もあるに、而もそれが自身の血を分けた生みの親なり自身なりの上によい手本を持合せてさへるに、さりとては遠慮過ぎた仕打である。若し口實を設けても捨子せねばならなかつたとすれは、道命法師といはず、夫の「少しすさむ」のも責任が何れにあるかは簡單に定められなくなる。

然し、それほど眞面目に論議するにも及ぶまい。これは先進の御伽草紙『和泉式部』の構想に學んだものらしく思はれる。

「保昌は十九、和泉式部は十三と申すより不思議の契をこめ、情深くして、十四と申す春の頃、若一人設け給ひ、あひの枕の睦言に、恥づかしとや思ひけん、五條の橋に捨てにけり。産衣あやめの小袖のつまに一首の歌を書き、箱なき守刀を添へて捨てけるを、町人拾ひ養育して、比叡山へのぼせけり」

その保昌が橘氏で、(道貞と混じたのであらう。『三國傳記』(巻一)や謡曲『和泉式部』でもさうなつてゐる。)和泉式部は「やさしき遊女」なのであるが――道長から「うかれ女の扇」と戯れ書された事が『和泉式部集』(巻二)に見える位であるし、不相應ではないかもしれぬが――此の捨子が卽ち道命阿闍梨であるのは、本書の和泉式部が紫式部の女であると正に好一對の奇拔さである。

萬一本書の方が古いならばその關係は逆であらう。御伽草紙の『子敦盛』にも類型の構想がある。相互の間に關渉がありさうにも思はれる。『和泉式部』の方が本書より一層荒唐な分子が多いと言へるが、

「もゝとせに又もゝとせは重ぬとも亡つ〳〵の名をばたえじな」

の歌を本書(二五〇頁)の「みなかみに」の歌と併せ見て、類似の俗臭味が感ぜられる。但し彼の數へ歌は本書に何

の關係もないやうである。なほ若し假に本書の方が早い作であるとしたら、小式部を先立てた事實が捨子の構想の示唆となつたかも測られない。

育て親のおうちとうば

捨子を尋ねめぐる式部が託宣によつて目的を果すのも在來の型なら、伴うて行く乳母のれんぜい(冷泉)も、近古小説や淨瑠璃に御馴染の一人である。曉が伏屋に宿りを乞ふ姿は、江口の尼と唱和した歌頭陀(『撰集抄』第九、(一一)「江口遊女成尼事」、謡曲『雨月』等)にも似てゐるが、事實式部自身も相似た旅寢の經驗もあつたことはあるらしい。丹後下りまでもなく

「　和泉式部石山に參りけるに、大津に泊りて、夜ふけて聞きければ、人のけはひ數多してのゝしりけるを、尋ねければ、あやしの賤の女がよれ白げ侍るなりと申しけるを聞きてよめる

鶯のゐる松原如何に騷ぐらむ　しらげばうたてさととよみけり」

(『金葉集』巻九、雜上)(日本古典全集本『和泉式部歌集補遺』參照)

謡曲『和泉式部』では、いとし子に死別した爲後世を願はうと、書寫の性空上人を訪ふ旅に作られてゐる。

伏屋の宿の主、拾子の育ての親は、意外にも『竹取』の翁夫婦か、さなくば『一寸法師』の「おうち・うば」か、童話の中から脫け出て來たらしい人々である。掌中の珠を生みの親に取戻されたのは力落しであるが、月の都へ永遠に迎へ去られたのでなくて、自分等も御供しての都上りはせめてもの仕合、殊更浦島太郎に由緣ある丹後國與謝郡を賜はつて、富貴萬福に榮えたとは、これも「めでたやく〳〵」であらう。保昌の任國、橋立の名勝とあれば、突飛な取合せではないが、何だか浦島と龜との夫婦の明神が、權に姿を現し給うたやうな氣がしてならない(御伽草紙『浦島太郎』參照)。姫が入れられて捨てられたのも、「玉の手箱」であつた。

さてその天才少女の小式部は又至極の小ましやくれ方である。捨子の無慈悲を母に恨むのは尤で、流石に一世の名媛も返す言葉が無いが、其の詠歌は何れも「ことわる」歌で、而も鼻につく小機智の他何ものも無い。都上臈の手ぶりをせゝら笑ふ天才振りも凄い。その難詰の歌が又恐しく論理的なのに、和泉式部ならずとも、唯もう兜を脱がさせられぬわけにはいかない。尤も「まだふみも見ず」の機才にしても此の傾向に漏れるものではないが。

表現の方法に關しては特に獨創的なところも無い。御伽草紙一流の無造作さである。而も餘りい、方の部ではない。素材の取扱ひ方に就ても勿論獨創的なところがあるといふのではないが、多分意識せずにやつたと思はれる其の無造作さの中に、別の意味での新奇さが時折見出されるのが面白いといふだけである。

要するに此の作は、其の末尾に記してある通り、徹頭徹尾「めでたかりし事ども」なり。めでたや〳〵」の作と言つて置けば無難であらう。唯、近古小說といふものの本體を解剖し、時代の心と姿とを直ちに觀ようとする時、種々の意味で興味深い資料を豐に提示してくれるのが有難い。

【題號・年代】 小式部内侍の事を書いたものであるから、それを題號とするに不都合はないが、内容は紫式部・泉式部・小式部と三代に大體等分に占有せられてゐて、聊か競演の貌である。小式部中心である別本の方が題號には恰當する。

年代は不明であるが、創作態度、内容の說話、思想傾向、文詞・用語等種々の點から觀て、室町期の作と推定してよいと思ふ。所謂御伽草紙の『和泉式部』などよりは後のものであるやうに思はれる。或は『浦島太郎』や『一寸法師』なども恐らく本書より早い作であらう。鎌倉季世の作と言はれる『香取本大江山繪詞』より後であらう事は考へられるが、御伽本と並んで行はれたとすれば、それに據つて御伽本に據らなかつたことも不思議とするに足

らないから、御伽本の『酒呑童子』より早い作とも一概には言へないであらう。併し大體に於て室町中期頃のものといふ感じがする。末期の作ではあるまい。

【文體・用語】 御伽草紙風の讀み物の文體口調であるが、「これをもんて(以)」(本輯二三四頁四行目及び五行目)といふ訛音のまゝ記されてあるところなどがあつて面白い。

用語の中で特に注意を惹くのは、「宮づき」(二三九頁・二四五頁・同頁)といふ「宮仕ふ」(自動下二段)の約つたと見られるやうな形の動詞で、加行四段に活用するらしい語である。『判官都話』にも用例がある(本輯二九五頁參照)。「宮仕ひ」といふ形から來たのかも知れないが、兎に角轉訛した一種の時代用語のやうである。「宮附く」の意とも解せられないことはないが、なほ「宮仕ふ」から來たと見るが合理的であらう。漢字を宛てれば「宮附く」と書くことになるのであらうが。

所謂「ゆふげん(幽玄)」といふ時代の流行語も屢〻用ゐられてゐる。(二三三頁・二四五頁・二四九頁等)

【原本並所在】 本書は新古の書籍目錄、解題書等に所見が無いやうである。寡聞の暨ぶ所亦、本輯所收のもの及び後に言ふ別本の他、傳存の有無を知らない。刊本も無い。

本輯に收めたのは、文學博士藤井乙男氏藏の寫本で、無畫、十行、袋綴の竪本(縱八寸、横六寸)、白色の表紙に題簽はなくて「小式部」と中央に書し、内題・奥書共に無い一册本である。

なほ今一つやはり『小式部』と題する家藏の一本が在る。市島春城氏の舊藏書で、これも御伽草紙風の物であるが、奈良繪入、十行、粘葉綴の上下二卷二册小形竪本(縱五寸七分、横四寸)、表紙は白地金銀泥草花模樣、題簽には「小しきふ上」「小しきふ下」、内題無く、下の卷末に「居初氏女書畫」とあるものである。

其の内容は本書とは全く別箇の作で、

「むかし一條院と申たてまつるみかどおはしましけり」

と書起してある小式部内侍の傳記物語である。稍まじめな作で、本書ほどの荒唐な面白味は薄い。小式部は住吉の申子といふことになつてゐる。此の草紙では明らかに小式部が主人公であるが、やはり歌物語が中心になつてゐる。「大江山いくのの道」の歌も無論あり、又これには「いかにせむいくべき方も」の方で且小式部の詠として例の歌徳傳説が語られてゐる。又かの「山里」の歌がこれにも出てゐるのを見れば、小式部母子に傳説的に附著して流布しつゝあつたのであらう。さうした意味では本書との間に關係があるとも言へる。但しその歌は

「山里もねられつるかなよもすがら　松ふく風におとろかされて」

といふのが和泉式部で、それを聞いて

「山さとはねられさりけりよもすがら　まつふく風におとろかされて」

と小式部が訂正するのである。そしてそれは保昌に伴うて丹後に下り、慣らはぬ旅寢の枕を佗びての母子の作で、小式部九歳の折といふのである。

本書と分つ爲に、假に『別本小式部』と名づけて置く事とする。（續輯收載豫定書目の一）

【影響】 必ずしも本書からの直接の影響とばかりも限るまいが、寶暦八年刊の『繪本姫文庫』（日本歴史圖會）第一一輯）には「小式部内侍院の御供して住吉へ詣で歌よみし事」といふ畫面に「千はや振」の歌（本輯二五三頁本文・頭註參照）が出てをり、又寛政二年の序のある『繪本蘭奢待』（『日本歴史圖會』第三輯）には、貴船の巫子の愛敬の祭（卷一）、小式部の「ことわりや枯れてはいかに」の歌（卷三）（本輯二五三頁參照）、「いかにせん」の歌（卷五）（本輯二三七頁參照）のそれ〴〵の畫面があるなど、これらの繪本類に取材せられてゐる諸傳説に觀るも、本書のやうな御伽草紙がかなり行はれ讀まれてゐたであらうことが想像せられる。

天狗の内裏

刊上下二卷一本

判官殿は七歳の年から此の鞍馬寺に登つて、學問を勵んで居られるのである。

もとより此の君は毘沙門の御再誕、既に其の七つの年法華經一部八卷を修得した程の利發さは、佛典聖敎の道は更なり、二千四百廿四卷の草紙を讀破し、十三歳にして一千七百則の禪機を悉く悟り明す秀敏さ、末怖ろしい鳳雛であつた。

或日雨中のつれ〴〵に、咲きうつろふ花を眺めて感ずる所あり、父の敵を討つべき大望有る身の只徒らに十三歳の今日まで過して來た事を愧ぢ、十五にならば先祖八幡殿に倣つて首途しようと決心し、それにつけても此の山奥に在ると聞く「天狗の内裏」といふものを一見したいと、心を碎いて尋ね巡り、終に毘沙門天に祈誓の誠を捧げ、靈夢の中では老僧に、又夜明けては廿ばかりの若僧と現じた多聞天の敎のまに〳〵、嶮しい山路を踏分け、五色の築地を目ざして急げば、果して音に聞く天狗の内裏は燦として眼前に顯れた。

牛若は怖めず案内を乞うた。鞍馬の寺稚兒七十五人が中から今日花の番に當り、思はずも此處へ迷うて參つた者と名告つたが、内裏の主、神通自在の大天狗は遙早くも此の公達の素性を悟り、急ぎ迎へ入れて正座に請じ、歡待の限りを盡くすのであつた。主人の招きによつて、愛宕の山の太郎坊・比良の山の二郎坊・高野山の三郎坊・那智のお山の四郎坊・かんのくらの豐前坊の五人、又暫くあつて大唐のほうこう坊・天竺のにちりん(日輪)坊の兩人、席上に飛來して見參し、大天狗に所望せられて、兩人は神通の妙技を、五人は兵法の祕術を、何れも珍客の御前に演じて酒興を添へ、次に主人の驍走とあつて五天竺の景色を眼のあたりに見せ申せば、御曹司の滿悅は上もない。

しかしそれにも增して嬉しい事があつた。奥から大天狗の御臺が美々しく裝うて出て來た。彼女はもと甲斐國ふたつばし(二橋)こきん長者の一人娘と生まれて、名をきぬひき姫と呼ばれたのが、十七歳の春花園山で管絃の遊に奏でた琴の爪音の、我ながらいみじく響いたのに不圖慢心が兆した刹那、忽ち天狗に攫はれて此の内裏へ伴はれ、七千年を夢と

過して來た今日しも、懷かしの人間界から貴い客人の御入來と聞くより、夫に懇願して斯くは若君の御前へ出たのであつたが、祝ひの九獻を勸められながら此の女人の口からして測らず聞き得た耳寄りの話がある。

大天狗は飛行自在、冥途へも往來する神通を得てゐる。戀しい時は月に二度三度も亡き兩親と相見ることの叶ふ事、これが此の魔界に住みながら許された唯一つの大きな悅と彼女は語つて、若君御自らの思召立ちの體にしてひたすら大天狗を頼み、今は大日如來となつて九品の淨土にましまします御父義朝公に對面を遂げ給へと勸めてくれたのである。

二歳の時別れた父に逢へる嬉しさに御曹司の哀願は熱心であつた。容易ならぬ望ながらと、「我と我との對談」の難問を試みた後、始めて大天狗は案内を諾し、裝束を改めさせてから若君を抱き上げ、冥途をさして急ぐのであつた。

先づ初は炎の地獄の物凄さ、次は女人の墮つる血の池の酸鼻、餓鬼道・修羅道呵責隙無き苦しみ、殊更父の敵を討ち得ぬ者の怖しい業報、一人出家すれば九族の餓鬼道の罪さへ救はれる功德など、或は懼れ或は敎へられつゝ、一百三十六地獄を巡覽する少年英雄の胸には無量の感慨があつた。(上卷)

二人は最後に十方淨土に到著した。此處は地獄の憂きに引替へて、其の樂しさ有難さ、中にも四方極樂世界、此の九品の淨土に中尊となつて立ち給ふ大日如來こそ正しく御曹司の父君にましましたのである。

大天狗は先づ入つて來意を告げた。如來は公正である。親子は一世、以ての外の事と對面は許されさうにもない。天狗重れて、若君が三世を悟る佛法者の由を述べて切に乞うたので、あら有難や、さらば此方へとて召された。

流石三世を悟つても凡夫の悲しさ、妄執の雲に御姿は遮られて、御聲ばかり嚴かに響いて來る。やがて數々の佛法問答が始まつた。彼一問此一答、淀みなき明辯に、如來大きに歡喜し給ひ、扇を天に投げ給へば、忽ち妄執の雲霽れて親子懷かしの對面に、互に先立つものは涙である。

後れの髪を掻撫でつゝ、果報拙い我が子の上を哀れと口說き立てる御佛は、やはり恩愛の人間であつた。そればかりか牛若は全く意想外の事を父から聞かされねばならなかつた。今、大日と拜まれる身にも、なほ脫れ得ぬ一つの苦しみがあるといふのである。他でも無い。都で平家の惡行が募るのを見る面目無さ、これが修羅の苦患の種。千部鳶部の經もいらぬ。只々敵を討つてくれよとの頼みの言葉に、牛若の覺悟は定まつた。今日からして出家の心を抛ち、平家討滅

を決行すべき旨を潔く誓つた。

義朝悦喜して、さらば汝が爲に過去・未來を語つて聞かせようと懇々と說き出した。其の中には、來年父が十三年忌の孝養に五條の橋で千人斬せよ。九百九十九人斬つて後、現れた武藏坊辨慶は助けて家來にせよといふ事もあつた。吉次を輕んで奧下りする途に關原與一を無禮討する事もあつた。我が子の後を慕うて下る母常磐の非命の死、それを殺した夜盜熊坂の一類が、美濃の垂井宿の吉次が宿に襲うて來たのを擊殺して仇を復す事もあつた。駿河國番場宿で疾を得、吹上濱六本松に棄てられて一旦絕息する事、三河國の淨瑠璃姫に救はれて蘇生する事もあつた。讃岐國法眼の兵法の卷物を、其の一人姫の皆鶴に契つて奪ひ取り、又鬼の島に渡つて、八面大王の同じく一人姫あさひ天女の婿になり、四十二卷の虎の卷物を引出物に取つて歸る事にもなつてゐた。奧秀衡・佐藤の援を得て、愈〻十八といふに五十萬騎の大將として都に攻め上り、姪が小島から討つて出た兄輕朝と心を合はせ、平家を四海に滅ぼす戰に、繼信が身替の勇死も前世からの約束であつた。天下の治定は牛若廿一歲の時、兵衞佐は關東の鎌倉殿、汝は都堀川の御所と仰がれるが、梶原が讒言に兄弟不和となり、汝三十二歲の四月廿九日、奧州高館の露と消えねばならぬ。それも是非無き宿因といふのは、前生に輕朝・時政・景時坊とて廻國の聖達があつたが、各〻兵衞佐・北條四郎・梶原と生まれ替り、又汝は其の折大和の社に籠つてゐた鼠であつたのが、彼の頭陀の笈に飛入つて六十餘州を廻つた功德で人身を受けた代りに、其の中の經卷の文字を喫つた憎さを、忘れられぬ景時坊が現世で怨を復すの果を結ぶのであると、委に訓へ示された。

語り終つて大日の義朝は、障子を開けて淨土の靈境を拜ませ、又娑婆三千大千世界の現狀をも一目に見せて、返す〳〵念佛信心を怠るなと戒めつゝ、名殘を惜む我が子を、未だ娑婆の緣盡きぬ故と諭して歸途に就かせた後影を涙と共に見送られるのであつた。

内裏に還つた牛若は、御臺に厚く禮を述べた後、改めて大天狗と師弟の契を結び、再訪を約して暇を乞ひ、黃金の門まで送られて、さらばと云ふかと思へば、身は已に東光坊の中の座敷に歸つて居られた。（下卷）

【性質】　近古文學、特に武勇傳說を題材とした物の中で、曾我物と並んで、目立つて一群を作り成してゐる義經文學（判官物）の圈内に屬する作品である。卽ち「判官最眞」の對象たる牛若丸の源義經乃至義經傳說を取扱

つてゐる小說である。そして其の牛若丸が地獄極樂廻をしたといふ說話を內容としてゐる。併しそれは當中の人物が義經及び義經傳說に關係してゐるといふ意味で之を義經文學と呼ぶに何等の不都合は無いが、其の說話の主題と作者の創作態度及び作品の主調から言へば、これ亦近古小說中に一群を形成してゐる佛敎物、就中法談物と觀る事も毫も妨げない。更に素材としての說話が、

「當時牛若に關していかに荒唐なる傳說の行はれたるかを知るに足るべし」（『近古小說解題』二九七頁）

と平出氏をして言はせたやうに、洵に奇拔無稽のものであるが、若し卑見による推定が是認せられるとすれば、此の傳說の形態が義經傳說らしく無い理由と、作品としての本書の內容が純武勇譚を主題としてゐない（無論近古文學の武勇譚にして佛敎色を帶びないものは稀な位であるけれども、本書の如きは明らかに武勇譚的主人公が方便に借りられ過ぎてゐる。）意味とが、無理でなく首肯され得る。

が兎も角義經物の中では確に異色のある作である。そして結局が平家討滅の使命について亡父から懇囑し激勵されるのであるから、やはり義經文學として、『御曹司島渡り』と興味ある對照をなす御伽草紙の一篇と目するには十分である。

又地獄極樂廻說話を取扱つたものとして當代の『富士の人穴草子』等と對比し、同時に此の思想、此の說話形態の史的展開を考察する一資料として意義在る物たるを失はない。

若し亦これが果して羅馬神話―羅馬建國敍事詩『イニード』中の一節の變形轉化であるならば、比較說話學の上からも、國民傳說としての立場からも、東西文化の接觸、內外交通史研究の側から言つても、小さいながら好箇の參考資料が提供せられることともなるであらう。

【素　材】

先づ部分的に觀て行くと、

遍歷說話の一種

一　地獄極樂廻り　言ふまでも無く三國相傳の佛說に由來してゐる架空的な一種の遍歷說話式の說話型である。完型を成したのは後の事であるが、其の萠芽なり原型なりはやはり印度に發生してをり、說話としての日本化しつつある姿は、之を既に早く『靈異記』『今昔』等に容易に檢出し得る。それ以前の佚散した文獻にも語られてゐたであらうし、鎌倉から室町へかけては愈〻進展し增生して來てゐる。上古の固有思想の中に成育した冥界の觀念――それも種族的・地方的及び時代的の混錯もあるであらうが――乃至伊弉諾神の黃泉國行（『古事記』上卷・『書紀』神代卷上）・大國主神の根の國行（『記』上卷）の神話等は、外來宗敎の附屬物としての右の說話の播布を受容し同化する素地を作るには無論與つた筈であるが、說話としての相互の直接關係は殆ど無いと言つてもよい位である。少くとも所謂地獄極樂廻說話は上古日本神話に直接系統を引くものではない。

地獄極樂傳說のいろ〳〵

此の說話型は其の源流に於ては、亦日本化してからの形に於ても、單なる報罰墮獄譚や（例へば『日本靈異記』中卷「智者誹二妬變化聖人一而現至二閻羅閻一受二地獄苦一緣第七」（『今昔物語』『日本往生極樂記』等にも見える。攷證『今昔物語集』（本朝部上）卷一一、第二話の條參照））、墮獄回生の奇話や（例へば前揭の說話、又同書上卷「非レ理奪二他物一爲二惡行一受二惡報一示二奇事一緣第三〇」（攷證今昔物語集卷二）、聖衆來迎の往生談や（『今昔』『日本往生極樂記』や『續本朝往生傳』やを始め諸書に例話は夥しくある。）も多いが、稍此の遍歷型に向つて近づいて來てゐるものとしては、或特定の目的を以てしての冥府往訪の傳說（例へば目蓮救母傳說や『今昔物語』卷一四「越中國書生妻死墮二立山地獄一語第八」（此の地獄譚は空想のみでなく、多少地理的事實を根柢としてゐる成。なほ立山地獄の事は同書中他にも載せてゐる。）、妖術又は夢想に因つて寂光淨土の實現した說話（前者の例は『十訓抄』卷上第一「可レ定二心操振舞一事」の（七）、及び謠曲『大會』の內容、後者の例は『日本往生極樂記』の智光・頼光の傳說）等を擧げてよいであらう。『三國傳記』（卷六〔第二二〕「阿彌陀佛作二大魚一引二撈漁人一事」）の印度說話

目蓮救母傳說

も一種の淨土見物記である。就中盂蘭盆の由來傳說として遍く流布した目蓮尊者救母傳說（『佛說盂蘭盆經』『佛說報恩經』）は『今昔』には見えないが『三寶繪詞』（下「七月、盂蘭盆」）・『私聚百因緣集』（卷三〔一〕「目連神通事付救母亦降龍事」）・『三國傳記』（卷九〔第一〕「目連尊者救母事」）等に收載せられてゐる。『今昔』（卷一九「僧蓮圓修二不輕行一救二死母苦一語第二八」）の大和安日寺の僧の地獄行物語や、『三國傳記』の支那說話招對蘇生の奇聞（卷七〔第七〕「招對於二地獄一値二亡母一事。關城事」）なども、恐らく此の佛說から派生し或は影響を受けた、そして同じ地獄遍歷救母說話であると言へよう。

富士の人穴草子

一方地獄極樂の狀景は、如上の說話中に述べられてあるばかりでなく、地獄繪（『枕草子』春曙抄本卷四・『榮華物語』「さまざまの悅」卷等に其の名が見える）や曼陀羅などを始め諸種の佛畫や戲畫等にも描き出され、近古に降つて通俗說法の盛んとなるに隨ひ愈〻利用せられ、後には勸進比丘尼の地獄極樂の繪解などまで流行して來るほどで、同じ近古の小說中にも『富士の人穴草子』の「仁田たゞつな」の地獄極樂廻がある、又甲賀三郎の地獄廻の武勇譚も傳へられれば、『太平記』（卷三〇「結城入道墮二地獄一事」）にも阿鼻地獄に墮ちた結城上野入道道忠の業苦を目睹した所緣の律僧の奇談がある。本書の成る以前に此の說話型は略〻完型を成すまでに發達を遂げてゐたことは確であり、如上の諸說話との間に直接間接の交涉の有るべきことも推測に難くないところである。作品として又說話として、一々本書との先後及び影響を明確に斷定するのは容易でないが、大體に於て右のやうに言つても誤りは無いと信ずる。

即ち佛說に胎生した各種の墮獄譚や往生談の類が遍く語り傳へられ信ぜられて來ると共に、地獄と極樂とを對比的に眼前に展開せしめて無知の民衆の敎化に資せんとする方便的な動機と說明の方法とから、幽界見物の說話

が進展して來たのである。それには又巡島說話・遍歷說話・旅行見聞談等に共通した心持と其等の說話竝びに事實の流行との幇助が與つてもをり、來世知識の敎訓的意義よりは好奇心とユーモアに支配されようとするかなり餘裕あり茶氣のある所謂地獄極樂廻說話の發達・成型・流布を看るに及んだのである。

天狗と地獄極樂

序に、天狗の案內で冥界に赴くこと、乃至は天狗が神通を以て地獄極樂に往來することは、漠然たる有りさうな假想としてもよし、又後に說くやうな本據說話の移植から來た必然のそして偶然の結果としてもよいが、此の空想もやはり或一つのはつきりした形象を結ぶべく、民衆の傳說心が動いてゐたことも測想し得る。前に引いた『十訓抄』乃至謠曲『大會』の靈山映現者は卽ち小神通を得た天狗であつた。又『日本往生極樂記』の

「夢左右之腋忽生二羽翼一、向二西飛去。過二十萬國一、到二七寶池一。自見二其身一、以二大佛頂眞言一爲二左翼一、以二法華經第八卷一爲二右翼一。廻二望此界一、寶樹樓閣光彩曜映。有二一聖僧一語曰、汝今所レ來者、極樂邊地也云々」

とある陸奧國新田郡小松寺の僧玄海は、少くとも羽翼の生じた僧侶である形から言へば、先づ天狗に緣遠い姿ではあるまい。

天狗の正體と其の傳說的進展

二　天狗の內裏　天狗は通俗には、鼻高で羽翼をつけた山伏姿として考へられてゐる。しかし此の形貌に落ちつくまでには、いろ〳〵の過程・段階があり、又、性質・行動の上の變化もある。或は其の本體を星となし（『史記』卷二七、天官書第五・『日本書紀』卷二三、舒明紀）、又は治鳥と呼ぶ鳩に似た鳥であると云ひ（『廣益俗說辨』遺編卷五、奇獸「我朝の天狗はもろこしの治鳥といふ說」參照）、或は又素盞嗚神の胸腹から吐出された物の化した神獸とする（『舊事紀』『桂林漫錄』卷上、天狗の條參照）など諸說あるけれども、要するに我が國傳說界で作り上げられた怪物の一種である。其の始は印度から支那を經て渡來した佛法障碍の外道であつたらしいことは『今昔物語』（卷二〇「天竺天狗聞二海水音一渡二此朝一語第一」・「震旦天狗智羅永壽渡二此朝一語第二」等）の語るところによつても知られるが、目に見えぬ妖魔として物氣の祟をもなしつゝある間に、漸次形體をも賦與せられて來、鴉形や狗形やの動物の姿から次第に人間化する傾向を示し、鬼形・僧形・修驗姿と現れて來るやうになつたやうである。其處には又此の輪入魔と固有の靈怪思想との接觸があり、一方に於て人間自身が慢心や呪ひの心から生きながら此の魔界に墮ちるといふ迷信も進展して釜、人間との境界線を朦朧たるものにして來た感がある。

天狗と猿田彥

鼻高は高慢心の表徵でもあらうが、なほ實在のモデルとして選ばれたらしい

「其鼻長七咫、背長七尺餘、當レ言二七尋一。且口尻明耀、眼如二八咫鏡一而赩、然似二赤酸醬一也（『書紀』神代卷下「一書」）

といふ猿田彥大神と合體したのは何時からか判然せぬけれども、內大臣實守に行き逢うた今參りの田舍武士共が驚歎した事を記して、

鼻高の內大臣

「あな恐し、山伏とも見えず、まして人にはあらじ、天狗のたぐひにてあるらんと言ひけるを聞かせ給ひて、天狗とも言はば言はなむ言はずとて鼻低からぬ我が身ならねば極めて御鼻の高く渡らせ給ひけるを、言ひあてにけりと、後までをかしがらせ給へりけり」

と『吉野拾遺』（下卷、一一「鼻の高き狂歌の事」）に見えてゐるに觀れば、南北朝時代までには、所謂鼻高の山伏姿は最早定型に固まらうとしつゝあつたことを知り得るのである。鳥天狗式形貌の暗示竝びに成長は既に一層早く諸文獻や繪卷に散見してゐるが、此の方も例の有名な高時天狗舞傳說の田樂法師の狀を

「或は鬚勾つて鴉の如くなるもあり、或は身に翅有つて其形山伏の如くなるもあり」

と寫してゐる『太平記』（卷五「相模入道弄二田樂一並闘犬事」）の文を引く事によつて當代全く成形を觀つゝある事を愈、

明示することが出來る。

天狗の棲處

今、天狗其のものの攻究が主題で無いから、略述に留めたが、此の怪物の棲處が深山幽谷と考へられ、又飛行自在で人を攫ひ或は惱ます話は餘りに尋常事として古くから諸書に數多く傳へられてゐるところで珍しけも無い。其の棲處が一種の仙谷・靈地とも目せられて來るのも不自然でなく、特に天狗が人間的になればなる程其の住居も人間的とならずには置かぬ筈である。そして僧形或は山伏姿といふ點からして、大伽藍・大僧坊であるのが先づ最も自然であらう。舞曲『未來記』がそれである。又『太平記』の解脱上人の見た魔王の宮殿の幻影も、これに共通した類想である。そして一面に於て天狗が神仙に近づくと共に其の巣窟が蓬萊思想に連絡した一種の人外神祕境と化し、又淨土安養世界の光明にも照らされ、他面に於て彼が人間に近づくと共に、其の團體の主長として屢、意表外にも高貴の御方を迎へ奉る機會にすら遭遇し、而も其の行在所として、或はさならずとも、一般民衆の憧憬の標的たる九重雲深き邊の聯想が結びついて來ることは又奇とするに及ばぬのである。天狗の内裏といふ考も、決して不相應な空想とのみ一笑に附し去ることは出來ない。

謠曲鞍馬天狗と舞曲未來記

三　鞍馬天狗傳說　牛若丸が鞍馬山東光坊の阿闍梨蓮忍乃至は其の弟子禪林坊阿闍梨覺日の許に預けられて勉學した事は、『平治物語』(卷三「牛若奥州下りの事」)『義經記』(卷一「牛若鞍馬入の事」)等の語るところ、鞍馬寺で修行した由は『盛衰記』(卷二三「義經軍陣來」・卷四六「義經始終有樣」)にも傳へてゐるが、其の山奥の僧正が谷で天狗から兵法の傳授を受けたといふ傳說は、謠曲『鞍馬天狗』舞曲『未來記』に於て始めて完成せられてゐる。尤も傳說としての姿態は謠・舞曲の素材となる以前に略成りつゝあつたのであらう。其の過程の大凡は『義經記』(卷一「牛若貴船詣の事」)及び『平治物語』(京師本及び流布本卷三)を通しても想像し得られ、又此の傳說が完型を獲る爲には、支

張良の兵法傳授傳說

那說話の張良・黃石公傳說が寄與してゐるものがあるであらうことは、時代思潮の外部的傾向のみならず、『鞍馬天狗』の謠曲自身の中に内據を有してゐるのでも推測することが許されよう。(『日本文學講講』第二卷、中世一六八頁—一七〇頁、拙稿「義經記と義經傳說の展開」(ろ)鞍馬天狗傳說の項參照)

即ち此の傳說は鬼一法眼傳說竝びに御曹司島渡傳說等と共に、義經の軍略・兵法を神ならしめ且由緒づけようとする動機から生まれ、而も時代の祕事傳授の風潮傾向を反映してゐるものであるが、此の傳說の展開を主として考察するのは當面の問題ではないから茲では省略するとして、本書の說話に在つては大天狗はツレ役たるに留まつてはゐるものの、冥界案内者としては洵に其の人を得たものと言ふべきである。其の妻女たる天狗の内裏中唯一人の人間、「甲斐國二つ橋こきん長者の娘きぬひき姫」の天狗界入りの徑路は、自己の樂才に就ての慢心に兆してゐる所謂謠曲『樒天狗』式の套型で、特に異とするには足りないが、所謂鞍馬天狗傳說には普通は緣由の無い人物である。愛宕山の太郎坊・比良の山の二郎坊は舞曲『未來記』にも活躍し、謠曲『花月』にも名は見える。其の愛宕山の太郎坊を案内に賴んで日本の佛法を妨けようとした「大唐の天狗の首領」は「善界坊」であつたが(謠曲『善界』)、本書では其の名では無い。

謠曲鞍馬天狗と本書

なほ、本書の文中、特に

「源此由聞召し、我等と申すは、此山にて學問致せし少人なるが、當山にて七十五人の稚兒の中より、今日それがし花の番にさゝれ申して、花を尋ねて出てければ、かゝる内裏へ參りたり」(本輯二五九頁)

「今よりして師弟の契約申すなりとて出て給へば」(二八二頁)

などあるのが、或は『鞍馬天狗』の謠曲から出たのであらうかと思はせられる節々である。

四　未來記　未來記は一種の豫言說話型である。完全な形を具へた本態としては、時世の將來の變轉歸趨、若しくは個人或は一家・一氏族・一國等の未來の命運に關する組織的解明的（暗示的だけに止まらずして）な豫斷の顯示であることを要する。顯示者は神佛・亡魂・妖魔・動植物の精靈・豫言者・占巫等種々であり、場合も夢想・靈感・告知・祕卷の傳授等各樣あり、單に語を以てするだけでなく、眼前に實況を髣髴させることもあり、又因果の理を詳らかにする爲に、未來記に對して過去記といふべき前生譚が併せ說かれることも屢〻ある。

未來記の名稱及び由來

但し右は說話の形態に就て言つたので、未來記の名稱及び由來は、未來に關して記された豫言の祕書といふに盡きる。そして其の典型は卽ち天王寺の上宮太子筆といふ祕卷の一軸、『太平記』の所謂「日本一州の未來記」（卷五・卷六）である。此の「不思議の記文」（『太平記』卷六「正成天王寺未來記披見事」）は、なほ謎語の圈內を脫してゐないものであり、和漢に類例の多い時世諷刺や豫言を意味する童謠・流言の流れを酌むものであるが、これが祕卷となり未來記の名に呼ばれて、形體を賦與せられて來たところには、やはり時代の祕事口傳尊重の風潮の具象化を看得るのである。

太平記中の未來記型諸說話

說話としての進展は、此の祕卷の名稱及び實現に借りた意味、亦負ふところも尠くない事は無論であるが、其の形態の成生は既に古くから徐々に竝行的に展開しつゝあつたことは疑も無く、又其の完型に到達したのも略〻同じ當代であらうことも測知し得られる。其の「東魚來呑二四海一」豫言書を載せてゐる『太平記』の中に於て、所謂未來記の說話型に屬すべき說話を收めてゐるもの一にして足りないのである。「解脫上人事」（卷一二）、「宮方怨靈會二六本杉一事」（卷二五）、「雲景未來記事」（卷二七）、「吉野御廟神靈事」（卷三四）等皆それである。又、時政に關しての江島辨才天示現傳說（卷五「時政參二龍江島一事」）も北條氏の未來記と言つてよいし、此の種所謂未來記と名づける程

でも無いやうな、或は未來記の甚だ單純な形をなしてゐるものは、先進・當代の說話文學や軍記物等に夥多に存するところで、此の說話型の展開の跡を窺ふに十分である。

舞曲未來記と謠曲沼搜

舞曲『未來記』に至つては、其の題名にまで呼ばれてゐる通りに、それが——天狗の未來記が——一曲の主題を成してゐる。謠曲『鞍馬天狗』の大天狗も、未來記を簡單に語るのである。天狗ではないが謠曲『沼搜』（『新謠曲百番』所收）——これは舟辨慶傳說の變形であるが——にも未來記が語られてゐる。而も其の語られるのが共に義經乃至源家の未來記である點でも、亦諸種の點で直接か間接かに本書と關係の有る作品であり說話である點でも、特に注意を逸するわけにはいかない。本書の未來記は、比較的に後に發生したと推知し得べきものまでも併せて義經傳說の殆ど總べてを網羅しようとしてゐる觀があるに對して、舞曲『未來記』の事件內容が『平家』『盛衰記』の記述程度に彷徨してゐるに觀れば、本書よりは新しくない事の內部徵證が示されてゐると言つても大過無からうかと思はれるし、其の他の點からも、本書に對しては、直接であるかは斷言出來ぬが、粉本の一としての役目を分擔させられてゐるといつた位置に在るもののやうに思はれる。『沼搜』の事は後にも述べねばならぬ。

崇德院の未來記

なほ此の說話型に屬する說話で最も有名なのは、崇德院の未來記である。『源平盛衰記』（卷八「讃岐院」・卷一二「敎盛夢二忠正爲義一」）・謠曲『松山天狗』等まではなほ完型を成してはゐないけれども、明らかに其の進展の道程に在り、一方『保元物語』にあつては、却つて可憐な乙若によつて語られる未來記が此の說話の進展の方向を暗示し（卷三「義朝幼少の弟悉失はるゝ事」・同卷「新院御經沈めの事 崩御の事」）てをり、又『太平記』の「雲景未來記」に於ては、かなりに進んでをり、かくして後の『雨月物語』（卷一、白峯）に至つて、纏まつた一箇の作品となつたと共に、說話としても本型の完き形にまで發達を遂げしめられてゐる。更に『弓張月』に、又近くは露伴の『二日物語』に移承せら

天狗の未來記

謡曲沼捜と本書

太平記の時政前生譚

れた事は改めて説くまでも無からう。本書と此の説話との直接の關係は無いであらう。唯、これ亦天狗の未來記であるといふ事實に於て、舞曲『未來記』とも謡曲『鞍馬天狗』とも、『太平記』の「雲景未來記」や六本杉の怪事等とも、或は聯關し或は同想である點で好資料であり、其の意味で本書との關係が見出されるのみならず、此等が魔神の未來記であるに對して本書のが靈佛の未來記である事の對照が面白く且注目せらるべき所であらう。

五　義經の前生譚　未來記の内、梶原讒言の由來に關して説明を與へてゐるところの賴朝・時政・景時並びに義經の前生因緣談は實に滑稽なものであるが、これは謡曲『沼捜』の二位尼の亡魂が告げる過去談のそれと略、同一の傳説である。そして恐らく其の原形と覺しき時政前生譚が行はれてゐたことは前にも言及した『太平記』（卷五「時政參二龍江島一事」）の所載によつても知られる。『廣益俗説辨』（正編卷一二、士庶「北條時政は法師時政が後身といふ説」）には出處を示さず「俗説云」として出てゐる。此の方は單獨に時政のみに關してをり、他の人々には觸れてゐないが、六十六部の法華經を書寫して六十六ヶ國の靈地に奉納したといふことになつてゐる點は略、相應じてゐる。文獻としては『太平記』の方が早いが、内容の傳説まで、前の方よりは早いといふ確證は無いけれども、或は偶然に同名の僧侶の行迹からでも發生した傳説ででもあり、或は、全く故意に構へられた因緣談であつたとしても、時政一人に就てのみの方が自然さも多く、又説話の單純な點でも、普通の場合から言つて、此の方が古いと觀て矛盾は無い。況や本書も『沼捜』も作品としてはずつと後のものであると考へられるから其の點でも背馳しない。

何れが原形に近いものであつたかは兎も角もとして、九郎大夫判官が梶原の背負うた笈の中の小獸（『沼捜』には「白色の鼯鼠」と詳述してある）だつたとは、何としても少々珍説の域を超え過ぎてゐるやうである。其の一生が運命の傀儡にも似た數奇を極めたものであつたにせよ、又、經卷の功力驗德の誇張された讃の方便に借りられたにもせよ、如何に向齒猿眼色白の小男なればとて――或は此の容姿が其の聯想の誘導を一層簡易ならしめたかはわからぬが――假にも毘沙門天王の再誕、おきくるみ大明神の御本體が、識らぬ間に賴豪の緣類に墮されては、意表の外の迷惑であらう。

印度の因緣譚

右の傳説の本據は詳らかにし難いが、單に鼠が一比丘の誦經を聞いた功德で人界に生れたといふ印度説話は、古くは『今昔物語』（卷四「天竺僧房天井鼠聞レ經得レ益語第一九」）に、近くは『三國傳記』（卷一二「第四」「鼠聞二律藏一功德事」）に載つてゐる。

附記　『三國傳記』の記載は、『三寶感應要略錄』（卷中「鼠聞律藏感應篇」）の文（『攷證今昔物語集』天竺震旦部、三二二―三二三頁にも出てゐる）と殆ど同じである。

或は前記の時政法師の傳説とこれなどが結び附いて茲に言ふ義經前生譚の素描が成つたのでは無かつたらうか。『今昔』の方は稍異傳であるが、白色の鼠である事と法華經の功德である事とは『沼捜』に應じ、又賴朝と時政と奉納者を異にはしてゐるけれども、全國に法華經を納める事に於ては、『沼捜』と『太平記』乃至『俗説辨』の所謂「俗説」とは一致してゐる。本書のは簡略であるが『沼捜』のと同源（或は『沼捜』の内容の方が古い形）と見得べく、而も時政も加はつてゐる。又若し白色といふ點が强められて説かれることになれば、所謂壽百歲を重ねて千里之外を察知する神鼠の部類に屬する以上、三井の惡僧とは聊か所出を同じうしてゐないものがあると辨ぜられねばなるまい。併しそれも「鳥」では又、餘り有難く無い野良者の仲間で、普通の鼠よりは一段下品の方らしい。何れにしても本書の記述では問題にならない。

六　本據説話――羅馬建國敍事詩『イニード』（イニーアスの地獄極樂廻り）　以上は大略部分的に本書の素材に就

て攻究してみたのであるが、前述の斷片的な要素の有意的及び無意的の結合が本書内容の說話を作り上げたと論定してしまふ前に、大體の骨子を少しも歪めずに、全說話殆ど其のまゝと言つてよい姿を、意外にも泰西說話の中に見出し得るのである。それは羅馬の建國詩として知られてゐるヴァヂル(ギルギリウス)の『イニード』(『エネイス』)である。其の第六卷目のイニーアスの地獄極樂廻りの段である。

ギルギリウスのエネイス第六卷

兩傳說の相似

即ち同敍事詩の主人公トロイの勇將イニーアス(Æneas)は、ホーマー(ホメーロス)の『イリアッド』に名高いかの所謂トロイ(トロヤ)戰爭に敗れ、傷いた父を肩に圍を脫し、海を渡つて伊太利に遁れ、其處で終に羅馬國の基を打建てることになるのであるが、其の亡命の途にして世を去つた父アンカイシーズ(Anchises)に、再び極樂(イリジアム)(Elysium)で對面を遂ける事まで、さながら本書の說話に吻合するのである。今、兩者の大節を項目式に書き竝べて對比すると、

イニーアス傳說

一 イニーアス伊太利の海岸に到着してアポローを祀つた聖山に登り、巫女の洞を訪れて神託を聽く

二 夢に現れてイニーアスを招く父に尋ね逢ふべく、冥府に入る方法を巫女に詢ると、巫女は黃金の枝を森林中に求めよと命じ、之を獲た後、導いて地獄に赴く

三 先づ噴火山の火口から入つて、殺生湖を通過する

天狗の內裏

一 牛若丸鞍馬の毘沙門堂に祈つて天狗の內裏を見んと願ひ、夢想により山奧に入つて之を尋ねる

二 天狗の內裏に到り、其の主の妻の勸めによつて、父に逢ふ爲に冥府の見物を大天狗に願すると、天狗は法問を以て牛若を試みた後、案內を諾する

三 先づ炎の山の地獄と血の池の地獄とを觀る

四 黑河を渡り、嬰兒界・寃死界・自殺界・哀傷界・勇士界等の各地獄を巡る

五 最後に極樂に到つて亡父アンカイシーズに會ふ

天狗の內裏と巫女の洞

六 父からトロイ人の未來と、イニーアスの世界征服の豫言とを告げられる

黑河の渡守ケーロン(Charon)や、哀傷界でイニーアスが邂逅するカーセーヂ(カルターゴ)の女王ダイドー(Dido)や、リーシー(Lethe)の忘水の事や、彼に在つて此に無い人物や場面も無論あるが(それは主として彼我思想上・信仰習俗上及び原說話の內容の相違等に因るものである)、極樂境に於いてアンカイシーズが生類の本質は靈と土との混合物であると說くなどは、大日との佛法問答に、人の生命が盡きれば木火土金水の原質に歸すると答へる牛若の論辯に極めて都合よく應じてゐる。天狗の內裏は即ち『イニード』の巫女の洞("tecta Sibyllae")に當るのであるが、ドライデンの英譯などではこれ亦誂へたやうに "The Sibyl's Palace" と飜譯されてある。又ネットルシップ、ワグナアの註には "seems to be the temple" としてある。

七 餓鬼道・修羅道等一百三十六地獄を廻る

八 最後に九品の淨土に赴いて今は大日如來となつてゐる亡父義朝に會ふ

九 父から牛若自身の未來記、平家を滅して天下の武將と仰がるべきことを豫言される

かく觀て來ると、かの甲斐國こきん長者の一人娘きぬひき姫は即ち此の巫女の變形たる大天狗の分身として、同時に原說話の佛を纏に殘してゐる人物とも看られ、又大天狗の案內で冥府へ入るに先づ炎の山の見物から始まる遙り、ヴィシューヴィアスの噴火口でも聯想させるやうな原說話を踏襲した爲に本據の痕を暴露してゐるかにさへ思はれぬでもない。愈〻原說話の本據が在つたとして改めて見直すと、天狗の內裏の奇想も、前に述べたやうな

誘導的事情の内に置いて考へれば一層容易に且比較的自然な形に於て其の成立が會得されることとなるわけである。牛若丸の地獄極樂廻りの荒唐さも此處に其の由つて來るところのものが、明らかにせられることとなるわけである。

百合若傳説の本據

本據に關する右の推定が若し當つてゐるとしたら、そして又、坪内逍遙博士の説（『早稲田文學』明治三十九年一月之卷「百合若傳説の本源」）のやうに、百合若の武勇傳説（舞曲『百合若』）がホーマー（ホメーロス）の『オディッシィ』の變形である――原説話とは稍距離があり、若しそれから轉化したものとすればかなり日本化してゐると言ふべきである――としたら、トロイの戰捷者と戰敗者と雙方の上に各、物語られてゐる泰西説話が、共に日本傳説の裝衣に改められて東海の島帝國に播布してゐることは、かなり興味ある事と思ふ。併しそれは偶然では無いとも言へる。何となれば原説話の一は希臘の、他は羅馬の何れも有名な世界的大敍事詩なのであるから。

移植の徑路と年代

本書の内容の本據（クエルし）が『イニード』中の一節である爲の外據として最も重要な條件は、原敍事詩又は原説話の傳來の徑路を明らかにする事と、其の傳來の年代に矛盾の無いかを確かめる事とであるが（原敍事詩と本書との製作年代の先後に就ての矛盾は無い事明白で問題とする必要は無い）、此の點に關しては不幸にして有力な資料の得られないのを遺憾とする。併し日本の國民傳説中、梵・漢の説話を本據とするものが非常に夥しい事實の他方に於て、泰西説話はそれに比して遙に少からうといふ事は我が國情・東西交通史の上から考へ得られると同時に、近古特に永正・大永頃以後には南蠻人によつて齎らされた文化が日本に吸收せられる中に、説話や文學方面だけが除外せられねばならぬ理由は無く、又それ以前とても、大陸を經由して流入する事も不能ではない。我が國の傳説大成時代とも言ふべき近古の文學・説話中に泰西説話の佛を見出す事は、決して無稽な幻想では無くて寧ろ自

然ですらある。

而も本書の成立は、假に素材としての説話が已に存したとしても製作年代に餘り遠くないであらうと思はれ、或は原説話――必ずしも原敍事詩でなくてもよい――からの直接の飜案ならば一層簡單であるが、何れにしても少くとも室町中期以前に溯らせ得られないし、如何しても略、室町季世、德川初世以前と推定したいから（「年代」の項參照）、南蠻人あたりから移植されたとしても矛盾は無いと思はれる。『伊曾保物語』も既に元和には刊行されようといふ情勢である。

葡國詩人カモエンス

『イニード』の移植に就て、なほ茲に面白い空想を附け加へねばならぬ。新村出博士の『南風』の中で、大敍事詩『ルシアダス』の作者として亞媽港の詩仙洞に薄運の日を送つた「極東流竄の詩人カモエンス」を追憶してある一節（第六節『ルシアダス』と百合若物語）に、ウリッセスの物語卽ち『オディシィ』の日本移植に關して次のやうな推測が述べられてゐる。

「されば、十六世紀の遲くも後半期には、國都の建立者たるウリッセスの物語は、人口に膾炙して居たらうし、古典諺讀の餘波で、ホメーロスの原作の筋も當代の人心に觸れて廣く知れ亙つてゐたらうから、彼是の因緣相輔けて、東洋へ渡つた船頭や商賈達は此物語に非常な興味を感じてゐたらうと思はれる。況んや彼等自身は皆オヂッソイスであり、オヂッソイスの船子どもで有つたので、到る處同樣の冒險をして、風が變つて御舟の陸地に着くべき樣もなく、あやかしが付いて難儀をしたことも多くあり、海神が恨をなして、潮を蹶立て惡風を吹きかけ三叉（トリザント）の鋒を振上げて襲ひ來ると、打物わざにて叶はなかつたことも屢々あつたらう。又港々で白拍子の樣に名殘りを惜んで御逗留を勸めたカリプソーもあつたらうから、オヂッソイスの冒險譚が彼等の口から極東の港に傳はり、更に語り繼ぎ、言ひ繼がるゝ樣になりはしなかつたらうか。若し果して百合若傳説がオヂッソイスの話から出たものとすれば、其傳つた路筋は以上の如くであつたことと考へる。彼の

葡萄牙のホメーロスが媽港から更に平戸へでも配流される樣な事がなかつたのは、致方がないけれど、假に想像を逞しうすれば、日本人は媽港が滿剌加か、臥亞か、さもなくば「波濤の謫所」でカモエンスに會ふ機會があり得た筈であるから、萬一其口から古希臘の百合若の話を聞いたならば、此上もない面白い話である。現に天文十七年(西紀一五四八)薩南の若者の彌次郎(アンジロウ)が、滿剌加でシヤギエル上人に出遇つて、遂に此「東方の使徒(アポストル)」の爲に東道の主となつた事實があるではないか。況してやカモエンス自身は既に一箇のオヂツソイスである。」(『嶺南雜廣記』三七六―三七八頁)

新ギルギリウス

此の興味深い空想を直に『イニード』の上に移して、其の傳來の徑路の假想とする事の許容を、改めて博士に乞はねばならぬ。何となればそれはウリッセス物語の場合よりも、もつと因緣が深く且自然でもあり、而も事實らしさを多分に持つ空想となるからである。洵に一段の興味を深くするのは、更に〳〵愉快を禁じ得ざらしめるのは、此の澳門の薄命敍事詩人の手に成つた名篇『ルシアダス』は、實にかのギルギリウス其の人の詩體に則つて作られたのであるといふ一事である。否々葡國のギルギリウスは、自ら新ギルギリウスと號したほど『イニード』の作者に私淑してゐたといふ一事である。但し牛若丸地獄廻傳說の本據說話としてのイニーアス傳說の移入に就て、これ以上新な空想を加へる必要を認めない。

如上述べて來たやうであるとすれば、本書の內容は羅馬敍事詩の飜案又は變形(自然の轉化)であり、前に部分的に解剖考察した事項は、其の日本化するに當つて之を誘導し助成し受容し、融化を容易ならしめた要素であり資料であるといふ結論に落著することとなるのである。

なほ附して言ひ度いのは、『イニード』から來たとして、何故に第六卷のみに限られたのかが少しく疑問を懸け得られる點でもあるが、一面それが全詩の飜案でない反證となり得るやうに思はれ、又かの第六卷目の地獄極樂

ダンテの神曲の粉本

廻は特にダンテの『神曲』の搖籃となつた程でもあり、說話として遊離しても播布するに十分な面白さをもつてゐる一段である事を考へれば、却つて其の遊離說話が(或は全詩の一段だけがでもよいが)牛若丸に吸引せられて義經傳說化するに自然さを增すとも減ずるものでは無いと言ひ得られよう。

【構想・表現】 素材としての說話の本據が在り、而も全構想が殆ど原說話其の儘であるとすれば、本書の創作價値は餘程低くならねばならない。又若し幾分でも原說話よりも變つた色調があるとしても、それは概ね此の說話が移植せられるにつけての自然でそして恐らく必然の國土的竝びに時代的改變の所產としての意味を多分に有つに留まる。必竟本書の作品としての意義と興味とは、其の素材としての說話が如何樣に日本化して表現せられてゐるか、如何なる態度で國民が原說話を受容れて自分のものにしようとしてゐるかに存する。そして結局それは時代思潮、民衆の生活意識との接觸の成果といふ事に歸する。主な飜案者或は語り手は一人であるであらう。それと本書の執筆者との關係も無論明らかではないが、作者の個性は殆ど問題とするに足りない程に稀薄である。尤もそれは大概當代の文學に共通してゐて、特に本書に限つた事でもないのではあるが。

佛敎化と義經傳說への流入

扨其の日本化の過程及び成果に看ての最も著しい事項を簡明に言ふならば、原說話の佛敎化――法談物の形をなして表現せられてゐるのはこれが爲である――と、義經傳說への流入――判官物の假裝をなしてゐるのは之に因るのである――是であらう。而も何れも極めて自然な道を擇んだと言ひ得る。かくして殆ど本據の痕が消されようとしてゐるのを觀るのである。

けれども、やはり時折矛盾が蔽ひきれずに露はれて來る。原說話に忠實であらうとする心持と、通俗說法を之に藉りて效果あらせようとする方便慾と、義經傳說を否定しまい、却つて集錄しようとする意思と、それらが統

一されずに同時にはたらかうとするところから、稍もすれば、作者自身も混亂して來る。時には平然として其の混亂を暴露してもゐる。例へば、牛若丸が天狗の内裏を毘沙門に祈誓してまでも探し搜める理由が少し漠然としてゐるのや、毘沙門の再誕の若君が其の毘沙門に祈つたり、又同時に一方では前生で鼠だつたりするのも可笑しく、大日如來の義朝も奇拔を極めるが、その御佛が敵討を勸めたり、偸盜戒を訓へては破らせたり、言語道斷の事までもある。併し此の菩提の道に專念する心と、曾我兄弟以來愈〻典型道德になつてしまつた復讐の義務の遂行とは、何れも全く時代思想の主潮として殆ど絕對の權威を以て民衆に臨んでゐた。

「かやうの事を問くからに、此世のうちは仁義禮智信を表とし、內には後生菩提を願ふべし」(本輯二八三頁)

とある本書の結論めいた敎訓が、亦よく之を證してゐるであらう。而も右二つの目的が衝突した時、何れに就くべきかは、牛若の煩悶に代表せられてゐる通りに時人の大きな迷である。否通俗敎化の方針それ自身に於て迷があり疑惑があるのである。今眼のあたり目擊した地獄の苛責の中に於てすら矛盾した敎を示されてゐる。修羅道の苦患も明々白々なれば、出家の功德の廣大なのも僞りでない筈である。然るに親の敵を討ち得ぬも亦堪へ難い責苦に苛まれねばならぬ。(同じ近古小說の『あきみち』にも同想が說かれてある)。原說話と義經の功績を尊重した爲であつても、九品淨土の大日如來が修羅の苦を脫れん爲に、平家討滅を懇囑して、復讐道德に凱歌を奏せしめたのは皮肉の極と言はねばなるまい。

大天狗との禪問答、大日との重ねての法問、地獄極樂の繪解式描寫等に至つては、全く通俗佛敎書、法語類と殆ど擇ぶ所は無い。牛若の佛法者振りは鞍馬育とは言ひ條、同じ箱根育の五郎が賴朝以下の面前で法華經を禮讚する舞曲『十番切』の場面以上の鮮かさである。『曾我物語』の兄弟や虎・少將同樣、師の坊以外の後世の諸知識の

力添へが與つて大きいのであらう。時代の影は此處にも僞り無く映出せられてゐる。其の『十番切』にも(『曾我物語』卷一〇にも)賴朝對五郎の所謂問答場があつて、後の舞臺劇にも有名であるが、本書のそれが亦、

「いかに牛若、諸の經の中に第一妙法の法體をば、何と沙汰し申けるぞ」

「牛若答へて曰く、それ妙といつぱ……」

「金剛の心とはいかん……」

「又問い給はく、金剛の正體とはいかん。とく申せ。さん候……」(本輯二七二—二七三頁)

といふ息もつがせぬ白の受渡しが、十八番の『勸進帳』の山伏問答の意氣であるのが、甚だ面白い。唯其の內容が迂愚で且くどいのには倦怠させられる。

地獄極樂の光景は、俗說と格別變りは無いやうであるが、『人穴草子』や『毘沙門の本地』や『太平記』の結城入道の墜ちた地獄やなどと、大同小異ではあるけれども、間接には兎に角、それらを直接摹本にしたと推定するには餘りに描寫が距つてゐる。只『太平記』の彼の條は或は多少影響がありはしまいかとも考へられる節が無いでもない。

「判官贔屓」の對象として、『義經記』や『十二段草子』の主人公として、謠・舞曲の判官物の大切な人物として、國民愛好同情の標的となつてゐるばかりでなく、其の說話の筋立がさながら恰當する點に於て、義經との結びつきは、まことに處を得たものであつたが、なほ義朝の大日如來の告げる未來記中に、殆ど義經傳說の主要な諸題目が網羅せられようとしてゐるのが興味深く注意せられる。卽ち、

五條橋千人斬傳說(橋辨慶傳說)　奧州下り及び關原與市傳說　常磐御前殺害傳說　熊坂長範傳說

（附記　『日本文學聯講』第二卷中世、一拙稿「義經記と義經傳說の展開」第二講參照）

等がそれである。義經の未來記であるから其の傳記的事實が集められて來るのは當然である。興味深く注意されるといふのはそれを言ふのではない。右の未來記によつて、義經傳說の展開が略、一瞥し得られるのが意味があるといふのである。卽ちそれが爲には、一面に於て義經傳說が已に略、各事件的に結象完成しつゝある——卽ち『義經記』や謠曲程度より遙に傳說的に進展もし轉成もしてゐる——事を知ると共に、本書の成立が餘り古く無からう事及び素材としての說話が成つてゐてもそれが作品の形をとるまでの時間的距離が餘り大きく有り得なからう事等を推知し得るからである。又此處に載せられた諸傳說が各、內容的に亦、それらの義經傳說の史的展開を考察する上に、いろ〳〵好箇の資料を提供してくれてゐることが喜ばしいのである。

なほ義經の理想化・完全化に關聯しての寺稚兒としての學才や、多聞天の化身といふ本地說や、例によつての靈夢託宣や、大天狗の御臺の酒の由來物語や、何れも時代色でないものはないが、取立てて言ふ程の事も無からう。

【題　號】〔素材〕の項にも詳說したから改めて解明する必要はあるまい。本文中にも

「まことやらん此の山に、天狗の內裏と申をば、音には聞けど目には見ず」（二五六—二五七頁）

とあるを始め、隨處に見えてゐる。

「納言・宰相已下、北面の者共が、衣冠氣高く引繕ひ、ひつしと居流れ並み居たり」（二五九頁）

「如何さま奏聞申せとて、紫宸殿に參り」（同頁）

などともあるから、やはり內裏であることは疑ひも無い。大天狗に王號めいた特殊の敬稱も附けねば、其の妃らしい きぬひき 姫を單に「大天狗の御臺所」と普通の貴人並にしたのは、特に或用意からではなく、やはり時代御伽草紙作者一流の無造作暢氣さからであらう事も、却つて右の文を通しても推知し得られる。要するに內裏は、單純な童話的氣分が無邪氣に嚴めしく然う呼んでみたかつたのであらう。或は原說話の變形から來た——少くとも誘導せられた——必然の結果であるだけなのかも知れない。

【年代・作者】　思想・文體・用語等から推しても室町期の作である事は考へ得られるが、未來記中に集められた諸義經傳說が、數に於ても亦說話の內容に於ても、かなり進展した後世の段階と看られ得るから、室町中期以後であるは疑ひ無く、同時に、德川初世に——元祿までには既に——擡頭して來たと思はれる蝦夷渡傳說（高館生脫傳說の一種としての）を含んでゐないのに觀て、略、室町末、戰國時代前後の物と推斷したい。（素材としての說話の成立が萬一幾分早くても、それにまで此の考を及ぼしても大過無からうと信ずる）。作品として、謠曲の『鞍馬天狗』や『淨瑠璃十二段草子』『御曹司島渡り』等より早からうとは思はれない。

作者の詳らかでない事は他の當代文學作品の大部分と同樣であるが、臆測を許されるならば、西方極樂主としての大日の信仰などから言つても密敎系の人であらうし、血の池地獄の女人血盆經の敎などからも曹洞派の禪家に關係ある人の手に成つたものらしくも想像させられる。勿論僧侶と一概に定めなくてもよい。

【文　體】　御伽草紙系の物ではあるが、「さる程に判官殿は」の起首に觀ても、又結文に觀ても、或は本文中隨處の筆づかひ、及び全體の調子から言つても、舞の本・古淨瑠璃式の語り物の形態を具へてゐる。『秀衡入』（有朋堂文庫『御伽草紙』所收）や『相模川』（續輯收載豫定書目の一）と略、類を同じうするものであらう。

【原本並所在】 曲亭馬琴が此の書の繪卷に就て記してゐる文が『羇旅漫錄』(卷上〔二八〕)と『燕石雜志』(卷四、(十)「浦島之子」の條)とに見える。『漫錄』の方のは「名古屋にて見たりし繪卷物」として『すゞめ松ばら』『福有(富ィ)のさうし』『花鳥風月』の次に

羇旅漫錄

「一　天狗の內裏　　繪卷物

これは先年名古屋の道具屋にありけるよし、いづれの旅人がもとめ行けん次の日問ふにうれたりといひしとぞ。名古屋人もをしみあへり」

と記してある。卽ちこれだけは馬琴自身見なかつたのであるが書留めて置いたのである。『考古畫譜』(卷八)には增補の項に右の文が引用せられてゐる。『燕石雜志』の方のは、前に『はもち中將』の考說(〔原本並所在〕の項、五四三頁參照)に揭げてある文の通りの三十一種の書名を記した中に「天狗內裡」として、『猿蟹合戰』『桃太郎物語』の類と共に「みなはじめは繪卷物にてありけんかし」と言つてゐるのであるが、これは名古屋で耳にした同繪卷を玆に數へてゐるのであらう。

燕石雜志

寬文の西村版『增補書籍目錄』(「舞並草紙」部、一五八丁ノオ)及び元祿五年版『續書籍目錄』(五之卷「舞並草紙」部、二七丁ノウ)に「二　天狗內裏」と見え、正德五年版の『增益書籍目錄』(卷四、「て」「假名」部、二九丁ノオ)には「二　高や庄　天狗內裏」とある。(「万や庄」は萬屋庄兵衞のことである。)

『新修日本小說年表』には、「古代篇、室町時代」の部(一四頁)に「○天狗の內裏　一卷」それから「近代篇、假名草紙」の部(三七頁)に

「◎天狗のだいり　三　　萬治二年

卷末に萬治二年仲夏吉辰松會開板」

と出てゐる。

帝國圖書館本(本輯底本)

本輯所收のものは卽ち右の萬治二年松會開板本で、帝國圖書館藏上下二卷一册本(『小說年表』の記載のやうな三卷の刊本が別に同年に同じ書肆から出てゐるか如何かを知らない)、紺表紙(題簽剝脫)、繪入(無彩)十四行大形竪本(縱八寸八分、橫六寸一分)、內題「てんぐのだいり　上」「てんぐのだいり　下」柱には「天くのたいり　上」「天くのたいり　下」卷末には本文の終にも示したやうに、前記『年表』の通りに見えてゐる。

舊義亭文庫本

校合に用ゐた一本(霞)とあるのは、舊霞亭文庫本で、上中下三卷三册、奈良繪入古寫十行、粘葉綴竪本(縱七寸七分、橫五寸七分)、唐艸金繡模樣のある織物表紙(見返し金紙)に赤色の題簽紙を左端に貼付し、「天狗のたいり　上」(中、下同斷)と記してあるもので、內題・奧書無し。往年渡邊氏存生中同家でも一度披閱したことがある。

藤井博士本(舊平出本)

挿繪はかなりいゝ方の部であるが、本文は刊本より善いとは言へない。誤脫の箇處もある。煩を避ける爲に明白な誤脫等は一々註せず、異同を對校するを主とした。

今一本は藤井乙男博士の藏本で舊平出氏所藏、袋綴、竪、寫(挿繪無)一册、表題には本文と同筆で『義經記』とあるが(內題は無い)、其の下に「天狗內裏」と書入がしてあり、見返しにも同じ手で

「此本

天狗內裏万治二年印本

と同物なり」

と記し、奧書は朱筆で

「奧書

右天狗內裏草紙全一卷以東都松會万治二年仲夏所上木之本一校加朱墨了

天保六年乙未九月三日夜　今古圖亀壽花押」

とあり、初頁右下に「平出氏書室記」の朱印があるものである。校合の印本の文は朱で「イ」として書入れてある。亀壽とは平出鏗二郎氏の祖父延齡氏のことである。

此の寫本は刊本とはかなり異同があるらしいが、一々對校する遑が無かつたので、幸ひに所藏者の好意により疑問の箇處のみを照合して掲出すことにした。

古淨瑠璃の天狗の内裏

【系統・影響】 延寶五年刊の古淨瑠璃に同名の作がある。(『近古小說解題』三九七頁・百足屋文庫編『入軸淨瑠璃金平六段本題名一覽』等にも見えてゐる) 併し内容は直接關係あるものではない。本書の改作でも何でもなく、寧ろ淨瑠璃姫傳說が主部分を占めてゐる。大天狗僧正坊が一族を集めて奥下りの牛若の爲に前途を祝する件が初にあるので、本書の題名乃至は本書によつて知られてゐる「天狗の内裏」といふ名を此の曲に借りたのであらう。東京帝國大學國文學研究室本(一册) は舊平出鏗二郎氏藏の五段本で、繪入十七行竪本(縱七寸六分、横五寸三分)、卷末に

「延寶五年巳七月吉日　鶴屋喜右衞門板行」

とあり、内題は第一段の題にもなつてゐて「てんぐのだいり」としてある。内容の一斑を示す爲に各段の題書を抄出すれば、

第一　てんぐのだいり
第二　うし若殿かゝみのしゆくにてがうどうを討給事
第三　上るり姫くはんけん并うし若殿四きのてう
第四　うしわか殿上るり姫のれやにしのひ給ふ事
第五　うし若殿平家をせめ上り并れいせいに逢給ふ事

卽ち主に『淨瑠璃十二段草子』を承けて近松の『十二段』(『源氏十二段長生鳥產』) へと展開して行く其の中間にある作である。節博士の附いてゐる點でも面白いものである。

附記　此の考說と重複するところはあるが、新潮社刊行『日本文學講座』第一一卷所載の拙稿「天狗の内裏とイニード」(牛若丸地獄極樂廻傳說とイニーアス傳說) をも參照せらるれば、此處に竭くさぬところが幾分でも補はれ得るかと思ふ。

判官みやこばなし　一名　鬼一法眼　刊五卷

奥州の冠者義經が鎌田少進に伴はれて來られたのは、一條今出川の鬼一（おにいち）法眼が宿所であつた。法眼が相傳してゐる兵法の祕書を學ばうとてである。

鬼一は、公卿・殿上人・奈良法師に至るまで、都の内に一千人、稲荷・伏見に三千人、それに白河いつち（印地）小法師二千人、總じて六千人といふ弟子衆を持つた大分限の師匠であつたが、元來の大慾深なのを心得てゐる少進は、巧に唆して冠者を引見させようと努めた。鬼一は冠者が有德人で、而も黄金作の太刀を佩いてゐると聞くより果して心動き、急ぎ座敷をしつらへさせて對面したにはしたが、衣服も整へず、しどけ無い體で八角の黄楊の棒を突立て〳〵女房達の肩に懸つて出て來、上座の錦の茵に直つて風邪藥を服し、女房達五六人に肩腰を摩（さす）らせながら傍若無人の威勢を示して客人に接しようとして、御曹司を一目見るなり棒をも執らずそゝくさと内へ逃げ入つてしまつた。

少進に向つて散々の叱言である。竝々の冠者とばかり何心なく出て見れば、小松内府にも劣らぬ、天晴十萬餘騎の大將軍よ。但し此の殿我が朝には過ぎた英雄、三十に幾程もなくて滅び給ふべき相がある。かやうの人の財は欲しうはない。早々に連れて歸れと怖ぢ懼れる有樣に、少進は義經を賺して伴ひ歸らうとすれば、これ亦いつかな可かず、板挟みになつた鎌田は面目を失つて獨り辭去した。

鬼一は家中に命じて廣緣の冠者に言葉も懸けさせず七日七夜も藥てて置いたが、八日目の曉蔀の隙から覗ふと、寒風の中に悠々と足踏み伸ばして臥してゐながら、右眼はきつと開いて些の油斷もせぬ大丈夫の面魂、さては愛宕・比良嶽の天狗が我をためさん爲か、さなくば噂に聞く左馬頭殿の御子九郎御曹司か、若し其の君ならば弟子にとつて不足はないが、平家への聞え憚りあり、何にせよ近づいてよしなしと又そつと内へ入つた。

又七日過ぎた。緣の冠者は一食も認めず、なほ立去りもせぬと聞いて、流石の法眼も憐憫に思ひ、女房共の情無いの

を歎じて、食事を與へさせた。雜人の飯を下女が運んで來た時、御曹司ははつたと睨み、「さやうの物は鬼一が馬に飼へ」と叱り却けられた。女共の無禮に法眼愈々機嫌を損じ、重ねて冷泉を遣つて厚くもてなさせた。鞍馬の多聞天から飢ゑぬ藥を授かつてゐる御曹司は、もとより少しの疲れも覺えぬが、「同じくは座敷で賜はりたい」と望み、悠然として飯だけを執られた。

法眼も終に我を折つた。よし、法物語して返さうと、裝束繕ひ長刀を杖に、物具に身を固めた童・若侍共を從へて客緣へ出て來た。

兵法の由來物語が始まつた。美濃守すけもりや、相馬將門が威勢も、皆其の力であるといふ此の偉大な兵法は、支那から傳來したものである。昔漢の高祖の臣に樊噲・張良とて二人の武人があつた。樊噲は一寸拔けば一千人の首が落ちるといふきりちやくといふ劍を持ち、又養由といふ名手は一矢に五百人が命を斷つ力を有つてゐた。張良之を羨み、二人に上超す法を得たいと觀音に祈つて、三年三月に示現あり、靈藥を權に賜はり、敎にまかせて三年三月の旅に上り、大河の岸に出て沿うて行くこと百里、而四寸の黄金の橋が前に現れた。（卷一）

四十里の長橋を渡つて對岸に著き、七日七夜待てば、果して白馬白衣の翁天降り、杏を落して張良を試みた後、伴つて昇天した。玉殿で不死の酒を與へられ、かの藥と共に五度服すれば忽ち五千人が力を獲、ついで六百六十一卷の兵法を許され、又扇のやうな物を添へて一の奇法を授けられた。其の靈具を持つて、「とうくわ〳〵」と三度唱へて太刀を振ると、敵何萬騎あつても一度に首が落ち、又とり直して「ちやうやたち〳〵」と唱へて頸と腰を撫でると忽ちそれが蘇生するといふ自在の法であつた。

やがて老翁は自ら天上界の計都星と名告り、霞の鞭を投げるよと見れば、張良は一日一夜に長安に飛下つた。高祖仔細を聞召し、又其の若返つたのに驚歎し、厚く禮して師傅の位に陞せた。位を超された樊噲大に憤懣して、三年三月機を窺ひ、終に五百人の兵を以て張良を途に圍んだが、かの「とうくわ〳〵」の一法で散々に懲らされて服したので、これから世に樊噲・張良を改めて、張良・樊噲と呼ぶやうになつた。

六百六十二帖の兵法の内、二百帖は龍宮へ、又二百帖は三百六十國へ傳へられた。將門の亂に斷えたのを、鬼一渡唐し

て、張良廿七代の孫ひんきけんから五年が間に學んで歸つたので、虎の卷は三十五卷、合はせて四十二卷の卷物である。此の法を習へば望みの遂げぬ事はない大事の法よと得意げに說き聞かされたのであつた。

御曹司は愈〻習學の念が熾になつた。恰も好機が擲まれる時が惠まれた。法眼の長女はたいこ(醍醐)の藏人の北方、次は五條の惡とうがい坊の北方、三の姫は洛中一の美人、『春雨のやうに降る玉章を見もかへらず、父の法眼は私かに行末の貴い宿世を夢みて、廿四人の美女達に東の御方とかしづかせて誇り樂しんでゐた。此の姫が或夜好きな管絃の遊を催して、爪音妙に搔鳴らす響に、義經漫ろ憧れ出て花園山まで忍び寄り、我を忘れて腰なる名笛村雨丸を取出して吹き合はせた。そしてやがて桂男のやうな美青年は無理に喚び入れられ、姫の留守と伴る女房共に責められて、笛を見せもし吹きもした。

村雨丸は村雲丸と共に、筑紫博多の船頭めうてんが唐土土產、長安の漢竹を伐つて作つた希代の靈笛、村雲は妙音院大僧正の祕藏、これは常磐御前が買ひ取つて鞍馬の我が子に贈つたもの、蟬折に次ぐ本朝第二の名管、吹手はもとより日本一、人々の管絃と合はせて、數の樂が面白く調べられた。(卷二)

姫君の御乳母更科は筑紫松浦の生れ、迷ひ出た故鄕懷かしの心から東の冠者の身の上に同情し、かの管絃のあつた日の後、廣緣を訪れていろ〳〵と慰めるのであつた。

其の夜、いつより隈なき月を賞でようと更科に勸められ、月見殿でくさ〴〵の遊に興じてゐた姫の手に、更科が拾つたといふ落文が披かれた。優しい水莖の戀歌があらはれた。それは實は此の女房に縋つて、其の情の袂に託した東の殿が心のたけであつた。

更科の手引で、御曹司はやがて夜々姫の許へ忍ぶことになつた。(卷三)

明けて治承二年になつた。正月八日の夜姫の方で諷の管絃が催された。寢覺の耳に不圖聞き慣れぬ笛の音を聽き分けた法眼の胸は憤に搔毛られた。何者の狼藉ぞ。夙く夜の明けよと苛立つて、寅刻になるのを待ちかねて更科を喚びつけ、怒り罵つて糺明し、冠者を斬らうと跳り嗟るのを、北方始め女房達に、實否も確かめずに輕々しいと漸う諫め宥められた。

正月十五日、鬼一が館に公卿達の參集があつた。目にとまつては我まで恥の上塗と法眼は氣を揉んで、上臈達の御歸りまで這奴傍らにあれと嚴命を下したのを、傍らとは姫の方へ行けとこそと態と奥へ入つて行つたので、鬼一怒心頭に發し、長刀の鞘を拂つたが、併し姫の心根も不憫と思ひ返し、所詮人目も恥づかしければと、俄に一門を引具し熊野詣を思ひ立つた。

其の留守に一大事が出來した。二人の仲がよし知られても、己が違出の隙とあれば、嘲が責も遁れる道理との法眼の思慮は深きに似て淺かつた。彼はもつと悔いて及ばぬ失錯をしてしまつたのである。御曹司にとつては正に時節到來であつた。姫を戀の犧牲にして、法眼が祕藏する兵法の社に手引させ、石の唐櫃の底深く幾重の函に藏められた四十二卷を思ひの儘に披見し、大事の箇處は七日が内に悉く寫し取られたのである。

熊野から下向した鬼一法眼は、歸ると其の儘、途々頻りに心に懸つてゐた兵法の社を檢べた。果して奇怪至極の事實を發見した。やはり不淨の罪咎は爭はれず、十分に注意したつもりでも、一の卷が二の卷の壺に入つてゐたのである。

最早救し難いのであつた。殊に姫には繼母の北方が證言を與へた上は、後妻の心は怨めしながら助けては置かれず、此の上は冠者を討ち取る他は無いと、急に婿の五條の惡とうがい坊を招いた。廿七歲の時から三十までの間に千人斬の大願を果さうといふ程の惡法師、事も無げに法眼の賴みを快諾した。

法眼は次に御曹司に對面して、これにはとうがいを斬つてたべと詞巧に懇請した。(卷四)

時は今宵、場所は石山と告げられたが、御曹司にはすべてが讀まれた。姫も固く止めたが、雄々しくも單身行向つた。

法眼の豫期は見事に裏切られた。七尺豐の荒法師は生年十九の小冠者の爲に散々に戲弄せられた上、棒は斬落され、太刀と長刀は奪取られ、終に首までも渡してしまつた。隨從の八人の若僧共は雲を霞と逃げ散つた。

流石愛子の歎きを思ひ、女房達共々冠者の爲に念佛を回向してゐた鬼一は、とうがいの首を示されて驚きの目をみはられねばならなかつた。唯「喜び入り候」とばかり言ひ棄てざま、桂籠をはたと立てきつて引籠つてしまつた。

夢かと喜ぶ姫君に、御曹司は始めて「左馬頭義朝が常磐腹の末の子、童牛若、今は東國の冠者義經」と名告られた。そして世を忍ぶ身の姫を伴ふ事の叶はぬ旨を語つて、心强く袂を拂つて出られた。

―概要―

歎きに伏し沈んだあはれな姫は、義經に別れて十一日目といふに、たうとう焦れ死に此の世を去つた。天地に仰ぎ俯して悔い悲しんでも還らぬ繰言、父の法眼は泣く〳〵野邊の送を營み、今は留めて詮なしと、兵法の祕卷を取出し、蓮臺野の茶毘の炎に投げ入るれば、廿五卷は影も殘さず灰と化したが、虎の卷のみは不思議や火中を飛出でて天上へ昇つてしまつた。これよりして永く我が朝に兵法の祕曲は斷えた。御曹司の筆のみが纔にところ〴〵之を傳へてゐるといふ。

都の人目を憚り、密に園城寺の塔の九輪に登つて遙に見渡す御曹司の方へ、姫君の茶毘の煙が風のまに〳〵靡いて來たとは、聞くも哀れの物語である。

かくて義經はかの兵法の奇特により、後年天下に名將と仰がれたのであつた。（卷五）

【性質】 これも義經文學（判官物）の一である。義經傳說中でかなり有名な**鬼一法眼傳說**を取扱つた御伽草紙風の小說である。ローマンスに彩られた武勇傳說を內容とし、**判官贔屓**に**兵法祕傳**と何れも時代意識の際やかな特質を併せ示してゐる。

『義經記』の敍述中、辨慶の生立物語と鬼一法眼の段とは、全說話の本筋に對して、各〻稍攙入的の意味がある。前者の內容を主題とするものに別に『辨慶物語』（『室町時代小說集』所收）があり、又後者のそれに本書があつて、兩者の『義經記』に對する關係相似たものがある。かく特に獨立しても作品化せられたほどの兩者の傳說は、既に早く各〻口碑として成形し流布してゐたのであらう。それが『義經記』の素材にもなつたのであらうかと考へられる。

よつて本書は、鬼一法眼傳說の展開及び同傳說に取材した後代各種文學を考察するに、『義經記』と共に注意せられねばならぬ作品である。

【素材】 一 **鬼一法眼傳說** 所謂鬼一法眼傳說の最も古く見えてをり、且有名であるのは、やはり『義經記』（卷二の七「鬼一法眼の事」）であらう。而も既に殆ど完成した姿に於て語られてゐる。強ひて言へば、娘に未だ

「皆鶴」の名が賦與せられてないだけである。

本書の內容も大體に於て全く同じと言つてよい。湛海（本書では「とうかい」）の斬られる場所が五條天神（『義經記』）と石山、嫩へ手引する女の名が幸壽（『義經記』）と更科（これは『十二段草子』から來たのであらう）といつた程度の少異はあるが、それは說話の遊行を示すに過ぎず、構成の上からは全然同一の說話である。嫩が唯鬼一の三の嫩とだけで、やはり皆鶴になつてゐないのも同樣である。『義經記』では單身鬼一が館に乘込む義經が、本書では鎌田少進といふ正門坊と吉次とを搗き混ぜたやうな男に伴なはれるが、此の人物が兎に角『義經記』の四條の聖に相當してゐるとして觀れば、『義經記』に於ても彼と鬼一との間に間接の連繫が存してゐる事が見出される。同書に、鬼一が許に在つて義經が衣食を給せられぬに痩せもせず時々更衣さへもするに、人々怪しみをなすと記した次に、

「夜は四條の聖の許にぞおはしましける」

とあるのがそれである。又兵法の由來を鬼一が說くに、張良と樊噲の說話を引いてゐるのは、廉頗・藺相如の故事から想を獲た本書作者の假作かと考へられるが（本輯二九九頁頭註參照）、張良の兵法傳授傳說は謠・舞曲にまで作られて有名であるのに、樊噲の方は殆ど問題にせられてゐないやうである中に、『義經記』のみは、同じく鬼一の條に、やはり兵法相傳者として兩人を並記してゐる。

「張良は一卷の書と名づけて、之を讀みて三尺の竹にのぼりて虛空を翔る。樊噲は之を傳へて、甲冑をよろひ弓箭を取つて敵に向ひて怒れば、頭の甲の鉢を徹す」

要するに、何處までが說話の本態で、何の點が作者の改變であるか、無論細にはわからないけれども、兩書の說話は少くとも同一本源のものである事だけは確である。概して本書の方が一層膚肉が附き、多少の改變粉飾が施

されてゐるといふ程度である。恐らく『義經記』から出たのであらうと思はれるが、直接の粉本であつたか如何かまでは明言出來ない。同時に、特に『淨瑠璃十二段草子』との混淆(說話として)乃至それの影響(創作として)を認めないわけに行かない。

兵法傳授說話の異型

扨此の傳說は、**兵法傳授說話**の一異型としての物語が主態であり、姫との戀愛譚が其の挿話となつてゐる。挿話である戀愛譚から『十二段草子』の淨瑠璃姫傳說と混淆する機會を見出し、挿話的ではあるが主說話と緊密な關係を保つて、其の關係の生ずる處から本說話の主題が展開するところに、所謂勇者求婚說話の佛を留めてゐる。又、兵法傳授說話であるところから鞍馬天狗傳說との融化が行はれて來た。つまり、敵たり師たる人の愛娘との情事關係が、秘卷獲得の目的達成の手段に利用せられるので、其處に歡樂もあれば冒險もあり、犧牲もあれば悲劇もあるのである。又傳授熱流行、秘事尊重の時代色も濃厚に出てゐる。

附記 『日本文學講講』第二卷、中世、一七〇—一七一頁、拙稿「義經記と義經傳說の展開」(は)鬼一法眼傳說の項參照。なほ本傳說に就ては、機を得て經めたいと考へてゐる義經に關する傳說と文學の考說に於て、もつと詳しく述べるつもりである。

御曹司島渡りと本書

二　牛若丸島渡傳說との關係　玆に特に言及せねばならぬのは、牛若丸の島渡傳說卽ち『御曹司島渡り』の內容との關係である。元來鬼一法眼傳說は、史實の本據の何等徵すべきものが無い上に、『義經記』の記述では一旦吉次に伴はれて奧下りした後、更に再び都へ忍び上つて平家の動靜を探る間の事件として挿入せられてゐる。事實として少しく無理な感がある一方、同じく秀衡の許に滯留中、遠く反對の方向に——四國土佐港から出船したり、地理的知識の昧い爲の矛盾混雜はあるが兎も角——冒險の旅を試みる事を傳へるのが卽ち『御曹司島渡り』である。そして其の目的は同じく兵法秘書の獲取に在る。今此の二つの傳說を比較すると、甚だしく相似した點が多い。

兩說話の相似の諸點

一　秘藏の兵書のある由を聞いて尋ね到り、之が傳授を乞ふ事

二　許されないので、其の愛娘と契り、此の手を借りて願望を果し、兵書を披見會得する事（兩人石窟に入つて祕圖を開くところなどは『義經記』よりは『判官都話』の方に近い）

三　女の父が之を知つて激怒し、牛若を殺さうと計る事

四　牛若討手を破つて危難を免れる事

五　女は夫の爲に犧牲となつて落命する事（病死と殺害との違ひはあるが）

人間的・事實的であると、神話的・童話的であるとの差が、兩者を異なつた說話にしてゐるに過ぎないと言つてよい位である。特に島渡傳說の方は、巡島說話であると同時に、正に原始的な勇者求婚說話の形態に近いものである。所謂逃走說話までも說話癖として包持してゐる。少くとも單に說話として對比すれば、鬼一法眼傳說よりも古い形態と性質とを有してゐる。

アイヌの口碑

此の牛若島渡傳說が現に北海道のアイヌの口碑に傳存してゐる事及び其の梗概は、ジョン、バチェラー博士の『アイヌ人と其說話』(第二四章教育、同書二二五頁—二二七頁)によつても知られるが、「トラ・ノ・マキモノ」の名などに觀ても、却つて內地の御伽草紙の逆輸入らしく感ぜられる。既に德川時代に於て、『蝦夷談筆記』『北海隨筆』等此の物語が淨瑠璃(ユーカラ)に作られて夷地に行はれてゐる事を報導してゐるが、やはり其の本源は內地の『御曹司島渡り』に出てゐるであらう事、及びそれが義經蝦夷渡傳說(高館生脫說)の誘因の一となつたのであらうとの意見を金田

一京助氏が夙く述べてをられる。（『國學院雜誌』大正四年第一九卷第九號「蝦夷傳說源流考」及び『東亞の光』大正三年第九卷第六・第八號「義經入夷傳說考」等參照。後者は同氏著『アイヌの研究』第九章「アイヌと義經傳說にも收めてある）

鬼一法眼傳說の本據

鬼一法眼傳說が此の島渡傳說の直接の變形であると推定する事は少し危險かも知れない。けれども類型の說話であるは勿論、兩者の間に何等かの關係の在るべき事は想像が出來る。本書を仲介として觀る時一層兩者の距離が短縮せられるやうに思はれる。少くとも其の最本源の形に於ては同一の說話ではなかつたかを想はしめるものがある。又『天狗の內裏』の未來記中では、鬼一とも、京人ともしてないが、島渡傳說と竝述して、「四國讃岐の國法眼」（本輯二七九頁）と言つてある。傳說の遊行を示してゐる明證となるが、島渡の御曹司の舟出した四國土佐港とは單に偶合に過ぎないのであらうか。（『聯講』第二卷、一七一頁、（に）牛若島渡傳說の項・雜誌『新演藝』大正九年十二月號「鬼一法眼の完成まで」等拙稿參照。なほ島渡傳說の詳論も同じく後日に讓る。）

きいちとおにいち

三　鬼一法眼　右に關聯して略說して置かうと思ふのは、鬼一法眼の名稱に就てである。『義經記』では「一條堀河の陰陽師」となつてゐるが、之を實在の人物と觀て、其の素性の穿鑿が試みられて來たのは後の事である。姓名は『義經記』も本書も「鬼一法眼」とだけである。而もそれを「きいち」と讀んだのは寧ろ後世になつてからではないかとも思はれる。或は「きいち」とも讀んでゐたかも知れぬが、『義經記』の刊本には「鬼一法眼」と振假名してあるのが普通のやうであるけれども、本文には「鬼一」と假名を振つてありながら目次には「鬼一法眼の事」となつてゐるのもある（元祿十年板）。『判官都話』も「おにいち法眼」の一名で呼ばれてゐるばかりでなく、本文中にも、刊寫本共「おに一」「をに一」或は「おにいち」「をにいち」と見えてゐるから、これは「おにいち法眼」の題名が誤つてゐない明證となる。（『まんじゆのまへ』の金王丸型の勇童も「鬼一丸」といふ名である。）少くとも音訓兩樣に讀まれて來たやうである。後世は全く「きいち」に固定してしまつたが、若し「おにいち」とも讀むことになれば――それが古くて正しければ尙更――『南留別志』の「鬼一法眼は紀一なるべし」は愈、徠翁の獨合點に終つてしまふわけである。その代り當の兵法者は、名前の上でも吉岡某より蝦夷が島の鬼かねひら大王に親しみが深いと言はねばならぬ。これも偶然の一興に留まるだけなのであらうか。前揭兩傳說の關係に多少の暗示を投げてゐるとは觀られぬであらうか。

吉岡建法

「紀一なるべし」と解釋したのは既に鬼一を史的人物として肯定する事を前提としてゐるが、此の鬼一法眼傳說の進展に隨つて、鬼一の姓名・出處にも漸次尤もらしい說明が附加せられて來、性格行動もかなり複雜化して來てゐて面白いのであるけれども、是も今は詳說を略する。唯染色家で劍法の妙手であつた吉岡建法（又拳法、又憲法）に傳會せられて來た事（『常山紀談』五之上卷「吉岡建法狐藉、太田忠兵衞手柄並太田武政を論ずる事」其他『松屋筆記』卷九四・『駿府政事錄』『武藝小傳』『雍州府志』等、及び『義經勳功記』卷三・『風流訛軍談』・『鬼一法眼三略卷』『鬼一法眼虎の卷』等）と、鬼次郎・鬼三太と三兄弟となるやうに導かれて來、辨慶の鬼若丸とも姻戚にまでなつたりしてゐる事（『勳功記』卷一・卷三・『鎌倉實記』卷八・卷一六・及び『三略卷』『虎の卷』等）を言ひ添へて置く。（『勳功記』の「吉岡鬼一法眼憲海」の童名は「鬼一丸」となつてゐる）尤も『義經記』等の鬼一法眼が描かれるに、吉岡でなくとも實在のモデルらしい人物が或は居たかもわからない。それまでも全然否認する必要も無からう。

鬼次郎・鬼三太

皆鶴姬とかつらの前

四　皆鶴姬と湛海　法眼の娘は『天狗の內裏』の義朝の未來記中ではもう「みなづるをんな（皆鶴女）」（本輯二七九頁）になつてゐる。後の淨瑠璃・歌舞伎・小說の類大抵は此の名である（唯『金平本義經記』には、皆鶴の名がまだ固定せぬと見えて、「かつらの前」とし、『末廣十二段』は之を踏襲してゐる）。『義經記』や『判官都話』では戀病に焦れ

皆鶴入水傳説

死んだ女が、一方牛若の跡を慕うて奥に下り、途中會津の難波池に投身した傳説に進展してゐる。（『會津風土記』〔『續群書類從』正編卷一二、土鹿「五」條の條にて千人斬の説」の條所引〕・『勤功記』卷五「皆鶴姫奥州下向の事」「皆鶴姫入水附九郎義經愁嘆同難波寺の事」）これは『十二段草子』の説話とも交渉があるかも知れないが、さうでなくても、靜御前や虎御前や小野小町や佐用比賣などの上に傳へられる所謂**美人漂泊型説話**に屬するものと看ることが出來る。

湛海ととうかい

北白川の湛海（『義經記』）は、『都話』では「五條の惡とうかい坊」であるが、謠曲『湛海』では「長谷部」の姓を賦與せられ、後の「三略卷」では「笠原」となりすましてゐる「菊畑」の憎まれ役である。法眼の婿なり弟子なりである癡者の荒法師といふのであるが、特に本書では

「我は廿七の年より三十になるまでに、人を千人斬りて親の孝養に報ぜんといふ大惡人なり」（本輯三二八頁）

としてある。湛海の千人斬は珍説である。相似た西塔の荒法師の傳説が移つて來たのかも知れないと一應は考へられるが、辨慶の千人斬は比較的後に進展した傳説で、古くは千振の太刀奪であり（『義經記』卷三・『辨慶物語』等）親の孝養の千人斬は却つて牛若御曹司の方に傳へてゐる資料が多い。謠曲及び御伽草紙の『橋辨慶』は、千の數は明記してゐないが、『天狗の内裏』や『牛若千人切』（延寶七年刊古淨瑠璃）や或は『孕常盤』『三略卷』『御所櫻堀河夜討』又は『義經倭軍談』『鬼一法眼虎の卷』の類皆同傳説を載せ或は用ゐてゐる。これが辨慶の方へ流移して來てゐるが、此の傳説に直接關係が無くとも、千人斬の迷信は亦時代習俗の一端として、茲にも看る事が出來る。謠曲にも『千人伐』があり、金平本にも『金平千人切』（元祿四年五月刊）がある。『秋の夜の長物語』の山門三井寺合戰の條にも「千人斬の荒讃岐」と見えてゐる。

辨慶の千人斬と牛若の千人斬

千人斬の迷信

序に餘り重要な事項ではないのもあるが、本書の素材中なほ三四の氣づいた點を記して置く。

畢沙門本地と本書

先づ法眼が兵法由來の物語は、言ふまでもなく近古の時代風尚の顯れであるが、其の物語の中に、樊噲が一寸抜けば一千人が頭を打つきりちやくといふ劍を持つてゐるとあるのは、『毘沙門の本地』の維曼國の金色太子が摩耶國に乘込んで、大刀といふ劍を抜き、一振に千人の首を、重ねては三千人の首を打落すのに似てゐる。張良も兵法を修めて五百人の首の落ちる奇術を會得した。『義經記』（卷二「鬼一法眼の事」）の兵法の由來でも、相馬將門は本書の養由には及ばずとも、一張の弓に八の矢をはけて八人の敵を射る威力を語つてゐる。

張良の傳説

同じ本書の兵法物語中の黄石公の故事（本輯二九六頁頭註參照）を原形とする荒唐な傳説は、謠曲よりは舞曲の「張良」の方に關係があるやうである。張・樊兩人の術競式説話の粉本は前にも記した。

兵法四十二卷

兵法の書四十二卷といふのは『義經記』の十六卷とは應じてゐないが、本輯所收の舞曲『笛の卷』の内容に類した名笛の由來談が管絃の件は『十二段草子』に倣つてゐると看られるが、本輯所收の舞曲『笛の卷』の内容に類した名笛の由來談が挿入せられてゐる。

舞曲笛の卷と本書

【構想・表現】 説話の全構成が殆ど『義經記』のまゝであるとしてみれば、縱ひ直接それを粉本としたのでないまでも、少くとも説話としては既に略ぼ整成してゐた事は認めねばならぬから、其の點では作者の創意は餘り看られない。細説に於ては之を『義經記』に比して猶作者の働きと言ふべき數四の箇處に接する。例へば、少進の案内、鬼一の後妻、法眼の熊野詣、或は兵法物語の内容、又其の祕卷の燒失等それである。併しこれらも原説話との關係が何の程度であるかも明らかでない。

十二段草子と本書

『淨瑠璃十二段草子』の影響のあるべき事も前に述べた。説話としての交渉を別として、作品として之に模し或は借りたところのあるのは如何しても爭はれない。特にそれは嫁とのローマンスの場面に於てである。本書二の

巻後半から三の巻へかけての敍述を、『十二段草子』の「美人ぞろへ」「そとの管絃」「笛の段」「使の段」「忍びの段」「枕問答」「やまとことば」の邊に照らし合はせれば直に首肯せられ得るであらう。姫は其の儘淨瑠璃御前である。かしづく女房の名までも共通したものが一にして止まらない。花園山の管絃に横笛の合奏、『島渡り』のくわんきよは同じく天才を發揮するが『義經記』の方では此の際には語られてゐない。懸想文の文句と其の謎を姫が解くのは、「やまとことば」の二人の問答から出たのであらう。詞までも其の儘の處もある。そして『十二段草子』の方が意味も通り、自然でもあり、御手本であるべきは疑ひを容れない。『御曹司島渡り』の本書に於ける、亦恐らくは相似た關係なのであらう。

乳母の更科が姫を說くに、戀文の返しせねば肢なき坊に生れると訓へたり、北方の冷酷さに「あはれけに昔も今も、繼母と繼子の間ほど無慙なる事はなし。」と鬼一が怒の眼にも涙を堰き兼ねたりするのは、時代意識のあらはれとしての感興も淺少でないが、作者が原說話を潤色し詳述する爲の用意を構へてゐる意圖は、それらの段にも自ら明らかに看取し得られる。法眼との初對面の條なり、鎌田少進の困惑なり、或はとうかいとの接戰なりに於ても然うである。唯それらが幾許の成功を結果してゐるかは、かなり疑はしいものであるが。

何よりも最も興味を惹くのは、鬼一の性格描寫である。他の人物は大抵類型的であるが、そして『義經記』の語るところと大略同じであるが、法眼だけは少しく異色がある。

彼が我が子の姫に對する愛は殆ど目の無い位である。其の將來についても、「公卿・殿上人婿に取りて何かせん」といふ大過飾の彼らしい望をかけてゐる。だから此の望が水泡に歸しただけに怒も激しいのに無理は無い。併しながら又姫の心根を不憫に思うて、止められるまゝに冠者の成敗を控へるのみか、彼等の爲に自ら熊野詣までも

思立つのである。己が名譽といふ打算的な、これも大過飾の彼らしい利己主義からでもあるが、なほ姫可愛の親心である。兵法祕書といふ懸替の無い大切な物を竊み覽られても、其の憤激の一方には、それが愛娘の犯した罪とわかると、之を庇うてくれぬ繼母の心を却つて怨めしと泣くのである。一旦とうかいに命じて討取る手筈を定めて置きながら、眼のあたり冠者の優美な容姿を見ては、漫後悔の念さへ起るのも、姫をあはれと思ふにつけて尙彌增さる。此の掌中の玉に先立たれ、而もそれが己れの心の至らぬからとあつては、蓮臺野の松原響くばかり慟哭するのも、自棄の餘りに生命と思ふ兵法の函を茶毘の煙にしてしまふのも、眞に尤も至極である。

かく熱愛を注いでゐるのは事實であるが、彼の愛は娘に對してのみの依怙地なものではない。他人に向つても慈悲と情を知らぬではないのである。冠者を敬遠してはゐるものの、干乾にしようとした女共の心無さには興をさました。

「情無き女房共かな。鬼一制するとも、情有らばよかりなん」(本輯二九二頁)

と歎じて涙を浮べた。主の心と恥とを知らぬ下種女の無躾な振舞には愈、業を煮やしてゐる。此の心が又

「縱ひ鬼一送りなんといふとも、いかで斯樣に恥を與ふべき。まことの親にてあるならば、いかでか有りの儘に宣ふべき。これにつけても、姫の母こそ戀しけれ」(三二七頁)

と言はせるのである。いつも自分の面目といふ事を離れぬと同時に、又單にそれだけではないのである。自ら討たせた冠者の爲に一遍の回向を手向けるのも心からで、『義經記』の獨言に呟く鬼の念佛とは似て而も同じではない。

彼はそんなに不聰明ではない。一目見て奥州の小冠者の只者で無いのを看破した。管絃の笛の音色を耳聽くも

聽き知つた。熊野詣の決行、とうかい坊の談らひ、我ながらよい思案であつた。併し彼の思慮は周密ではない。少し氣早で拙速である。彼の識量は惜しむらくは淺小に過ぎる。娘の爲にも亦已が爲にすら謀つて完しと言ふことは出來ない。彼の名譽心と自尊心と慾深と、つまり大過飾な性質が、否何よりも表面ばかり大きく强がつて、內心は短氣な癖にかなり消極的で弱い優柔な性格が彼自身を滅亡に導いたのである。冠者を九郎義經と推して、其の師匠と呼ばれるのを面目と思ひながら、六波羅への聞えを懼れ、「近づきてよしなし」と事勿れ主義を執つてゐる。斬り棄てようと決心した義經を請じては、又「かくてもあるべきものを」とたゆたふのである。事實膽力の据わらぬ證據は、物々しい初對面の位取りに似もやらず、いざとなれば一目見て、棒をも取らず周章てて逃げ入る見苦しさにも瞭然としてゐる。張良廿七代の孫ひんききけんから相傳した日本第一の兵法者とも覺えぬ不覺人である。それにも懲りず、いで法物語して威して返さうと、仰々しく扮裝つて、武を示し辯を飜へして虛勢を張るなど、氣の毒な位無邪氣で、流石にやはり大過飾の人物である。黃金作の太刀と聞いて、「すは〳〵鬼一が願は成就し奉り候」と子供のやうに喜ぶ邊り、如何にも其の人らしい。

兎も角も之を、やはり大過飾で思慮短淺ではあるが、もつと意志的で且旗幟のかなり鮮明な『義經記』の鬼一に比べると、餘程弱くて人情味が增してゐる。「只人は情有るべき浮世なり」と『義經記』作者が結論を下してゐる位、彼の一條堀河の陰陽師は、實際傲倖不遜頑固一徹の負け嫌ひのしたゝか者のやうである。一は强きが故に、他は弱きが故に、同じ結果の失敗を招いた。此の『義經記』の梟惡な鬼一の性格が、其の不分明な素性及び疑を容るべき餘地ある不可解の行動と經緯をなして、反動的に、「世になし源氏」の義經に好意を示したり、表裏二面の複雜なからくり式態度を使ひ分けたりする後の戲曲小說の人物に展開して行く萠芽は、既に早くも本書に於て胚胎し

てゐると觀ることが出來る。『義經記』の彼に暖かさが與へられ、又義經を無下に嫌惡するでもない心理は、正に、愛娘の爲に源氏の爲に、そして亦同時に平家の爲に、一死以て犧牲となるを辭せざる烈士の赤誠への第一步であつた。

本書全體として、童話的の氣分の多分に混じた一脈の素朴な情味はある。併し文辭の稚拙冗漫なのは如何ともし難い。

【題號】 寬文の刊本は『判官みやこばなし』と題してあるが、故平出鏗二郎氏の藏本には『鬼一法眼』と題してあつた由であるから、一名を『おにいち法眼』と呼んでもゐたのであらう。又正德版の書籍目錄に『判官ばなし』とも出てをり、『義經都日記云』とも註してあるから、これも一名であつたらう。後に『鬼一三略卷 判官都物語 義經千本杉』とも題して行はれたと、これも平出氏が言つてをられる。普通には『鬼一法眼』と『判官都話』との二つが通つてゐるやうである。(『原本並所在』の項參照)

『鬼一法眼』の名は開卷直ちに見えるから、それから取つたのでもあらうし、又內容に號けたのでもあらう。『判官都話』の方は內容に與へた名稱である。

【年　代】 內容の說話の成立年代は兎も角も、作品としては『義經記』『御曹司島渡り』『十二段草子』等より早いとは見做されないやうに思はれる。併し亦、構想・詞章・用語等から推しても、室町中期以後とすべきと同時に、德川期には下らぬ作と言ひたい。高野本もかなり古いもののやうである。『近古小說解題』(八三頁)にも、理由は記してないが「室町時代の作ならん」としてある。

【文體・用語】 御伽草紙系の文體である。用語中特に注目せられるのは、「ひけい」(本輯二九〇頁)「ちやうく

わ」（三九六頁・三二九頁）と、やはり「宮づき」（二九五頁）等であらう。

【原本並所在】 正徳五年版『増益書籍目錄』（巻四「ほ」の「假名」部、四一丁ノウ）に

「五山中禅判官ばなし義經都日記 云」

と見えてゐるのが本書であると思はれる。

『新修日本小說年表』には「古代篇、室町時代」（一三頁）に「○鬼一法眼　一巻」、又「近代篇、假名草紙」（四五頁）に

「◎鬼一法眼　五　寛文十年

一名判官都話、巻末に寛文十年庚戌正月吉長林市三郎開板」

と出てゐる。

『近古小說解題』（八三頁）に

「家藏本は「鬼一法眼」と題して三巻なり」

と見え、次に右の寛文版五巻本の『判官みやこばなし』の事を述べ、且

後に「鬼一三略巻判官都物語義經千本杉」と題せる五巻本ありて、奥に「正月吉日、秋田屋市兵衛」とあるは、後世入文堂屋本めかしてかかる題簽をつけたるものと覺ゆ」

と記してある。

本輯の底本としたのは、帝國圖書館藏の前記寛文版五巻（合一册）本の『判官都話』で、繪入（無彩）十二行大形竪本（縱八寸九分、横六寸）、表紙・題簽共新しく、原題簽が一枚だけ扉に貼附してあつて、「（孟入）判官みやこはなし□（一字磨滅、五の字か）」とある。本輯の本文巻首題號として掲げたのがそれである。内題は「判官みやこはなし　一」柱は「判官　一」（巻二以下内題・柱同斷）、巻末は本文の終に示した通り、『年表』及び『解題』記載のそれと同じである。

帝國圖書館本（本輯底本）

班山文庫本

謡曲湛海

鬼一法眼三略巻

校合に用ゐたのは、高野辰之博士藏上中下三巻三册、紺表紙金泥模様、袋綴、古寫十五行の横本（縱五寸五分、横八寸五分）で、普通の奈良繪入御伽草紙の體裁であるが、挿繪は切取られてしまつたらしく一箇處も存してゐない（但し其の痕は空白の儘殘つてゐる）。題簽も内題も無いので、題號が分明でないが内容は紛れもない本書である。誤脫が尠くないが、又刊本に脫してゐる部分が之によつて補はれ得る箇處があるのと、總じて漢字が比較的多い爲、繕讀に利する事が多かつた。但し、一々對校異同を註せず、必要と考へた場合のみに留めてある。刊本は、第四巻から第五巻へは明らかに接續した文を便宜裁斷分巻してあるのでも、三巻本の方が古いらしく考へられる。なほ高野本と前記平出本の『鬼一法眼』との關係は不明であるが、或は近い關係があるのではないかと揣摩したい氣もする。

【系統・影響】 特に本書のみの影響とは言へないし、寧ろ『義經記』の影響と言ふべきであらうが、本書内容の傳說に取材し、少くとも形に於ては本書の系統に屬する後代作品は尠からずある。謡曲の『湛海』は、此の鬼一法眼傳說の後半を取扱つたものであるが、これは『義經記』に近いから、恐らくそれから採つたものであらう。全體としては『金平本義經記』（二之巻三段目及び四段目）『義經興廢記』（巻二）『義經勳功記』（巻三）等にそれ〴〵語られてゐるが、何れも義經傳の一部としてである。其の點でも、これも直接には『義經記』の系統たる事勿論である。

最も有名なのは、やはり文耕堂・長谷川千四合作の操淨瑠璃『鬼一法眼三略巻』（享保十六年九月竹本座）である。歌舞伎にも移され、「菊畑」「大藏卿館」など現に屢、上演せられるが、主として此の傳說に關係がある場面は、其の三段目の切、所謂「菊畑」である。牛若は卽ち虎藏と名を改め、鬼三太の智惠内と謀つて共に鬼一が許に下部に住込むので、法眼が二人を試みる爲に、智惠内に主の牛若を打擲させようとする趣向は、安宅傳說に想を得たのであらう。鞍馬天狗傳說と合體させたのも、鬼次郎・鬼三太と兄弟にしたのも、辨慶まで緣續きにしてしまつた

のも此の戯曲である。

鬼一法眼虎の巻

二年の後に出た其磧の『鬼一法眼虎の巻』(七巻)は右の戯曲を浮世草紙に綴り變へたもので、部分的に少しづつの變化増減があるだけである。浮世草紙にはなほこれより以前、『三略巻』と同年の作に祐佐の『風流詫軍談』(五巻)がある。

俊寛僧都島物語

讀本の中では馬琴の『俊寛僧都島物語』(十册、文化五年刊)を擧げなければならない。これは鞍馬天狗傳説どころではなくて、俊寛と鬼一との合體を觀る事になつて、失意非命の法勝寺の執行をして遂に鹿谷の策謀を空しく了らしめぬ爲に、作者の同情と遊戯心とが一になつてトリック式跳躍を試みてゐる。

義經虎卷

其の他、義經の一代記風の繪本や草紙類を始め、此の鬼一の傳説の記されてゐるものは隨分ある。歌舞伎にも『三略卷』の「菊畑」の鬼一は諸名優によつて演じ傳へられ、七代目團十郎のなどは新歌舞伎十八番の一に數へられてゐるし、狂言としては他に『鬼一法眼指南車』(寶暦四年、森田座)『勝時榮源氏』(明和二年、森田座)等にも此の傳説が脚色せられてゐる。

なほ、此の傳説竝びに本書等と關聯して、其の所謂兵法虎の卷の珍書といふものが傳へられてゐる。四十二ケ條の詞書に各〻繪圖を挿み、『兵法義經虎卷』(上中下三册)と題してあるもので、上梓までされてゐる。「明暦丁酉仲春勢州渡會浮洋」といふ者の家に祕して傳へたと序文に見えるが、軍禮作法の規定が間〻散見する外、大抵眞言神咒の祕法祕術で、兒戯に類する物である。それでも、卷首に勿體らしく同書の由來を記し、黄石公から子房に傳へられたのを大江維時將來し、源義家の爲に匡房卿假名に和らげて授け、それが鬼一の祕庫にあつたのを義經が傳へたとある。本書の影響があるとしても單獨にではなく他の諸書や口碑等と綜合的に、或は本書と關係なくして他の影響で生れ出たのかもしれないが、本書の末段に虎の卷のみは炎の中から天上に昇り、又御曹司の寫し取つた分が一部留まつたと記してゐるのは、都合よい所據を與へてゐるわけである。尤も既に虎の卷傳存の口碑があつたから右のやうな説明をせねばならなかつたのでもあらう。『會津風土記』などにも、鬼一が兵書今に遺つてゐると記し、『俗説辨』の著者すら之を格別否定しようとせぬのが却つて不思議な位である。井澤氏もなほ鬼一を實在の兵術家として認めようとしてゐるやうである。他の場合に於ける所謂俗説辨妄の鋭さを茲にだけは見出し得ない。彼は寧ろ牛若千人斬の非を論ずるに專らであり過ぎた。(『俗説辨』正編卷一二、士庶「五條の橋にて千人斬の説」參照)

日本記

梗概

抑、日本開闢の始、伊弉諾・伊弉冉の二神語らひをなし給ひ、既に天開くる上は、下に國の無い筈はないと、八十島を覓める爲に、雲の上から御鉾をさし下して一大海の面を探探られたが、渺茫として鉾に觸れる島とては無かつた。

空劫の以前には天地未だ開けず、今成劫の時到つて神人出現し、其の軀を分つて、頭を須彌、髪・鬚を木草、眼を日月、息を風、四肢を四洲に、又骨は金、涙は水、肉は土となし、青を東、赤を南、白を西、黑を北、黃を中央に配し、中は土に司つて甘い味を生じ、北には黑い水があつて鹹く、西は白い金で辛く、南は赤い火で苦く、東は青い木を生じて酸い味をなし、其の酸きは藥師で雙調の聲を說法し、苦きは黃鐘、寶生如來、辛きは阿彌陀の平調、鹹きは盤涉、釋迦の音聲、甘きは大日の壹越調、宮・商・角・徵・羽の五音は卽ち酸・苦・甘・辛・鹹、乳味・酪味・生酥味・熟酥味・醍醐味、五つの聲を集めて、華嚴・阿含・方等・般若・法華と之を釋するのであるといふ。一切はかく空より生じ、一體必ず三寶、三寶卽三觀、三觀直一心、其の一心はやがて空であるから、迷のあるべき理がない。かほどの大海に島一つ無きこそ不思議といはればならぬ。

男神の徒らに引上げ給ふ鉾を見て、天の陽、地の陰和合してこそ成就すべきを、唯慾に尋れ給へと女神に諫められて、諾尊の重れて下さうとせられた鉾の滴りが、海上に落ち留まつて一の島となつた。冉尊御覽じて「あはぢよ」と仰せられた御詞を其の儘名づけた此の島が、卽ち今の淡路島である。

それは恰もかの大海の面に大日の梵字が浮んで漂つてゐる上に、其の鉾の露が落ち固まつて土となつたのであつた。大日の梵字の上に出來始めた國であるから、大日本國と呼ぶのである。其の後に、月を象る月氏(つきうじ)國の天竺、星を象る震旦國の唐土も開けた。天竺・唐土の廣きに比ぶれば、芥子の精の淡路島に出來始めた小國の日本ではあるが、日域(にちいき)と號して日を象るめでたい國柄、まことに三國一の尊い國土である。此の國に生れあうて、詩を樂しむ我等の幸福のさても

嬉しさよ。

【性質及び來由】 幸若舞曲の一。祝儀物。

舞の本は元來幸若舞のテキストであるが、形態からしても、詞章だけの側から言つても、謠曲・狂言に比してすら、舞臺劇の臺本によりは、御伽草紙や軍記物に近接してゐる一種の敍事詩的作品で、其の大部分が武勇傳說(ヒロイックサガ)を素材としてゐる。事實、讀み物としての他に、讀み物としても行はれて來たのは、異とするに足らない。(六八一頁『笛の卷』考說(性質)の項參照)だから演劇史・戲曲史・歌謠史の取扱ふところであると同時に、亦近古の草子文學として、小說史の攻究對象たることから逸せられるわけにいかない。(平出氏の『近古小說解題』にも總て小說と看做して收めてある。)本書に舞曲四篇を收めたのも此の意味からであるが、原本フシ附のあるものは其の儘にしておいたのは、未刊の珍しいものであるから、便宜、舞曲としての形をも併せ示さうとしたが爲に他ならぬ。

幸若の曲目は、所謂三十六番として、寬文版の『增補書籍目錄』(『舞並草紙』部)及び元祿五年刊の『續書籍目錄』(五之卷、『舞並草紙』部)に載するところは、(便宜漢字を宛てた。順序は原本のまゝ。(兩目錄全く同じ))

讀み物としての舞の本

舞三十六番

大職冠	滿仲	信田	百合若大臣	夜討曾我	十番切		
富樫	笈さがし	高館	敦盛	景清	烏帽子折		
八島	伏見常磐	文覺	鎌田	築島	新曲		
和田酒盛	和泉が城	元服曾我	小袖曾我	四國落	常磐問答		
堀河夜討	笛の卷	伊吹	硫黃が島	馬ぞろへ	未來記		
木曾願書	那須の與一	濱出	入鹿	清重	腰越		

で、『群書一覽』（卷三、草子類）には

夢合　劍讃歎（兩書編目錄にも、上の三十六番の次にそはある）

の二番を加へてゐる代りに、『かまだ』『いづみが城』が脱してゐる。其の他、番外として

番外舞曲

靜　切象曾我（此の二番も、兩目錄に出ゐること前二番と同前）

鞍馬出　張良

（以上は『いづみが城』を除き、總て『新群書類從』第八「舞曲部」に收められてゐる）

及び本輯に收めた

日本記　九穴の貝

續輯收載豫定の

相模川

以上總計四十五番を算し、なほ他に、短い祝言の小ぶしもの「一天平か」「松の枝」「長生殿」等數番（所載は『日本文學研究』三三頁參照）がある。

日本記の由緒

此の『日本記』は、右の如く所謂三十六番（兩樣いづれもの）中は漏べられないものであるが、幸若としては大切な曲で、即ち創始者幸若丸が召されて後花園院の御前で謠つた由緣附のもの、此の時諸大夫に任ぜられて、以後幸若太夫を名告るに至つたと傳へられる作である。（高野博士著『日本歌謠史』五八三―五八四頁參照）

附記　此の曲及び『いづみが城』は、今、筑後の大江（福岡縣山門郡）の大頭に傳存して演ぜられてゐるものである。

扨本書內容は、日本開闢神話に佛說及び陰陽五行說的解釋の附加せられたものである。

開闢神話

謠曲淡路

【素材並構想・表現】『古事記』（上卷）及び『日本書紀』（神代卷上）の開闢神話の一部、諸冉二柱の神國土生みに先立ち、天浮橋に立つて天沼矛を指下し給ふ段に基づいてゐる曲である。矛の鋒の滴りが凝つて成つた島は淡能碁呂島（『紀』には磤馭盧島と記す）で、淡路洲（『記』には淡道之穗之狹別島）を生み給ふのは、なほ後の事であるが、これでは其の島を淡路としてゐるのは、謠曲『淡路』の

「振り下げし鉾の滴り露凝りて一島となりしを、淡路島よと見つけし、爰ぞ浮橋の下ならん。」

と同斷である。作としての兩曲の直接關涉は措いて、全く同傳同說である事だけは知り得られる。『淡路』にあつては、なほ原神話の所傳をも肯定しようとして、

「卽ちこの淡路の國を始とぜり。さればにや二柱の御神の、磤馭盧島と申すも、この一島のことかとよ」

と調和的說明まで附してゐる。而も原神話では、淡路島と淡島との混錯もあるやうであるが、『紀』の本文では、淡路洲を胞として大日本豐秋津洲を生み給ふことになつてをり、（同書の『一書』も同じ傳承）且、淡路の命名は御意の快くなかつたことに因由すと註してある。又『一書』には淡洲を胞として淡路洲を生み給ふとし、他の『一書』には、磤馭盧島を胞として淡路島を生み給ふとも見えてゐる。（此の兩島の結合は既に原神話にも端は發してゐるわけではあるが、謠曲『淡路』の說明の原據を必ずしも此處に求めなくてもよからう。）潮沫の凝つて島となつたといふ想像については、他の諸島をも、

「卽對馬島・壹岐島及處々小島、皆是潮沫凝成者也。亦曰二永沫凝而成一也。」

謠曲逆矛

と『紀』の本文に記してあり、謠曲『逆矛』では、淡路島を始め大八洲國總て「矛のしたゞり凝り固まつて國となれり」と說き、天地人の三才の分立も矛の德に歸してゐる。

陰陽五行說及び佛說の混淆

なほ本曲の內容は純日本神話に陰陽五行說と佛說との混成を示してゐる。高野博士は、唯一神道の影響を認めたいと言つてをられる。前述の謠曲『淡路』にも

「然れば天に五行の神ましまします。木火土金水是なり。既に陰陽相分れて、木火土の精伊弉諾となり、金水の精凝り固まつて伊弉冊と顯る。然れども未だ世界ともならざりし前を伊弉諾といひ、國土治まり萬物出生する所を伊弉冊と申す」

又、『逆矛』にも

「そも〳〵大日本といつぱ神國たり。神は本覺眞如の都を出でて、和光同塵の御形、尤も佛法流布の國たるべしやな。有難や。南無や歸命頂禮、大日覺王如來、昔伊弉諾・伊弉冊の尊、この御矛を携へて、天の浮橋を踏み渡り給ひ、卽ち御矛をさし下し(下略)」

と見えてゐるのを併せ比べて感ずると同じく、なほ兩部習合思想のまゝ、吉田流の敎をも受容しようとしてゐるかに思はれる。如上の引用文にみても、右の兩曲、特に『淡路』と本曲との關係の、直接ではなくとも、無緣でないことが想測せられる。

天台の大判

五行に方位や四時を配するのは陰陽家の常であるが、此の曲では、五方・五色・五味・五音・五調子・五智如來・五時敎まで、思ひきつて何もかも取合はせたものである。(尤も乳味・酪味等の五味に五時を比するのは天台の大判で、既に釋尊の敎『大涅槃經』卷一三、聖行品)に由來する處ではあるが。)なほ、榮西の『喫茶養生記』(卷上)

喫茶養生記

などにも、五臟を五味・五行・五方、或は四時(但し、春夏秋冬と四季末)・五色・五官等に配し、又

「肝ハ東方ノ阿閦佛也。又藥師佛也。金剛部也」
「心ハ南方ノ寶生佛也。虛空藏也。卽寶部也」
「肺ハ西方ノ無量壽佛也。觀音也。卽蓮華部也」

「腎ハ北方ノ釋迦牟尼佛也。彌勒也。卽羯磨部也」
「脾ハ中央ノ大日如來也。般若菩薩也。佛部也」

國號の由來と大日の梵字

とも記されてゐる。時代の此の種の思想傾向の一般が併せ窺はれる。

又、大日本國の國號は、大日の梵字の上に落ち留まつた矛の露が凝成したに由來するといふのは、『劍卷』『平家』又は『太平記』に附す)に

劍卷の記述

「天神七代のはじめ、國常立尊、此下に國なからんやとて、天瓊矛を降して大海の底を搜り給ふに、國なければ鋒を引上げ給ひけるに、矛の滴落ち留り、凝りかたまり島となりにけり。吾朝の出で來るべき前表にて、大海の浪の上に、大日といふ文字浮べり。文字の上に鋒の雷留りて島となるが故に、大日本國と名づけたり。淡路國は是日本のはじめなり」

と語られてゐると同說で、(國常立尊に結びついてゐるだけで、淡路を日本の始とするのも、本曲及び『淡路』と同斷)、これ亦前揭の諸資料と併せて此の時代の俗傳としての開闢說の一面を窺知することが出來る。

本書と盤古神話

なほ、本文の初の部分に

「されぱにやすなはち、その空劫の以前には、天地開け始めず、今成劫の時を得、みこ出現の身を分け、頭を須彌となし、髮鬘を木草とし云々」

とあるのは、開闢說として、世界大播布說話の一種たる所謂盤古神話の屍體化生說話(『五運歷年記』『述異記』)を意味するは勿論であるが、或は佛徒を通しての『吠陀』神話からの移植かも知れない。

三國比較論

又、末段の日・月・星に象つた三國比較論は、『笛の卷』の文珠・弘法の問答にも出てゐて、其處には日本人の負けじ魂が躍如としてゐる(本輯三九〇頁參照)が、其の芥子の精に成生した小國の大日本が、萬國の始であると說く自尊の念、そして此の「三國一の我が朝」で平和に長生を娛しみ得るといふ希望と滿足とが、亦此の曲を成した

所以であらう。

【題　號】　内容に應じ、且其の原據の書名を借りて附したものであるは言を俟たぬ。木活字本では『日本紀』の表題が附いてゐるが、内閣本では『大日本記』といふ題名になつてゐる。（「原本並所在」の項參照）

【年　代】　不明。但し後花園院の御前で謠はれたのが事實とすれば、正長以後、少くとも略、文明以前には作られてゐた筈である。或は作はそれよりなほ少し溯らせても差支はないであらう。

【原本並所在】　本輯の底本に用ゐたものは、「九けつのかひ」と共に、藤井乙男博士所藏の德川初期頃の筆寫と思はれる簡單なフシ附のある八行本である。空押の青表紙、袋綴大形竪本（縱九寸二分、横六寸九分）で、本文第一頁の首に「高山菅氏圖書」及び「熊澤之印」といふ朱印があり、卷末にこれも所有者と見えて「まつ村みさ」の署名がある。全九册、二十六番揃（これで完册であるか如何かは不明であるが）の舞の本で、

やしま	きよしげ	たかだち	合一册
*びやうご	いわう島		合一册
きりかれそが	けんぶくそが	わださかもり	合一册
みらいき	くらまいで	ふぼしおり	合一册
しだ	まんぢう		合一册
小袖そが	夜うちそが	十番ぎり	合一册
ふしみときは	ときはもんだう	ふえのまき	合一册
しづか	かげきよ	はまいで	合一册
日本記	いるか	大しよくはん	合一册

日本記
日本紀
大日本記

藤井博士本
（本輯底本）

*樂島のこと

班山文庫本
（内閣本寫）

といふ組合になつてゐる。内題の有無は統一なく（『日本記』も内題は無い）奥書は何も無い。又本文處々校合若しくはたゞ誤を正したらしい書入がある。本文寫眞版によつて知られるやうに、原本には、例へば「ゐ」とある如きは、皆「わ」のやうに改めた。『九けつのかひ』も同樣である。（次の『いづみが城』も之に倣つてある。）

附記　二番共短い曲であるから、藏者に乞うて、全文を別に原本のまゝ附しておくことにした。

校合に用ゐた一本は、高野辰之博士藏本で、これは内閣文庫藏本（舊和學講談所本・舊淺草文庫本、原本九行七枚無畫古寫）の書寫、『大日本記』と題したもの。簡單なフシ附がしてある。高野博士の附記には

「原本の字體は寛永の奥書ある靜物語と同筆なり」

とある。

今一本は、岩崎文庫藏の木活字版十行本（フシ附なし）で、空押の黄がかつた色の表紙、無畫袋綴の大形竪本（縱約八寸六分、横約六寸六分）で、卷末に「雲村文庫」の印あり和田維四郎氏の舊藏に係る。これも全九册十五番揃の舞の本で、

岩崎文庫本

ふぼしおり	くらま出	合一册
しづか	未來記	合一册
元服曾我	拾番斬	合一册
とがし	いるか	合一册
日本紀	大織冠	合一册
*大臣		合一册
夜うち曾我		一册
信田		一册
和田さかもり	はま出	合一册

*百合若大臣のこと

になつてゐる。『しづか』『拾番軍』『夜討曾我』の他は各番内題は無い。『日本紀』以外の各番の内容詞章は大體流布のものと同じであるが、流布本の誤を正し得るところも少くない。

即ち、藤井本は、『日本記』『九けつのかひ』の二番を收めた寫本として、内閣本と共に珍貴の資料であり、岩崎本は舞の本古版本の一種として、而も其の中に『日本紀』を收めてゐる刊本といふ點で、これ亦珍稀の書として注意せらるべきものである。

九けつのかひ

寫一卷

梗概

頼朝船中の興に鯉の潛を所望し、生きた貝の獲物を肴にとの御錠である。梶原承り、鯉を召すには時刻あればとて、若侍の面々海に入つて慰め參らせよと下知する。本馬彌二郎を初め我劣らじと水を潛り、海草・貝類を採上げて獻れば、御感斜ならず、梶原を奉行として數々恩賞を賜はる。餘りに周章てた彌二郎などは、烏帽子のまゝに飛込みざま、蠟に海松の附いたのを採つて參つたのも一興と、百町の地を引かれたのは面目であつた。

若い秩父六郎一人のみ、午の刻頃から海に沈んだまゝ、未の下りまで姿を見せぬので、頼朝心もとなく思ひ、頻りに捜索を命ずるのを、父の重忠遮つて、弓取の子として、かゝる遊びの水練に溺れんほどの不覺人ならば、救ひ上げても所詮御用に立たんこと思ひもよらずと、冷然として笑つてゐると、やがて浮び出た六郎の膚には大きな貝が三十もひつしと附いてゐる有樣に、頼朝驚歎して召寄せられる。恐入つて參らぬのを、齋(院)次官親能手を引いて長まる。頼朝つくづくと感に堪へ、盃に副へて常陸國鹿島の庄、かいほつの郷八百町を下し賜はつた。

【性質】 幸若舞曲の一。祝儀物。但し此の曲名も所謂三十六番の内には見えない。尤も三十六番中の一で、御伽草紙二十三篇中にも『濱出草紙』として收められてゐる『濱出』(一名『蓬萊山』)の曲に附屬したものと見ることも出來るが(それは内閣本によつても知られ得る。)(原本並所在)の項參照)、通常『濱出』の演ぜられる際には、やはり『濱出』のところだけで、これは主に祝儀の場合に用ゐられるものであるといふ。濱出の續であるとしても、主題から言つても別に獨立させてもよいし、『九けつのかひ』といふ外題も與へられてあるほどであり、又事實切り離されても來た以上、別の一番としても取扱はれ得ると思ふ。

濱出との關係

全篇がめでたい(『濱出』もさうであるが)說話である上に、作中の人物の賴朝も彌二郎を賞してすら、「あつぱれ祝の曲かな」と悅に入つてゐる。理窟無しにめでたい小曲である。かいほつの鄕の愚賞も、梅松樓に因んだ『鉢木』の三箇の庄といふところであらう。

內容は卽ち賴朝の濱遊びに催された侍共の潛水の技競べの興に、秩父六郎が海底に入つて大貝三十を採つて來て御感にあづかるといふだけの物語である。

【題號及び素材】 題號の『九けつのかひ』は卽ち九穴(くせつ)の貝(かひ)で、

「あはび貝の殼に、穴の九つあるもの。此の貝にて食すれば長壽すといへり」

と『增補俚言集覽』(久集增)に見えてゐる。此の曲秩父六郎が海底に入つて大貝を獲て來ることが主說話になつてはゐるけれど、題號に應ずる所謂『九穴の貝』に關しては全然明記せられてない。

然るに秩父六郎龍宮行の傳說を載するものに、同じ近古の小說である『賴朝のまいり』(國史叢書所收。『賴朝最期物語』と題してある。)がある。同書末尾に

「此國にあればこそ、かやうの身持も節なれとて、送り文を書きて、諸人の方へ暇を乞ひ、我は龍宮へ罷るとて、其儘海へ入りて、後に四百年になれども、未だ歸らず、龍宮のおと姬に契り居たりけり」

とあり、漠然浦島傳說に影響されたといふ底の童話的結末をなしてゐるのであるが、其の龍宮行の動機は、誤つて主君賴朝を弑した爲、賴家の報復から脫れようとてである。

なほ、賴家が六郎招致の一策として、由井ヶ濱に蓬萊を飾つて宴を催すとて諸大名を集めることが、『濱出』の素材と類似してゐると言へば言はれる。

九穴の貝

『賴朝のまいり』九穴の鮑は貝の王なり

『弾指尽』

畠山重保龍宮行傳說
賴朝の最後(賴朝最期物語)

更に同傳說に取材した謠曲に『九穴』(二百番外百番(前百番)卷八)がある。これは、賴家ではなくて賴朝が、由井の沖の遊山に、龍宮の珍寶九穴の玉の奇特を梶原から聞いて、之を取つて還る者を搜めると、奸惡な梶原は、此の機會に出頭の忠臣秩父六郎重安を失はうとたくらみ、五とくの歸とかいふ稀代の寶を持つてゐて海中の行動自由なる由を告げて、重安を此の役に選ませる。重安梶原を憎みつゝも、君命を畏み、海底を探れば、龍神其の忠勤にめでて、沙迦羅龍王自ら九穴の玉を與へるといふ內容である。所謂海宮神話の流れを受けてゐるは勿論であるが、特に玉取傳說(謠曲『海士』・舞曲『大職冠』(たいしとくわん)・『讃州志度寺緣起』等)の攙入を看る。賴朝の舟遊、梶原の奉行、秩父六郎の探海探貝、皆『九けつのかひ』の構想に應ずるものがあり、且、これでは明らかに九穴の玉を獲ることになつてをり、其の珍寶の說明としては

「此沖の龍宮界とやらんに、九穴の玉とて妙なる寶珠と承り及びて候」
「廻り九尋の貝に、九穴の星あり。此玉を納め、都安全にして人の齡を保ち、萬何事も心のまゝなるとこそ申し候へ」
「抑九穴の玉といつぱ〳〵、九穴は九曜の星を表せり。ひらくる時には金剛胎藏の兩界をあらはす。此玉を一たび守護する人は、現世にては怨敵を亡ぼし齡を保ち、來世にいたれば無爲安樂に生まるべし」(謠曲『九穴』)

と叙べられてある。

卽ち舞曲の『九けつのかひ』の內容も、此の謠曲の素材と同傳說から出てゐるものたるを疑ふことは出來ない。隨つて其の題號も無緣の曲名ではない。たゞ初から此の題を附しながら、內容にそれを語らなかつたとすれば少し無頓著に過ぎる。後に同材の謠曲名(或は今傳はらない田樂の曲などの中にも類曲があつたかも知れない)から思ひついて便宜附けた名か、又はもつと詳しい原作でもあつたのか、今知るに由ない。

島山重保

島山六郎重保は秩父庄司次郎重忠の長子、實朝將軍の時、執權時政の後妻牧の方の讒によつて、元久二年六月廿二日、異志ありとして由井ヶ濱に圍み誅せられ、ついで父重忠も討手の大軍に遇うて戰死するに至つた。龍宮行の傳說は其の由井ヶ濱で滅んだことから、後の建保の和田合戰に於ける朝比奈三郎義秀の巡島說話と同じ一種の生脫說話的動機を含むものと解釋され得る。又若し別の動機から發生したものとすれば、和田平太胤長の伊豆伊東崎洞窟探險(『吾妻鏡』卷一七、建仁三年六月一日の條)、仁田四郎忠常の富士人穴探險(同書同卷同年同月三日の條、及び『富士の人穴草子』)等と同型の武勇譚(探險說話)と看るべきであらう。由井ヶ濱の舟遊水練は事實としても屢、行はれたらうし、朝比奈の小坪の游泳、鮫魚の捕獲は『吾妻鏡』(卷一六、正治二年九月二日の條)にも見え、馬琴の『朝夷巡島記』(後輯〔第六篇卷之三〕第五四、「濱相撲藤物、小靈海大鱷」)の素材となつた。

生脫說話

探險說話

齋院次官親能

附記 序に、馬琴の右の段の構想は、『吾妻鏡』に基づくと共に、類話である『今昔物語』卷二三、「相撲人私市宗平投上鰐語第二三」の記述を換骨して利用したのではなかつたかの感がある。

なほ六郎が誤つて賴朝を刺したといふ、賴朝薨逝の機因に關する一傳說は、前掲『賴朝の最後』に記されてあることは既に一言した。

齋院次官親能は儒家の出。父は明經博士廣季。『源平盛衰記』(卷四一)には、木曾義仲に一味した前美濃守義廣(〔六條判官爲義の末子〕)を雙林寺に搦取つた事を記し、「前齋院次官親能」とある分注に「前明經博士廣季子、賴朝之臣專一之者也」としてある。『吾妻鏡』(卷三、壽永三年二月五日の條)一の谷の戰に參加した義經の部下の內にも其の名が見えてゐる。

藤井博士本(本輯底本)

【原本並所在】 本輯底本は『日本記』と同じく、藤井博士藏本の九冊揃古寫本の內、『しづか』『かけきよ』は

まいで』と合冊の一本で、『はまいで』の終に續いて『九けつのかひ』といふ內題があり、次の別丁から本文は始まつてゐる。

班山文庫本

校合に用ゐたのは、班山文庫本で、これも內閣本(舊淺草文庫本。原本九行六枚無畫古寫。但し『大日本記』とは別の種類のもの)の書寫で、これは「九けつ」ではなく「九け」で且『賴朝はまいで九けのかい』と題し、『濱出』と『九穴の貝』とが續けて收めてあり、別に『九けのかい』の內題は無い。フシ附なし。

賴朝はまいで九けのかい

因に、岩崎文庫藏木活字本の『はま出』は普通のまゝで、『九穴の貝』はついてゐない。

賴朝濱出

【參　考】 宇治加賀掾の正本『賴朝濱出』(藤井博士校註『近松全集』第三卷所收)は曾我物で、此の舞曲とは別の物である。

いづみが城 一名勝負分

寫一本

判官義經が高館の御所へ移られてから早三年を過ぎた。秀衡を初め奥州五十四郡の大小名皆心を寄せてかしづき奉る。此の由關東へ隱れなく、早くも聞きつけた梶原は此の威勢に驚き、又若し鎌倉殿との和睦成らば、逆櫓の遺恨に一族を誅せられる事を懼れ、嫡子源太景末(季)・次男平次と凝議し、景末の獻策に從つて、若宮の別當僧正に判官調伏の祈りを賴んだ。僧正は固辭したが、梶原の懇願に力及ばず、終に呪詛の壇を設け、肝膽を碎いて四七日の法を修したので、大願成就の奇瑞を見、果して驗は現れた。

しかし災厄は判官には到らずして、秀衡入道の上に來た。頓に重病に臥して今を限りと見えたので、長男錦(木)戸太郎・二男伊達二郎・三男和泉三郎・四男四郎基(元)義・五男ひづめの五郎及び乙の姫の六子を病褥に近づけ、亡き後の兄弟の不和を戒めて後事を託した後、三郎を使として判官を迎へさせた。

判官驚いて急ぎ伊勢三郎義盛・亀井六郎重清二人を隨へ秀衡が館に臨まれると、秀衡斜ならず悅び、五人の子息に扶けられて起き直り、嗽手水に身を淨め、直垂の上を著して對面し、判官の御前で子供等にそれ〴〵所領を分配し、嫡子に惣領させぬ慣例なればと、次子安(泰)衡を惣領として相續させ、又出羽十二郡は君の御馬の草刈所にもと獻上した。そして、鎌倉殿と御和睦の曉、君の御供申して上らうと樂しんでゐた老の望の叶はぬ遺り多さの繰言に不覺の涙を流しながら、改めて君に二心あるまじき旨の起請文を五子に認めさせ、安衡の起請は氏神松島大明神の御寶殿に納めよ。錦戸が起請を我が君に奉れ。三郎がのは我が肌の守に掛けて冥途の證據に携へて行かう。殘る二人がのは灰にせよとて燒いて水に入れ、之を五人の兄弟に呑ませて契約を固めさせ、最後に、我が末期の一句には合戰の用意を敎へ置くべしと、自分の死後必ず鎌倉殿から判官討つて參らせよとの僞の御敎書下らんに、一度には返事すな、二度の使を斬つて捨てよ。三度にならば鎌倉勢攻下るは必定故、兄弟五人大將にて、辨慶を軍奉行とし、切處に據つて防げ。兵盡きたらば退いて

奥四十八城に立籠り、持久戰に討手を惱ます程ならば、敵は長陣に疲れ、其の間に御和睦成る時は、汝等は九郎に忠あるを侍と、却つて勸賞にあづかるべく、秀衡も草の陰から鐵の盾となつて守護すべきぞと綱々と遺言しつゝ、次第〴〵に弱つて「猶々申したき事の候へども、餘り草臥れて候程に、暫く休み申さん」といふを此の世の名殘として、文治四年十二月二十四日の曙に、九十八歳の生を終つた。

一門の愁傷、殊更判官の悲歎、義經自ら喪服を著けて野邊送りに列なり、後々の事まで心を盡くされた。果然秀衡の遺言違はず、百ヶ日も過ぎぬに鎌倉から御敎書が到來して、上野以下五ヶ國を餌に判官の首を求めた。慾に眼昏んだ兄弟は、父の遺言と起請の誓約を破棄して、皆錦戸の言に同じ、判官を討たうと云ふ。一人和泉の三郎は孝義を守つて爭ひ諫め、終に席を蹴つて歸り、かくと女房に語つて慨く。もとより女ながらも忠義に勇む賴もしさに、忠衡は兎も角も今宵高館の御所が心もとないとて、部下の精兵廿七騎を急がし立ててやつたが、厄難はいち早く却つて我が身に迫らうとしてゐる。

四人の兄弟は、先づ忠衡に詰腹切らせよと、照井太郎以下三千餘騎を和泉が城へ差向けた。三方は衣川、一方は堀、さしも要害の城ながら、寄手は案内者、城兵も力を限りに防ぐが、何としても不意打である。間近の高館殿には手に取るやうな鬨の聲に、さては和泉が城が兄弟に寄せらるゝぞと、辨慶に仰せて救はせられる。途にて辨慶きつと思案し、討手はやがて此方へも向はう。御所こそ危急ぞと三十五騎の御所侍諸共俄に引返す。和泉が廿七騎のみは、主の先途に參り會はうと、引分れて駈けつけ、圍みを割つて通り城兵と一になり、敵味方互に恥を知り名を惜しみ、血戰時を移し死傷夥しい內に、寄手は流石大勢、城方終に一二の城戸を破られて本城につぼまる。

忠衡は初から兄弟に對して戰意はない。用心もせず物の具も著けずにゐたが、不覺の死は武士の恥辱と女房に諫め勵まされ、げに尤とて七つと五つの二人の若を呼寄せ、不運の者共、せめては父が手に懸けてと泪ながらに先づ兄の花一を刺殺す體を見るより、頑是無の弟花若、「怖しの父御前、宥させ給へ」と母が方へ逃げて行くのを、「汝一人はやらぬ。父母も兄も行くぞや」と、これも胸元を刺通し、我が身を抱いて男泣き。いでや最後の軍せんと、物の具固めて躍り出る夫の武者振、「何とて我をば見捨て給ふぞ。御供せん」と同じく腹卷に長刀掻込んで續く女房は、流石四國の合戰に判

官の御身替となつて能登殿の矢先に駈塞つた佐藤三郎次信が姉であつた。奥州に隠れなき大力の剛の者、大手の木戸を差固める間に、夫は櫓に上つて名告を揚げ、二大音に寄手を罵つて、差詰引詰散々に射る。矢種盡くれば夫婦諸共切つて出て、敵を四方へ追散し、二人手に手を取り組んで、しづ〳〵と城内へ引取つた有様は、人間業とは思はれなかつた。

月王丸・武王丸といふ二人殘つた童に防矢を命じて城に火を懸けさせ、己れは子供の死骸の傍らに坐して、いざ女房を害せんとすれば、夫の最期を見届けてから御供申さうとの健氣な言葉、忠衡先づ悠々と生害し、妻は夫の刀を執つて、切先を含んで俯した。女房は二十九、忠衡は三十三。其の他の者共も皆同じ煙と失せた。實に義烈の武士物語である。

— 梗概 —

【性質】 幸若舞曲の一。特に寶文・貞享・元祿等の古書目所載の所謂舞三十六番の一（『群書一覽』の三十六番中には數へてゐない）。且現在演唱曲目の一。

内容は、義經滅亡の衣川合戰（やはり舞曲中にも之を題材とした『高館』がある）に關聯した秀衡の三男泉三郎忠衡夫妻の忠勇貞烈を物語るもの、史實を基礎とした武勇傳説を取扱つた曲で、判官物の傍系作品である。即ち謠曲の『錦戸』と同材で、前記舞曲『高館』の姉妹篇。

【素材】 番外舞曲で寄ろ御伽草紙として行はれた『相模川』の義經亡靈の述懷中にも、此の傳説は本書と略、同じ内容のものが簡略に語られてゐる。今其の部分を抄出すると、

「やう〳〵百廿日と申に奥州につきければ、秀衡喜ひでひらよろこふで、高館たかだちにしんざうにやかたをたて、柳の御所と申ていつきかしづきたてまつり、少し心ものびゆくおりふし、うゐむじやうのかなしさは、悲秀衡病ひでひらやまふのゆかにほどなくむなしくなりければ、百日もすぎざるに、何なにかはさのみにくうして、よしつねうつてまいらせよと、たばかり御はんにしき

戸館どがたちにつく。秀衡ひでひらぞんじやうにありし時、一しよにとこそちぎりしに、たばかり御はんはいけんし、をの〳〵心がはりをつかまつり、その中に三男いづみの三郎たゞひらは、口惜くちおしきをの〳〵のおほせかな。ちゝのゆいごんにのたまひしも、是をこそ申させ給ひ、此むほんにおゐては、たゞひらは御同心にまいらず候と、ざしきをたちて我やどにかへりける。

きやうだい申やう、にくきものがいひやうかな。いざやをしよせいづみにはらをきらせんとて、かめ井・かなざは大しやうにて、いづみが城へをしよせ、はらをこそきらせけり。女ばうもかいし、いとけなきわかをさしころし、やみ〳〵とうせにけり。」（舊霞亭文庫本『さがみ川』下卷）

大體本書と一致するから、本書の影響もあるであらうが、謠曲『錦戸』の記述といひ、口碑として別に傳承せられてゐたのであらう。それを最も詳しく敍べてゐるのが本書である。

此の武勇傳説は架空な物語ではない。隨つて本書の素材の研究は、主として史實との關係を闡明するに在ると言へる。

一　秀衡の遺命　此の舞曲の前半を構成してゐる秀衡遺言の一條に關しては、『吾妻鏡』（卷七、文治三年十月廿九日丙申）に

「今日秀衡入道於二陸奥國平泉館一卒去。日來重病依レ急（少時）。其期以二前伊豫守義顯一爲二大將軍一可レ令二國務一之由、令レ遺二言男泰衡以下一云々

鎮守府將軍兼陸奥守從五位上藤原朝臣秀衡法師、出羽押領使基衡男、嘉應二年五月廿五日任二鎮守府將軍一、叙二從五位下一。養和元年八月廿五日任二陸奥守一、同日叙二從五位上一。」

玉葉の記載

又『玉葉』(卷五四)にはもつと詳しく

「文治四年正月九日乙巳。或人云、去年九十月之比、義顯在二奥州一、秀衡隱而置レ之。卽十月廿九日秀衡死去之刻、爲二兄弟和融一(兄他腹之嫡男也 弟當腹太郎云々)以二他腹嫡男一令レ聖二當時之妻一云々。各不レ可レ有二異心一之由令レ書二祭文一了。又義顯同令レ書二祭文一、以二義顯一爲二主君一、兩人可二給仕一之由有二遺言一。仍三人一味、廻レ可レ謀二頼朝一之籌策云々」

義經記と本書

と見えてゐる。『義經記』(卷八の二)「秀衡死去の事」の敍述は一層本書の構想に近づいてゐるが、なほこれほどに委細でなく、判官も臨終に招ぜられてはゐない。序に『參考源平盛衰記』(卷四六「義經行家出都並義經始終有樣事」)に載する『八坂本』及び『如白本平家物語』には

「或時秀衡判官ニ申ケルハ、詮ズル所鎌倉殿ニ御中申直シ奉ラン。縱又鎌倉殿入道ガ申旨ヲ御承引ナクテ、奥ヲ攻サセ給候共、奥州・羽州兩國ノ兵廿八萬騎ニテ防ガンズルニ、ナドカ防ガザルベキト、ヨニモ憑シゲニコソ申ケレ。憑リケル所ニ、判官ノ運ヤ盡タリケン、文治四年十二月十二日秀衡入道年六十六ニシテ失ニケリ」

秀衡の死屍の木乃伊

とある。なほ秀衡卒去は『吾妻鏡』『玉葉』によれば、前掲のやうに文治三年であるが、本書のやうに四年と傳へるものに、右の『平家』の他、『保曆間記』(卷下)・『尊卑分脈』・『義經記』等がある。月日と享年は諸書更に異同が多い。金色堂に藏めた秀衡の死屍が寛永・元祿の頃まで木乃伊になつて存置せられたといふ記事が『南留別志談』『平泉雜記』『仙臺金石志』『甲子夜話』等に載せて傳へられてゐる。(『大日本史料』第四編之二、後鳥羽天皇、九〇—九四頁參照)

義經の奥州落

義顯の義經主從が叡山の惡僧俊章等に導かれて奥秀衡に奔つた事は、正史の所見としては『吾妻鏡』(卷八)の「文

義經追討の嚴命

治四年十月十七日巳卯」及び同書(卷七)の「文治三年二月十日壬午」の條等を擧げねばならない。又秀衡存生中も歿後も、屢、宣旨・院宣を頼朝が申下して義顯庇護を責め誅戮を命じた事は『吾妻鏡』(卷七、文治三年九月四日・卷八、同四年二月廿九日、四月九日、八月九日、十月廿五日、十二月十一日・卷九、二月廿六日、三月廿日、廿二日、四月廿二日、閏四月廿一日等)や『玉葉』(卷五一、文治三年九月廿九日・卷五四、同四年二月八日、九日、十一日、十三日、十四日、十七日、十八日、廿一日、廿六日・卷五五、九月十四日・卷五六、閏四月八日等)に散見してゐる。(奥州落の途すがら及び彼地での義經等の傳說的動靜は『義經記』や謠・舞曲の委に語る所である。)

鶴岡等の祈禱と若宮別當の夢想

二　梶原の呪咀

梶原が判官調伏を若宮別當に依囑するといふのは作者の創造であらうが、或は

「四日(文治三年四月)乙亥。豫州在所未レ聞。於レ今者非二人力之所一覃。須レ被レ祈二神祇佛陀一之由、人々依レ計申之一、於二鶴岡以下神社佛寺一、日來被レ修二御祈禱一。而若宮別當法眼被レ蒙二夢想一曰、於二上野國金剛寺一可レ達二豫州一云々。仍申二子細一之間、彼寺住侶等各可レ抽二御祈禱丹誠一之旨、可二相觸一之趣、被レ仰二藤九郎盛長一云々。」(『吾妻鏡』卷七)

景時宿願の鶴岡大法會

乃至は

「六日(文治四年三月)壬寅。梶原平三景時、依二年來宿願一、日來令二持戒淨侶書二寫大般若經一部一訖。是奉二爲二關東御定運一也。仍欲レ奉二納鶴岳一之間、於二彼宮一可レ逢二供養一。稱二御旨一可レ唱二請導師並舞童等一之由言上之間、爲レ果二公私祈禱一、於二若宮寶前一可レ供二養大般若經一。導師垂髮等、可レ從二景時招請一之旨、賜二御書一(於)景時一云々」

「十五日辛亥。於二鶴岡宮道場一(逢)行二大法會一。景時宿願大般若經供養也。二品爲二御結緣一御出。供奉人々刷二威儀一(下略)」

(『吾妻鏡』卷八)

頼朝の泰衡調伏

等に胚胎してゐるかも知れない。怨敵の呪咀調伏を驗者に修させることは當代常例の習俗で、隨つて此の景時父子の企畫も全然あり得ない空想では無い。右幕下すら東寺に命じて泰衡調伏の法を修せしめてゐる。

「長者檀僧正俊證法(義)、八月依二頼朝之命一、陸奥國御館國衡父太郎泰衡母太郎爲レ被レ討レ之、被レ行二調伏法一」(『東寺長者補任』巻二)

これは文治五年頼朝奥州追討中の事である。

吾妻鏡の記載

三　忠衡の義死　後半の構想卽ち此の曲の主題をなす泉三郎が孤忠に關しての史實的根據は、同じく『吾妻鏡』(巻九)に僅に

「廿六日(文治五年六月)甲寅。奥州有二兵革一。泰衡誅二弟泉三郎忠衡一(三廿年)。是同二意豫州一之間、依レ有二宣下旨一也云々」

と見えてゐるだけである。而も右の記事によれば、義經が衣川の館(高館)で泰衡に襲撃せられて自刄した(文治五年閏四月三十日己未)後の事である。

義經記の記載

『義經記』(巻八「秀衡が子供判官殿に謀叛の事」)では、此の曲と同じく義經滅亡の前であるが、泉と判官と一つになつて泰衡を討たうと計畫してゐる由の密告に接し、

「泰衡聞いて安からぬ事に思ひ、さらば用意すべしとて、二月廿一日(文治五年)、入道の佛事孝養を營まんと用意しけるが、佛事をばさしおき、一腹の舍弟泉の冠者を夜討にしけるこそうたてけれ。」

とあつて、かなり異なつた事情に語られてをり、これを見て他の兄弟等各、人の身の上ならずと警戒して心々になつたとしてある。

忠衡の首桶

金色堂に清衡・基衡・秀衡三代の死屍と共に、忠衡の首桶が長く藏められてゐた事が『奥羽觀迹聞老志』『南留別志談』『仙臺金石志』等に傳へられてゐる。(『大日本史料』第四編之二、後鳥羽天皇、九〇—九四頁參照)

三郎の實名

三郎の實名は、前掲『吾妻鏡』の記事でも本書の通り「忠衡」であるが、『義經記』(巻八)では「二男泉の三郎忠致」となつてゐる。(なほ次項參照)『吾妻鏡』には其の館の位置を記した條にも「二男忠衡家者、在二于泉屋之東一」(巻九、

二人忠衡

文治五年九月十七日甲戌)とある。同書(同巻、同年同月十五日壬申、及び十八日乙亥)に又、頼朝へ降人に出た者の中に「河北冠者忠衡」の名が見出されるが、これは樋爪太郎俊衡入道の三子(太田冠者師衡・次郎兼衡・河北冠者忠衡)の一人で、同族の同名者である。

四　忠衡と其の兄弟　秀衡の他の子息について、嫡男は『吾妻鏡』では「秀衡法師嫡男西城戸太郎國衡」(巻九、文治五年九月八日乙丑)「異母兄西木戸太郎國衡」(同巻、同年八月七日甲午)「西木戸有二嫡子國衡家一」(同巻、同九月十七日甲戌)と見え、次を

泰衡

「陸奥押領使藤原朝臣泰衡(年卅五)鎭守府將軍兼陸奥守秀衡次男、母前民部少輔藤原基成女、文治三年十月繼二於父遺跡一爲二出羽陸奥押領使一、管二領六郡一」(同巻、同九月三日庚申)

高衡

次を忠衡(前掲)、次を「秀衡四男本吉冠者高衡」(同巻、同九月十八日乙亥)「同四男隆衡」(同巻、同、同十七日甲戌)として

ひづめ五郎

ゐる。ひづめは「樋爪太郎俊衡入道、并五郎季衡」(同巻、同、同十五日壬申)「比爪五郎季衡(俊衡法師舍弟)男新田冠者經衡」(同巻、同十八日乙亥)と見える五郎季衡に當るのであらうが、秀衡の子でないことは『尊卑分脈』も同樣である(六六七頁參照)

頼衡

『義經記』(巻八「秀衡が子供判官殿に謀叛の事」)では、「嫡子錦戸の太郎頼衡」とあり、同條に、之を立てずに「當腹の二男」を嫡子に立てたとして、頼衡の他に「嫡子・二男泰衡」それに前掲の「泉の三郎忠致」を數へ、是等三人は秀衡が民部少輔基成の女に生ませたと記してゐる。然るに前の巻々には「嫡子元吉の冠者(中略)泰衡」(巻七「判官平泉へ御著の事」)「嫡子元吉冠者泰衡・二男泉冠者基衡」(巻二「義經秀衡に御對面の事」)「嫡子泰衡(中略)二男基衡」(同巻、同)「元吉の冠者泰衡・泉の冠者」(巻三「頼朝謀叛により義經奥州より出で給ふ事」)とあるに見れば、忠致と基衡と別

忠致と基衡

人のやうでもあるし、同人のやうでもある。では前半の部分では「泉冠者」と記され、後半には「泉三郎」と見えてゐるのかといへば、必ずしもさうでない。同じ八の巻の中ですら、前に示したやうに家系を語つては「泉の三郎忠致」といひ、又「いかに泉の三郎」(嗣信兄弟御弔の事)と佐藤の尼公が言ふところもあるかと思へば、これも前に引いたやうに泰衡が夜討にしたのは「泉の冠者」である。

頼衡から數へれば、基衡は三郎としても差支はないが、忠致の名と一致せず、然らば討たれた泉は「冠者」基衡とすると、「一腹の舎弟」といふので、基成の孫忠致らしくもなる。忠致と一腹として泰衡を二男と記した前出の文には、「嫡子」とだけで其の名を擧げてゐないが、これは頼衡を指してはゐないことが、後に來てゐる文で明らかである。若し嫡子が「元吉冠者泰衡」である事を讀者熟知の事實として省いたとすれば、「二男泰衡」は基衡の誤といふことになるが、さうとすると「泉冠者」と「泉三郎」と二人あることになる。そしてそれが同腹であることになる。若し亦「嫡子、二男泰衡」の一句を、嫡子の名が記してない事と、直ぐ其の後に「當腹の二男を嫡子にたてける」とあるのとから、牽强的に「當腹の二男である嫡子」と解しても、下の「是等三人」といふ語と矛盾して來る。何れにしても曖昧である。必竟『義經記』の素材としての系統を異にした諸傳說の混錯から來た結果であらう。作者の書き誤りとのみ觀るべきではあるまい。(「三郎」の場合には「基衡」とせず、又「冠者」の場合には「忠致」としてない。各、一箇處だけづつで、他の場合は名告が記してないから推論の資料としては不十分であるけれども、注意だけは拂ふ必要があらう。『尊卑分脈』にも兄弟中に「泉冠者」と「和泉七(三)郎」とがゐる事は次に說く通りである)。

なほ他の兄弟は、泉冠者夜討の次に「兄の錦戸・ひづめの五郎・弟のともとしの冠者」(巻八「秀衡が子供判官殿に

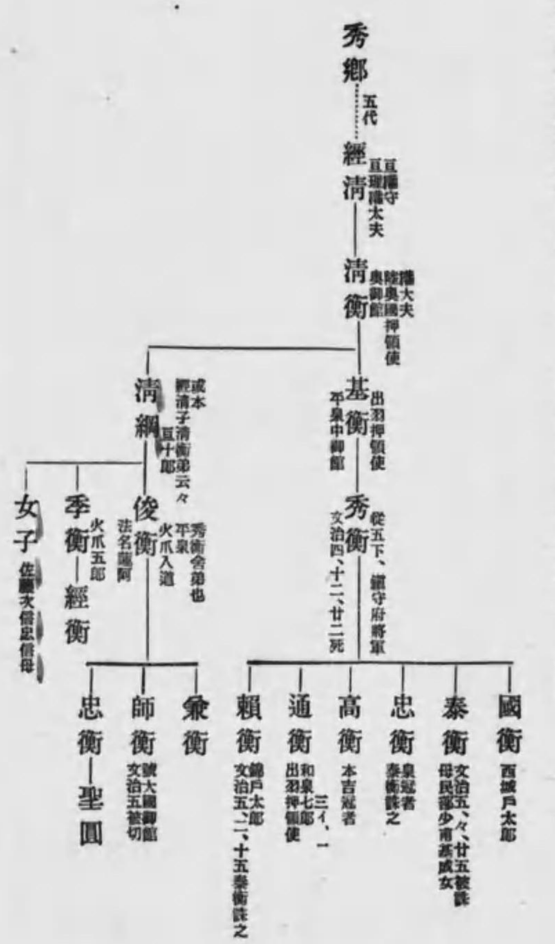
謀叛の事」)と見えてゐる。

『大日本地名辭書』(陸中國、磐井郡、平泉館址の條)には

「五男あり。嫡男四木戸太郎國衡、二男泉冠者泰衡(一說に伊達二郎といへり)、三男泉三郎忠衡、四男本吉冠者隆衡、五男出羽冠者通衡(一說仙北五郎利衡といへり。按五男の事東鑑に見えず)」(四二六二—四二六三頁)

と出てゐる。何に據つたかは明らかでないが、泉冠者と泉三郎とを併せ認めようとしてゐる。

扨『尊卑分脈』(巻五、藤原、秀郷流、○奥州亘)について覽れば、(抄出)



右の系圖に覽て注意すべき事項を擧げると、

一　基衡といふのは秀衡の父の他には見えない。勿論息男中には無い。

一　長子は國衡で、これが西城戸太郎であるが、末弟が賴衡（『義經記』で異腹の嫡子としてゐる人物）で、これが亦錦戸太郎である。若し實在してゐたとすれば、兩者の混同は此の同音の通稱から來る。そして名告は明記してないが、舞曲『和泉が城』及び謠曲『錦戸』では、此の「にしき戸太郎」が卽ち判官乃至和泉擊殺の主唱者である。

一　此の賴衡も亦泰衡に誅せられてゐる事で（これは義經滅亡以前）、『吾妻鏡』にも載せず、『義經記』にも傳へてゐないところである。寧ろ事件としては傳說の忠衡の場合に當る。

一　忠衡の通稱を泉冠者と記してゐる。

一　高衡の弟に和泉七（イ本並に一本には、三郎通衡の名が見える。泉と別字である點は、西城戸・錦戸の場合に似てゐる。『吾妻鏡』にも『義經記』にも載せない人物。

一　泉三郎忠致といふ者は見えない。

一　火爪五郎季衡は俊衡の弟で、秀衡の子でないことは前に記した『吾妻鏡』の通りである。若し傍書のやうに俊衡が秀衡の舍弟ならば、季衡まで秀衡の弟となるか、或は俊衡のみが秀衡の弟で淸綱の養子といふことになる。

一　秀衡の息は總てで六男になつてゐる。

等である。（『義經記』の記述を一々對比したのは、正確な史料として參考しようとしたのでないのは言ふまでもない。史實と傳說・文學との關係を窺ふ上に、又その記載が全然據所の無いのではない事を明らかにする爲に、又特に本書との關係を考へるに必要と思ふからである）

奥州御館系圖

『續群書類從』（卷一五八）に收めてある「奥州御館系圖」は、かなり杜撰なもので信じ難いから採らない。（それには秀衡の弟に亦忠衡（實平泉入道）があつたり、子にもやはり忠衡（實泉太郎）があるたり、それから國衡・親衡・泰衡・忠衡・高衡と五人兄弟である中に、實朝將軍の時隱謀を企てた源氏の出である怪力の勇士親衡を――恐らく泉小二郎の通稱の類想から――紛れ込ませてゐたりしてゐる。繼信兄弟も秀衡と從兄弟にしてある）。

五　忠衡の妻　忠衡の妻が繼信・忠信の姉である事實は正史には所見が無い。（『日本名女物語』卷三には「佐藤庄司が女、忠信が妹なり」とある。『大日本人名辭書』（泉忠衡及び泉忠衡妻の條）に引いてある『名女傳』『大東婦女貞烈傳』等亦同樣に妹としてある）。「佐藤系圖」（『續類從』卷一五八）には女系が示してないから參考せられ得ない。併し佐藤の尼公は『尊卑分脈』に據れば火爪俊衡・季衡と兄妹關係であるから、忠衡との緣邊も無いとは限らぬ。

佐藤の尼公

此の尼公は、『平治物語』（卷三「牛若奥州下りの事」）には、上野國大澤太郎が壞き、秀衡の妻とならうと奥へ下つたのを、途に秀衡の郎等信夫小太夫に奪はれて其の妻となり、繼信・忠信を生むとし、又謠曲『攝待』には

「この姥はもと播磨の者、十三の年繼母を怨み都に上り、故庄司殿と契り、繼信・忠信を儲け」

と自身の口から言はせ、舞曲『やしま』でも自ら名告るが、それは

「いで〳〵みづからが先祖を語つて聞かせ申さん。是は兩國の秀衡が妹、出羽の庄司が後家、次信・忠信兄弟が、我は母にて候ぞや」

といふ系圖である。前二者は甚だしく懸離れるが、最後の說では愈・忠衡と血緣が近くなり、又若し俊衡を秀衡の舍弟とし、季衡兄妹をも同樣と見做すことになれば、此の說と一致することにもなる。或は季衡と秀衡と相似た字面から誤り生

じた傳説と見るのも可能であり、或は有名な兩勇士の母を、義經の大後援者たる當面の傑物におのづから結びつけて來た民衆の傳説心理とも解することが出來る。「奥州御館系圖」のやうに、兄弟の父を假作(?)して、秀衡の叔父にしてしまつたものさへある。(後段參照)

信夫庄司

『義經記』や舞曲に「尼公」といふのも、秀衡の妹なら一層當然であるが、其の所生が忠衡の配偶とすれば、前に引いた『義經記』の尼公が「いかに泉の三郎云々」と命じて佐藤家重代の太刀を進上させるのも不相應ではなくなる。兎に角少くとも傳説的には、忠信兄弟の姉か妹かが忠衡に嫁してゐる事實が認められてゐるやうである。

但し、尼公の夫卽ち繼信等の父信夫佐藤庄司(又、湯庄司とも號す)元治(又、元春、基治)は、輕朝の泰衡征伐の時に防戰した奥方の勇將の一人である(『吾妻鏡』卷九、文治五年八月八日乙未・十月二日戊子)のを事實とすれば、『平治物語』(卷三「牛若奥州下りの事」)の記載、『義經記』(卷八「嗣信兄弟御弔の事」)・謠曲『攝待』及び『鶴若』・舞曲『八島』の構想、『北越略風土記』の所傳(母が二子を喜うて尼となつたといふ傳説)など皆怪しいものになり、其の舞曲『八島』の內容と交涉のある、例の『東遊記』(卷一)や『和漢三才圖會』(卷六五、陸奥國)に見える所謂甲冑堂の由來譚も、『廣益俗説辨』(正編卷一四、繕女「佐藤庄司が後家義經にあへる説」)の記す通りなら、所謂俗説たるを免れることは出來まい。

因に「佐藤系圖」では、父は「元治佐藤太信夫庄司」となつてゐるが、「奥州御館系圖」では(抄出)

清衡―基衡―秀衡
　　―忠綱―繼信 佐藤三郎兵衛
　　　　―忠信 四郎兵衛

と、兄弟の名告の頭字を併せた父が出現して基衡の弟になり濟ましてゐる。

泉が城の所在に

六 泉(和泉)が城 忠衡の居城をいふこと勿論である。其の所在については、『奥羽觀迹聞老志』(卷一〇、磐井郡)

「遺址在二中尊寺西一、阻二衣川一。是乃往時貞任族兄成道所レ據之古壘、曰二之琵琶柵一。後秀衡第三子泉三郎忠衡居二于此城一。仍曰二之泉城一。

按此城去二高館一以西可二十町一。康平中號二琵琶柵一。文治中忠衡居レ之、同五年夏六月廿二日自殺。先義經自盡已五十日」

と見え。『封內風土記』(卷二〇、下)・『新撰陸奥風土記』(卷八)等も略、同樣で、卽ち陸中國磐井郡中尊寺の西(『封內記』は北)、戸河內村に在つて、往昔安倍貞任が族兄成通(道)の據つた琵琶柵を改めて居城としたものと傳へられてゐるのが一般のやうであるが、『吾妻鏡』(卷九、文治五年九月廿七日甲申)の泰衡伏誅後、頼朝が安倍頼時の衣河遺跡歷覽の記事と、前に引いた同書の忠衡館の所在とを併せ考へると、琵琶柵と泉が城とは別所のやうに推定せられる。此の疑は既に『平泉舊蹟志』にも上せられてあるところであるが、假令始め平泉館の邊に居り、後琵琶柵址に遷つたのではあるまいかと、兩説を調和的に肯定しようとしても(『平泉志』)、『吾妻鏡』の記載を容認する以上は無理であり、且餘り意味をなさない。頼朝が歷覽した安倍氏の廢墟の狀を敍した條に附記してある「成通(貞任後見)琵琶柵」の舊跡といふものは、どうも忠衡が居城にしてゐたらしくは受けとり惡い。

琵琶柵と泉が城

泉屋の忠衡館

一方、『吾妻鏡』が「忠衡家者在二于泉屋之東一」と記してゐる其の泉屋といふものが亦明確でなく、『封內記』にも「今探二問之邑民一、無二知二其遺址所在一者一」と見え、『大日本地名辭書』(磐井郡、平泉館址)にも、

「この泉屋の忠衡第の舊趾詳ならず。按に彼の酒泉の邊を泉屋と云ふか。若然らば、平泉館に屬せるなるべし。一説に琵琶の樋、卽、泉が城なりともいふ」(四二六二頁)

と言つてある。酒泉といふのは、やはり『封內記』に

酒泉

「酒泉遺址、在二平泉館南一、今道路之東也。傳云、古昔酒泉所レ涌、邑人號二之泉酒一」

又『平泉雜記』(卷五「平泉舊蹟、方角・里數」)に「和泉酒寅ノ九分七丁八間」とあるを指すのである。

要するに、泉が城の所在は確說が無い。此の作品の內容のみに就て言へば、其の記述に矛盾無からしめる爲には、「和泉が城」はやはり平泉館乃至判官館と甚だしくは遠くない所として置かねばなるまいが、

奧の細道の記載

「かの忠衡が城と申すは、三方は衣川、吉方に堀をほり、逆茂木を引かせ、用心嚴しかりけれど」(本輯三七五頁)

本曲の構成

といふ敍述では、琵琶櫓址と同一であるか無いかは措いて、

「衣河は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入」

と芭蕉が『奧の細道』に記してゐる土人の所謂泉が城址と傳へるものを指してゐることは確である。

高館と和泉が城

【構想・表現】 おのづから前後の二大齣を成してゐる。前段では、若宮別當の判官調伏と秀衡館の入道臨終とが主な場面で、後段では、錦戸館評定、和泉が城內、同城外、高館殿御所內、同外細殿、和泉が城合戰、忠衡居間、大手夫妻力戰、元の居間最期等の各場面がある。次々と場面は劇的に順序よく移り變つては行くが、全體としての形と作者の態度はやはり敍事的である。唯舞曲の中でも、これなどは、素材も亦其の取扱ひ方も、かなり劇的なものの部類に屬する作品である。

謠曲錦戸

姉妹篇とも言ふべき高館に比して悲痛凄愴さに於て讓るが、彼の互に美しい純情を示し合ふ君臣兄弟に對して、此に誠忠一途の慈父、孝義貞烈の夫妻があり、構成の上からは、彼は少しく冗漫で岐路に入つてゐるに、此は筋が通つてよく纏まつてゐる。秀衡臨終の場面も一寸面白く、忠衡夫妻の各〻の性行が興味を惹く。部分的にも注意すべき表現がある。

同材の謠曲に『錦戸』がある。先づ泰衡の同心を得た錦戸の太郎が、自ら「三男和泉の三郎」が館に赴いて、頃日義經の御覺えめでたからぬ由と、頼朝からの御敎書到來の旨とを述べて謀叛の企を告げ、却つて父の遺言に背く

の不可、忠孝順逆の理の在る所を說かれて、論爭の果てに怒つて立去つた後に、三郎は妻に事の意を得させ、やがて押寄せた錦戸の討手を引受けて、先づ妻の生害を見屆けた上、思ふさまに奮戰して、今は是までなり。さこそは妻も待つらんものを。いで追つ付かん」と持佛堂の床の上に走り上り、腹十文字に搔切るといふ筋である。

忠衡妻と靜御前

『和泉が城』よりは單純で、且和泉の妻の貞烈なことは同樣であるが、舞曲のそれの大勇婦で殆ど寧ろ全曲の女主人公格なのと、其の役廻りに於て比ぶべくもない。本書の彼女の餘程積極的な性格に描かれ、夫忠衡はいつも彼女に激勵されてゐるのが、堀河夜討の靜御前を歎稱すると同じ心持から此の舞曲が歡ばれた所以であらうが、相並んで力闘して寄手を追散した兩人が衆人環視の中を

「婦夫(夫婦)手に手を取組んで、味方の陣のしづ〳〵と引」(本輯三八〇頁)

く敵前の振舞は、正に天下の珍とするに足るものであらう。

忠衡の最期

最期の狀は『太平記』(卷七)の義光、『義經記』(卷六)の忠信型の剛勇振であるが、「臟を攫んで繰出し」た上、それを「寸々に切つて捨て」(本輯三八〇頁)るのは、女房の檢分を仰ぐ爲とは言ひながら、少しく汚い手料理に過ぎる。而もなほ弱らず「如何にや如何に」と愛妻に呼びかけて同意を求める洒落氣は、餘裕綽々、流石「名を得たる弓取」と纏信の姉も滿足せぬわけにはいかない。矢倉の上の名告の段の表現と『まんじゆの前』の鬼一丸の最期の描寫と關係あることは前に述べて置いた。(五五六頁參照)

まんじゆの前と本書

舞曲景淸と本書

二子を刺殺す段は

「如何に聞くか若共よ。怨めしき母に添はんより、閻魔の廳に參り父を待てよと語りつゝ、兄いやいしを引寄せて、弓手の肱のかゝりを二刀害して押伏する。弟が之を見て、あ怖ろしの父御前や。我をば宥させ給へとて、居たる所をづんと立ち、

さらば餘所へも行かずして、殺すべき女に縋りつく。景清は御覽じて……心元を一刀、あつとばかりを最期にて、兄弟の若共を三刀に害しつゝ、同じ枕に押伏せて、刀を彼處へからりと捨て……我身を抱いて立たれたり」

とある舞曲『景清』の表現と、互に何れかから他が來てゐる事も直に知られる。「さらば餘所へも行かずして」など態、ことわつてあるところからなぞ言へば、本書の方を粉本と見るが自然さうやうに思はれる。

舞曲信田と本書

又、冒頭の調伏の一節は、文學としては、他の近古の類作『太平記』(卷一「中宮御產祈之事附俊基鶯籠居事」)の中宮御產の祈に託けた關東調伏や、『曾我物語』(卷一「伊東を調伏する事」)の伊東調伏、謠曲『調伏曾我』(「名祐經」)などと同型であるが、それよりも詞章までも殆ど其の儘といつてよい位なのは、やはり舞曲『信田』の信田調伏の件である。これも必らず一方が他の粉本であること疑を容れない。況はれた信田が逞強くて、御臺の上に凶事が起るのも同巧である。忠臣浮島太夫夫婦親子が敵を引受けて悉に死滅するのも、勇ましい妻が夫と子とを激勵し、且自ら討つて出て力戰し、終に夫と刺違へて果てるのも、相似た構想である。此の曲と『和泉が城』とは確に親近な關係があることは否まれまいと思ふ。

忠衡妻と浮島が妻

構想が優れてゐるのではない、表現が巧なのではない。併し、「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、「兵共が夢の跡」に、「笠うち敷きて時のうつるまで」翁に泪を落させたのは、史實だけでなく、本書の內容の口碑、否恐らくは謠曲や本書其の物すらの力では無かつたらうか。

【題　號】『いづみが城』の名義は明白である。本文には

「照井・金澤・島の海に、三千餘騎を相そへ、和泉が城にぞ寄にけり」(本輯三七五頁)

と見えてゐる。正しくは「泉が城」であらうが、本輯所收の原本に右の如くあるばかりでなく、元祿十年に其角の

寫した『奧の細道』にも「和泉」の字を宛ててあるから、『和泉が城』と普通には書かれてゐたかと思はれる。勿論「泉」「和泉」混用せられてもゐたのであらう。

筑後大江の大頭では『勝負分』とも呼ぶ由である。(〔原本並所在〕の項參照)

【年　代】 不明であるが室町時代の作であらう。少くとも寬永十三年以前のものには相違ないと言へようかと思ふ。(〔系統・影響〕の項參照)他の舞曲との先後が確定すれば一層年代の推定も稍はつきりして來るのであらうが。

勝負分

【文體・用語】 他の舞曲と全く同じ幸若獨特の文體である。軍記物特に『義經記』『曾我物語』の類から古淨瑠璃式表現樣式に移つて行く其の中間に位するやうな敍事的文體である。(『日本記』『九穴の貝』も同樣であるが)。原本が大頭家元の台本である爲、語り崩されたり訛つたりしたまゝの箇處が甚だ多い。例へば「思ふるども」(本輯三六七頁)「思ふひつき」(同頁)「しとゐに」(三六八頁)「しゆるし」(三六九頁)の類がそれである。宛字もかなり多い。今一々に記さぬが、却つて面白い參考資料になると思ふ。特に注意すべきものや、明らかな誤字等は頭註又は傍書を附して置いた。

【原本並所在】 寬文の西村版『增補書籍目錄』(「舞並草紙」部、二五丁ノウ)等に「二　いつみか城」と出てゐる。

『新編日本小說年表』(一七頁、古代篇、室町時代)には『廣益書籍目錄』から引いて「○いづみが城二卷」として出してある。

併し、享和元年に成り、翌二年六月上梓せられた『群書一覽』に載せないのを見ても、(正德五年版『增益書籍目

錄』中にも見えない。)其の頃既に草子としても行はれなくなつてゐたらしく考へられるが、從來傳本の有無さへ明らかでなく、國書刊行會本にも露伴博士の例言中に

「一、今刊するところの舞曲計四拾一番、一のいづみが城を除きては、新古書目に散見するところのものを網羅して剩さず」

と記されてある通りで、平出氏の『近古小說解題』中にも其の名は見出されない。

幸にこれが筑後大頭の家元に演存せられて來たるに、其の本文に接することが出來たのは斯界の喜である。そして高野博士の好意によつて本輯に收めることを得た事を感謝せねばならない。

班山文庫本

班山文庫の原本は、全部節博士が附してある。本輯にはフシのみを存して置いた。はし書(一枚)を併せて廿九枚、半紙竪本(縱八寸五分三厘)で內題は無い。(表題は「泉が城　半若舞曲」と記されてある。)本文第一枚に「高野藏書」の朱印が押してある。はし書に

「舞三十六番の一なる泉が城は傳本稀にして寛永板とおぼしき中にもいまだ見出でず內閣文庫の古寫の中にも存せず自然國書刊行會の舞曲の部にも缺きたり　しかるに筑後の大江には古來之を諳ひ傳へたれば乞うて壹本を謄寫せしめて笥に收む大江にては之を「は腦負分」と呼べり

大正十四年十一月　高野辰之識　班山

とあり、又本文の終、廿八枚目の裏に朱書の左の奥書がある。

「大正十四年十一月筑後國山門郡瀨高町大江幸若舞の古老第一位　松尾眞多平氏自身謄寫の上墨譜を附して惠贈

班山文庫主人識」

以て其の由來を知る事が出來る。

錦戸

【系統・影響】　謠曲『錦戸』が本書と同材を取扱つてゐることは前に述べたが、何れが先に成つたかは明らかでない。『相模川』も同樣であるが、これは恐らく本書の方が早いと觀て矛盾は無ささうである。

相模川

古淨瑠璃いづみが城

凱陣八島

古淨瑠璃に『いづみがしやう』(寛永十三年刊)があり、又影響文學で特に注意すべきものとして『凱陣八島』第五段を擧げねばならない。宇治加賀掾の正本で近松作といはれてゐる同戲曲は、各段の素材なり構想なりが大略それぞれ先進文學に依據してゐるのが直に氣付かれるが、卽ち其の第二段の「よしつね道行」は謠曲『安宅』から、第三段は謠曲『攝待』から、第四段は狂言『花子』から、殆ど其の儘趣向詞章まで借り用ゐられてゐるのに觀ても、第五段と『和泉が城』とを併讀して其の關係を類推し得る。(直接でないなら、少くとも古淨瑠璃を通してであることは疑も無いが、他の段が謠曲・狂言に直接範を仰いでゐる點からしても、寧ろ直接舞の本から出たと觀て大過無からう。其の古淨瑠璃も亦殆ど舞曲と同じでもあつたであらう。)第四段の花子に相當する秀衡の女(千種)が「乙の姬」とあるのも、此の舞曲から得た材料であらう。

日本名女物語

創作ではないが、『日本名女物語』(一名『繪本名女物語』又『日本名女噺』。寛文元年版の『本朝女鑑』とも同じ物。但し同書には別に女禮式二卷が附加せられてゐる)の卷三「和泉三郎が妻の事」の條に載せてある所は、大體に於て舞曲の語ると同樣である。『名女傳』『大東婦女貞烈傳』等亦同じである。卽ち此の舞曲の內容は終に實傳として取扱はれるに至つたのである。

奥の細道

前にも言及した『奥の細道』の一節で、『風俗文選』(卷七、文類)には「弔:古戰場:文」として收めてある「三代の榮耀云々」の文と「夏草や」の句とは餘りに有名である。泉が城のみでなく、又忠衡夫妻の昔のみを偲んだのではないが。

擬判官物の和泉三郎

又直系ではなく、且性質の稍異なつた作としては『義經新高館』(紀海音作、享保四年正月豐竹座)・『義經新合狀』(『南

雙鐵後藤目貫』の改作、延享元年三月江戸肥前座。後『泉三郎伊達目貫』とも改題）並びに其の改作『義經腰越狀』（寶暦四年七月豐竹座）がある。例の義經物に假りた大阪陣を仕組んだ操淨瑠璃で、『腰越狀』の「泉三郎館の段」などは、今も語られもし、歌舞伎に移されては所謂「三番叟の段」「鐵砲の段」の場面として演存せられてもゐるのは、周知の事である。そして其の和泉三郎は『新高館』では眞田幸村、『腰越狀』では片桐且元を之に擬してあると觀られ得る。これらの作は『和泉が城』の影響を受けてゐるとしても無論直接ではあるまい。そして又史實や『義經記』などの背景がある事も言ふまでもない。

笛の巻

寫一巻（一本）

梗概

鞍馬寺東光坊に預けられてある牛若君は、學問日に進み、手跡は殊に上達して來られた。母の常磐は、稚兒の翫びは何と言つても管絃に上越すは無い。中にも笛は第一の物とて、都近い淀の津の彌陀次郎が許から一管買取つて鞍馬へ上せられた。母の心づくし嬉しく、二月半から吹き初めて十月の末にはもう百二十調子の樂を吹き覺えてしまつた牛若は、今日しも態〻かの彌陀次郎を召寄せられた。所持の寶は威德を聞いてこそ寶なれ。笛の威德を聞かうとてである。次郎は庭上に長つて、長々と相傳の笛の由來を語り出した。それは斯うである。

其の昔、桓武天皇の御代、弘法大師三十七歳にて入唐の砌、天竺靈鷲山にまします大聖文殊を拜まうとて、遙々と道を別け、唐・天竺二の堺なる流沙川に著き、虹を欺く石橋を渡つて葱嶺の頂に登り、其處で童子に化した文殊菩薩に遇ひ、智慧劍・筆劍の末、終に尊い御姿を拜し得ての歸るさ、山麓の瀧の岸に生えてゐた三本の竹を見て、大師は劍を拔いて末の節三ふし込めて伐り、契あらば日本で廻りあへと誓つて川へ流された。

再び大唐へ引返し、歸朝の東風に乘じて筑紫博多に著船せられたのは、嵯峨帝の御宇、大師四十七歳（異本、四十三）の年であつたが、彼の地で乘船の折に虛空へ投げた五鈷・獨鈷・三鈷が、それ〴〵越後の國上（くがみ）・都の東寺・紀州高野に落ち留まつた靈瑞や、名殘を惜む高麗・唐土の神佛が風波を起して大師の船をやらじと引留めた奇談もあつた。

大師は先づ故鄕讃岐國屏風が浦に立寄つて父母の墳に展し、とある磯邊を過ぐるとて、流れ寄つた一本の竹を怪しと取上げると、正しくかの流沙川に流した竹であつた。希代と感じて三節の竹を三にきざみ、笈の脚に結ひつけて都に上られたが、其の三つが夜々五音の聲をおのづから發するも奇しくて、三管の笛に彫られたのであつた。大水龍・小水龍・青葉の笛と世に名も高い寶はこれである。青葉の笛とは、竹は潮に枯れたが節に一枚附いた青葉の枯れぬ德に號けられた。小水龍は朱雀門の鬼が奪つて夜々吹くを、天人が亦取らうと羽衣を以て撫でては天に上り〳〵したので、ひとへが

くしとも呼ばれた物である。此の三管を天下の重寶と内裏に藏められてあつたのを、狹衣の中將吉野山の花見に一管を申受けて吹いた萬秋樂の祕曲に、天人も五衰の苦を免れて菩薩となつて舞ひ遊んだといふ程の名譽の笛である。其の後中將淀の津に住み、次郎が祖父彌陀太郎拜領し、（異本には、中將から小式部、ついで祖父彌陀太郎）次郎まで三代傳へ持つてゐたのであるが、おのれは吹く事は無いけれど、唯此の笛を所持するばかりに、佛神の應護あつて災難を除く寶の奇特、如何なる人の申上げたか、御母君の御懇望默止し難くて獻上致した次第であると、笛の由緒はめでたい限りであつた。

概要

いたくも打興じた牛若は、祝に三度押返して語らせ、猶も飽かずや草紙に書き留められた。笛の卷といつて鞍馬の寺に在るとの事である。

彌陀次郎は南鐐五つ（異本、數多）賜はり、雀躍して家路へと歸つて行いた。

【性質】 幸若舞曲三十六番の一。（寛文・貞享・元祿等の書籍目錄、並びに『群書一覽』倶に數へてゐる）。祝儀物。綸起物。高僧傳說に附隨した音樂（樂器）說話を主題とした判官物。

笛の由緒と大師の驗德

もつと具體的に言へば、題名の示す通り、大水龍・小水龍・青葉の笛三管の名笛の由緒物語で、之に關聯して弘法大師の入唐譚と其の驗德の數々が述べられてゐる。

由來と系圖

名器・什寶の由來、相傳の系譜を仰々しく說き立てるのは、古今傳授によつて最も典型的に代表せられてゐると言ふべき、傳統に權威を見出さうとする心理の具象化で、近古思潮の一特質と看られ得るほど、當代に於て最も盛である。（もつと後までも此の傾向は引續いては來たが。）其の極、それがイローニッシュな形になつて現れてゐるのが狂言の『酢蕈』や『膏藥煉』であると言へる。本書と類種の――そして題名まで相似してゐる――有名な書は、何と言つても『劍卷』（『平家物語』又は『太平記』に附す）であらう。（別に同名の三卷本もある。相似た名劍由來談

劍卷

には『曾我物語』（卷八「太刀刀の由來の事」）・舞曲『劍讃歎』があり、『太平記』（卷三二「直冬上洛事附鬼丸鬼切事」）があり、又『保元物語』（卷一「新院爲義を召さるゝ事附鵜丸の事」）もある。）樂器の中で、來歷傳說を最も豐富に賦與せられてゐるのは、琵琶と笛のやうである。一々の什器に關して別々に發生した傳說が後には同種の異物の上に移動し混淆して來てゐる場合も尠くない。牛若祕藏の名笛の來由は就て、舞曲『烏帽子』（異本帽子收の『判官都話』何れも挿話的に亦語つてゐるが、內容は各異同がある。必竟

笛の威德

「牛若心に思召すは、それ人の持つ寶の威德を聞かねば何ならず。此の笛の威德を聞かばやと思召し、淀の津の彌陀次郎をぞ召されける」（本輯三八四頁）

これがこの一卷の生れて來る所以であり、そして亦牛若と共にそれを當代人の迎へ聽かうとする所以である。（異本（內閣本）では只「此笛の出所を尋ばやとおぼしめし」とあるのみであるが、流布本の右の詞句の方が、套句ではあつても一層適切に時代意識を表現してゐる。）

異本と御伽草紙としての本書

此の作は特に珍しいといふ程のものではないが、下段の內閣本はフシ附のある未刊の異本といふ點で他に類本が無いし、又それと對照させた上段の分は、舞曲として以外、純讀み物の御伽草紙としての本書を併せて紹介しようが爲で、其の意味では亦必ずしも坊間は獲易いとは言ひ難いものである。

小說としての舞の本

幸若舞曲は內容題材から言つても、表現樣式の一斑から觀ても、一種の敍事詩的小說としても看られ得る性質を有し、讀み物としても行はれ得べき可能性を內在させてゐる。其の創始時代に於ける台本其の物が亦讀み物の草子から其の儘借りられたことも多かつたによる關係もあらうし、テキストとしては必ずしも特殊の諧ひ物の形態を具へる事が要求せられてゐない程、軍記物乃至御伽草紙類に親近したものである。古い書籍目錄などでも、

謡曲は「謡書」部として別に目を立ててあるのに、これは「舞並草紙」部として御伽・假名草紙と同列に取扱つてゐる位で、そしてそれは亦自然でもあり當然であると言へる。

假に『廣益書籍目錄』の同部を例にとれば、三十六番を舞の本として掲げた次に引續いて「一　つるぎさんだん」「二　切かれ曾我」「二　しづか」「二　夢あはせ」「二　相模川」「二　きごろも」「二　朝がほの露」といふ順に列擧してゐる。番外舞曲と御伽草紙との境界線は全然無い。或は何の斷り書も無いから「劍讃歎」以下も番外舞曲としてではなく、單に一般草子と目してゐるらしい。（寛文西村版には「夢あはせ」の次に「二　からいと」が挿入せられてゐる。普通の二十三部中の御伽草紙『唐糸草紙』である）。正德五年版の『增益書籍目錄』に至つては、いろは別にした各門の「假名」部に、三十六番中の舞曲でも、一般物語草紙類と混じ載せてある。

刊本としての舞の草紙（三十六番揃のも亦個別のも）は、それが其の儘讀み物の小說と見做されても差支無いものであると言ひ得るが、明らかに御伽草紙として例の二十三部中に數へられてゐるものに『濱出草紙』（三十六番中の『濱出』）がある。又『新編御伽草子』（下）には『築島』が收められてゐる。其の他繪卷の『繪信忠信記』（未見。『新群書類從』舞曲部の幸田博士緒言、及び高野博士著『日本戰記史』五九八頁所引）、並びに刊本の『八島にこう物語』（上下）及び『新版繪入やしま合戰』（上下）は舞曲『八島』と同じ物である。

濱出草紙
築島
繪信忠信記
八島にこう物語
やしま合戰

附記　『近古小說解題』（四三三頁）の「八島にこう物語、刊二卷」の解說に

「謡曲「攝待」及び幸若舞草子「八島」と同じ事がらを寫せるもの、「松會開板」とあり、萬治、寛文頃の刊行ならんか」

と見え、舞の本とは別書のやうに聞えるが、私の繙讀した「松會開板」本（上下二卷一本、一葉缺。舊東大圖書館藏。大震災燒失。恐らく平出氏披閲の原本かと想はれる）は文詞全く「八島」と同一であつた。『やしま合戰』は帝國圖書館藏本。卷末に「大阪新町橋東詰、藤屋伊兵衛開板」とあるものである。

奈良繪入本の舞の草紙

又特に御伽草紙と呼ばれてはゐぬが、普通の御伽草紙と全然同じ體裁になつてゐる奈良繪入古寫横本の『築島』（舊東大圖書館藏、大震災燒失）、『大しよくわん』（東大國文學研究室藏）、『夜討曾我』（『日本文學講座』第一二卷口繪所載。原本大震災燒失）、『景清』（『新群書類從』舞曲部緒言所引）や、同じく奈良繪入古寫大形竪本の『烏帽子折草紙』（京大圖書館藏、舞曲『烏帽子折』）を始め、此の種の形になつて行はれたものが尠くない筈である。

劍讃歎と本書

本輯に收めた『ふるのまき』は卽ち此の類の一本である。（（原本並所在）の項、及び六四五頁『日本記』考說（性質及び來由）の項參照）

【素材並構想・表現】　何れが先であるか明證は無いが、同じ舞曲中の、そして類種同型の『劍讃歎』に

「別當の御說には、それ人の拔く筆のいはれを問ひ、ば傳へず、時宗（致）にまゐらする太刀のいはれを語つて聞かせ申さん」

といふ表現まで共通してゐる。此の舞曲は古書籍目錄に三十六番中に數へられてゐないからとて、それより後の新作とのみ斷ずるわけには行くまい。其の三十六番中に『新曲』を數へてゐる一方、草紙類の劈頭に、舞の三十六番と竝べて掲げてある事である。又內閣本の『牛若御のまき物語』の詞書は異なつてゐる。兎に角流布本と『劍讃歎』とは何れかが他に倣つたものであらう。勿論素材としての傳說は、兩曲それ〴〵既に生成しつゝあつた事は疑を容れない。

笛の妙手としての牛若

音樂――特に笛――の小天才として牛若御曹司を傳へるもの、本書の他既に『義經記』（卷一「遮那王殿鞍馬出の事」、卷三「辨慶洛中にて人の太刀を取りし事」「義經辨慶と君臣の契約の事」・卷七「平泉寺御見物の事」等）があり、又舞曲『烏帽子折』があり、『淨瑠璃十二段草子』があり、『御曹司島渡り』『判官都話』『辨慶物語』等略。同代の作中だけでも數々ある。かくて平家の公達無官太夫と名を爭ひ、其の敵の若人の妙音に感動した熊谷次郎をして

敦盛と牛若

「東國に千萬の兵有と言とも、軍場なんど〻笛持者こそ有まじけれ。哀都の人程優にやさしかりける事あらじ」（『八坂本平家物語』巻九）と歎ぜしめた千萬の東夷の爲に纔に氣を吐かうとしてゐる。而も傳說界に於ける牛若の祕技は、荒夷の丹次直實輩に止まらずして、鬼が島の大王以下の半獸怪人をも陶醉させる偉力を有してゐる。うら若い女性の心を捉へるが如きは易々たる事なのであらう。此の點に於て流石「笛の器量たる」「經盛の乙子」も聊か忸怩たるものがあらねばならぬ。

牛若の愛笛

扨其の御曹司祕藏の名管は、本書では大水龍・小水龍・青葉の笛三管の中の一らしいけれども明確には記してない。（小水龍らしくもある。）舞曲『烏帽子折』には

「母の常盤の淀の津の彌陀次郎が許よりも買ひ取らせ給ひたる弘法大師の蟬折なれば」

とあつて、入手の徑路、出處、原所有主まで本書と一致してゐるが、唯笛の名稱だけを異にしてゐる。『判官都話』の挿話も、淀の津から常磐が買ひ上げた博多の船頭めうてんの唐土產、村雲丸と一對の村雨丸と名づける漢竹の横笛で、天曆以來の重寶蟬折に次ぐ「日本二番」の名器といふことになつてゐる。『御曹司島渡り』では「たいとう丸」、『義經記』（巻一）では唯「漢竹の横笛」とあるのみである。蟬折は『源平盛衰記』（巻一五）の詳記するところによれば、高倉宮（以仁王）の御祕藏で、烏羽院の御時唐土の王から獻進した漢竹を彫らしめられたといふ傳へである。

蟬折

村雨丸

たいとう丸

蟬折と高倉宮

大水龍・小水龍

古事談の記載

大水龍・小水龍は『江談抄』（第三、雜事）・『十訓抄』（巻下、第一〇「可ノ庶ニ幾才能ニ事」の（二〇）博雅三位の條）・『拾芥抄』（上末、樂器部第三五、在名物）・『絲竹口傳』（笛之寶物之事）・『東齋隨筆』（音樂類）・『夜鶴庭訓抄』（笛名）等に其の名が見える。『枕草子』（春曙抄巻五なまめかしきもの）には「するろう・こするろう」と言つてある。『古事談』（第六、亭宅諸道）には「水龍」とあつて、海中の龍王に見込まれた奇談を載せてゐる。『絲竹口傳』には「大水龍」に關して之を傳へ少し異なつてゐる。兎に角名義に關する說明傳說と看るべきであらう。（本輯四〇〇頁頭註參照）

「天人のひとへがくし」の名は舞曲『烏帽子折』にも出てゐる。本書では、小水龍の別名とし、且朱雀門の鬼笛の傳說との混淆を見るのであるが、此の鬼笛の傳說は同じ名笛「葉二」の上に傳へられてゐるのが普通で、それには蟬丸傳說に緣由深い博雅の三位が關係してゐる。淨藏聖人の名譽の奇話でもある。そして本書のとは異傳である。（『江談抄』第三、雜事・『十訓抄』巻下、第一〇・『絲竹口傳』『笛之寶物之事』・『東齋隨筆』『音樂類』等參照）

天人のひとへがくし

朱雀門の鬼笛

葉二

附記 『江談抄』には博雅の傳說としては記されてないが、別に同書同巻に同三位が横笛を吹くと鬼瓦が落ちるといふ藝術傳說が載つてゐる。

青葉の笛

青葉の笛の物語

青葉の笛と小枝

青葉の笛の名も『十訓抄』『拾芥抄』等に見えてゐるが、これが右の鬼笛傳說と混融し、且在原業平に附着して來たのが、『續教訓抄』（巻一、下）を經て、同じく近古小說の一である『青葉の笛の物語』（一名『仁明天皇物語』）（『室町時代小說集』所收）となつて現れた。（『室町時代小說集』解題參照）又通俗にはかの敦盛の形見として考へられ、須磨寺の什寶の一となつてゐるが（そしてやはり弘法大師の作といふ傳へであるが）（『蜀山人の「革命紀行」』などにも詳記してある）、『平家物語』（巻九）では、敦盛の愛管は、鳥羽院から祖父忠盛に下賜せられ、父經盛を經て相傳した「小枝」といふ笛としてある。

葉二と青葉と異物のやうにも亦同一物のやうにも、諸書傳へる所區々であるが、其の他にも『江談抄』『十訓抄』『拾芥抄』等なほ數種の名笛を列擧してゐる。舞曲『烏帽子折』にも「それ笛の名には云々」としていろ〳〵に書き列べ（その中に「より竹」といふ語が見える）、草刈笛の傳說をも挿んでゐる。

より竹

狹衣中將と五節舞起源傳說

狹衣中將と天人の傳說及びそれと五節の舞の起源傳說との混融は、鼇頭（本輯四〇一頁）にも註して置いた。狹

衣のそれは、同じ近古の御伽草紙の『狭衣』(京大圖書館本は『さごろもの記』と題する異本)にも語られてゐる。

そして本書にあつては、其の中將から相傳した名笛が單に樂器として以上に、災難除けの神符にまで進展してゐるのも注目に値する。

大師傳

次に大師傳は、眞濟の『空海僧都傳』を始め『贈大僧正空海和上傳記』『大師御行狀集記』『弘法大師御傳』或は『本朝神仙傳』『元亨釋書』『本朝高僧傳』等枚擧に遑無い程多い。是等の中にも傳說的の分子はかなり濃厚なものが多いが、更に誇張された俗傳は一々擧げるに煩に堪へない程である。本書の三管の名笛の由來談は典據ある大師傳の何れにも見えないが、各種の起源傳說を此の高僧の功績に歸してしまはうとするのは、餘りに平凡過ぎる程普通の事になつてゐる。

寄竹の傳說

そして此の大師の傳說に關係有るかも知れないが、それを別としても、寄竹(よたけ)の笛の傳說なり、それを珍重する習俗なりが近古に流布してゐたことは確である。

「末の世と思ふもわびしより竹は きりてぞ笛のれをもたてける

(文永二年七月白河殿七百首　後嵯峨院御製)

より竹の君によりけんことぞ憂き　一よの節にれのみなかれて

(六百番歌合寄笛戀　正三位經家卿)

はるゝ〳〵と涙路わけ來る笛竹を　我が戀妻と思はましかば

(同　中宮權大夫家房卿)

等の詠が『夫木和歌抄』(卷三二、雜一四、雜物上、笛)に見えるのでもわかる。

三鈷の奇瑞

なほ本書に語られてゐる傳說中、三鈷の奇瑞は最も有名で、『本朝神仙傳』『元亨釋書』(卷一八、神仙篇)『大師御

行狀集記』(「拋上三鈷條第三五」及び「拋海上三鈷尋得條第九四」)を始め『今昔物語』(卷一一「弘法大師渡唐傳眞言教一歸來語第九」・「弘法大師始建二高野山一語第二五」)・『沙石集』(卷二「彌勒行者の事」)・『三國傳記』(卷三(第三)「弘法大師事幷高野山金剛峯寺事」)或は『源平盛衰記』(卷四〇「弘法大師入唐事」)等に至るまで、大師の傳記を敍するもの大抵載せぬはなく、高野の奥に今も其の遺跡を留めてゐる。

文殊との筆競

文殊との筆競の傳說は、一層架空的な爲に前者程諸書に亙つてゐず、正傳には記さぬものが多い。けれども猶『今昔物語』(卷一一第九話)・『弘法大師御傳』(卷下、御筆精靈の條)・『元亨釋書』(卷一、傳智篇)・『三國傳記』(卷三(第三))・『弘法大師行狀記』(卷四)等を始め、詳疏異同はあるが語つてゐるものが尠くなく、『三國傳記』のそれが先づ本書に近い。後の物では『和漢三才圖會』(卷七六、紀伊、高野山金剛峯寺)や『釋迦八相倭文庫』(第四二編の序)などにも見えるが、これらの大概は唐土での事として傳へてゐる中に、『倭文庫』が天竺流沙川の川上としてゐるのは、本書などの記述を承けたと思はれる。

附記　三筆の隨一、弘法流の始祖だけに、入木道に關する靈驗傳說が傳へられるのは怪しむに足らない。右の筆競と竝んで五筆和尙の由來傳說もあるが本書には關係無い。

獅子と孔雀

小僧に化した淸涼山の文殊が五臺山の房に名僧海雲比丘を訪れて物語した話は『宇治拾遺物語』(卷一四「海雲比丘弟子童の事」)にも見える。五髻文殊は卽ち童形であり、又兒文殊の姿も信ぜられてゐる。金剛界の文殊は金色の孔雀にも騎るが普通には獅子座に坐すとせられてゐる、優塡王の油斷した隙に獅子が逃げ去つた爲、菩薩の怒に遇うて優塡が之を捕へに行く事を作つた謠曲が『獅子』(番外前百番、卷一)である。淸涼山の文殊の淨土と石橋とは謠曲『石橋』で最も有名である。本書も亦必ずや同曲及び其の素材となつた大江定基の寂昭が文殊を拜んだ傳說(『今昔物

優塡王と獅子
謠曲獅子
謠曲石橋と本書
寂昭の傳說

語』巻一七「律師清範知二文殊化身一語第三八」・巻一九「三河守大江定基出家語第二」・『三國傳記』巻八（第二四）「三河入道寂照事並阿育王石塔寺事」・『東齋隨筆』佛法類等）の影響を受けてゐる事は想像するに難くない。即ち支那に於ての出來事を此の山に引移したについて、之に示唆せられ、或は少くとも之に倣つた事は疑ふべくも無い。謠曲に於ける石橋の形狀の描寫を、本書の詞句に對比しても肯ふことが出來るであらう。

智證傳と本書

歸朝の雜船と智證大師傳說

嘗に寂昭のみではない。『今昔物語』（巻一一「智證大師亙ノ唐傳ニ顯密法ノ歸來語第一二」）の文に借れば、空海の外甥であつた圓珍和尙も亦

「我レ宋（唐の誤か）ニ渡テ天台山ニ登テ聖跡ヲ禮拜シ五臺山ニ詣テ文殊ニ値遇トセム思テ」

渡唐し、天台山を訪ねて天台大師の古跡を探り、靑龍寺・興善寺に顯密二敎を修めて歸つたのである。本書の素材或は構想と此の智證大師の傳記との間にも恐らく交涉が有ると推測せられ得るやうである。

更に、歸朝の海上の風波とそれに關聯しての金剛峯寺創建の立願の事は、餘り諸書に見えないところである。『弘法大師行狀記』（巻五）（國民文庫『高僧傳集』所收）には之を語つてゐるが、何に基づいたのかわからない。これに類似した傳說を却つて亦前の智證大師に於て見出すのである。即ち入唐の途に惡風に遭ひ船が覆らうとした時、日頃信仰する不動尊を念じた利益顯れ、金色の身相赫に現じて難を救ひ、順風俄に船を送つた奇談がそれである。（『今昔』巻一一、第一二話・『明匠略傳』日本部、「智證大師傳」・『元亨釋書』巻三、慧解篇・『太平記』巻一五「圓城寺戒壇事」等）『太平記』では、軸の不動明王と力を協せて艫に新羅大明神が舵を取られるのであるが、別傳では、此の明神が圓珍歸朝の船に老翁と現じて託宣し、圓城寺に鎭まつた靈驗說話を遺してゐる。（『古今著聞集』巻二、釋敎第二「智證大師御起文」・『元亨釋書』巻一八、神仙篇等）これらによつても、本書の弘法傳說は、其の素材たる說話に於てか、或は本書

構創の際に於てか、又兩者俱にか、同じ高僧傳說としての智證傳との混淆を結果して來てゐると想測せられる。

要するに本書は、形に於ては淀の津の彌陀次郎が牛若に語る名笛の由來談で、而も其の內容は所謂大師の驗德物語である。隨つて例によつて法談的色彩を多分に帶びてゐる。旅行の地理的知識の「御曹司島渡り」程度なのも仕方は無いが、天竺にまで押渡つて、論と法、智慧と筆とを競べ爭つて負をとらぬ意氣と實力とは、正に日東男兒の本領、謠曲『白樂天』や『善界』や『島渡り』の御曹司や桃太郎童話と共に、時代と國民性とを明快に反映してゐる。

日本精神の顯現

「國は大小にはよるべからず。たゞ智慧こそ本（ほん）にてあるべけれ」（本輯三九〇頁）

智慧競の童話の形態をとつてはゐるが、其處には原傳說に鼓（インスパイア）吹する或何物かが十分に感ぜられる。そして全曲の歸する處は卽ち

「牛若君聞召し、面白し彌陀次郎。親に三度語れとて、押返し語らせ、猶も飽かずや云々」（四〇一頁）

といふに、やはり自らの說明を提示させてゐるといふべきであらう。

英雄譚の義經と高僧譚の弘法

そして又此の祝ひの曲に於て、我が國民的武勇傳說中の大立物たる判官義經の牛若君は、全然優雅可憐の理想的寺稚兒としてのみ現れ、其の愛用の彫管の作り主としてに止まらず、魚鱗・虎爪の達筆に於いて見ぬ世の師としても亦高野大師を仰がしめられてゐる。此の英雄譚と高僧譚と、我が國民傳說中の二大範疇の中での主要人物を、此の曲に於て明確に結び附けてゐる彌陀次郎なる村夫子に就ては、今何等語るべき資料を有せぬ。纔に、津の國「御影の里に隱れない白毫の彌陀六」の名を聯想する位のものである。かの彌平兵衞の石屋の前身が此の彌陀太郎の孫であるか如何かはわからぬ。靑葉の笛の音に惹かれ寄る緣の絲がかすけく繫つてゐるだけである。

彌陀次郎と彌陀六

【題號】 題名の意義は明らかである。劍の由來を記した一卷が『劍卷』と號けられてゐると同じである。

「牛若君聞召し、面白し弭陀次郎。祝ひに三度語れとて、押返し語らせ、猶も飽かぬや思しけん、草子にとゞめ給ひて、笛の巻と申して、鞍馬の寺に在りとぞ。」（本輯四〇一―四〇二頁）

牛若自筆の笛の巻

とある本文の敍述では、別に牛若自筆の「笛の巻」が在るやうに聞え、其の題名を其の儘借用してゐる形であるが、それと此の書との關係は頗る曖昧である。原本を示せと問ひ詰めたら、或は原本はどんな物かと空とぼけて尋ねて見ただけでも、作者はうつかり、これが卽ち原本だと口を滑らしてしまふかも知れない。

牛若笛のまき物語

高野本（内閣本寫）の『牛若笛のまき物語』といふ題號の方が、原草子と別である事を見せるには一層都合が好からう。勿論さうした意識で附せられたのではあるまいが。（〔原本並所在〕の項參照）

南錄

【年　代】 素材・思想・文體・用語、何れの點から言つても、室町時代の作と推定して差支無からう。「南錄五つ（内閣本「數多」）賜はり」とあるのなども、源平時代以後、先づやはり室町期位、少くとも慶長以前の作であることを語つてゐるやうに感ぜられる。二朱銀の南錄は明和九年以後の鑄貨であるから。（『大日本貨幣史』・『貨幣考錄』『温知叢書』第五編所收』・『金銀圖錄』等參照）

【原本並所在】 寛文の西村版『增補書籍目錄』（「舞並草紙」部、一五六丁ノウ）に「一　ふえの卷」、元祿五年版『廣益書籍目錄』（五之卷「舞並草紙」部、二六丁ノオ）に「一　笛の卷」、又『群書一覽』（卷三「草子類」、和書部三、七四枚ノウ）に「笛のまき」と見え、『新編日本小說年表』（一七頁、古代篇、室町時代）には「○笛のまき一卷」と出てゐる。

右はいづれも舞の本三十六番の一として掲げてあるので、別に讀み物の草子として行はれ、或は三十六番揃以外の單行本として刊行せられたことがあるか如何かは知り得られない。正德五年版の『增益書籍目錄』にも載せず、『小說年表』の「近代篇、假名草紙」の部にも、刊本としては出てゐない。近時の刊行としては、國書刊行

會第一期本『新群書類從』（第八、舞曲部）に收められてあるのみである。これも勿論舞の本としてである。

家藏古寫本（本輯底本）

然るに、本輯所收の家藏古寫本（一卷）は明らかに讀み物として全く普通の御伽草紙の體裁になつてゐる。金泥草花模樣紺表紙（見返し銀地）、中央の題簽（赤色紙）に「ふゑのまき」とある奈良繪入十三行横本（縱五寸五分、横七寸八分）で、内題・奥書は無い。内容は流布の舞の本のそれと全く同じである。詞章も小異あるのみであるが、全體に何れかといへばやはり讀み物といつた感じが多分にある。新類從本を補正し得る箇處も稀にある。

新群書類從本（寛永版本）

校合に用ゐた一本は卽ち『新群書類從』所收のもの、「ふえのまき」と題してある。原本は幸田露伴博士の緒言によれば、寛永版（同版の『烏帽子折』卷末に「寛永十二年乙亥二月吉日開板之」）の十行本の由である。鼇頭に〔新〕として出してあるのがそれである。

班山文庫本

今一本の〔高〕として對校してあるのは、高野辰之博士藏の古寫十行本（一卷）である。これは嫁入文庫の草紙類の中の一種で、金泥松に雲形の模樣ある紺表紙、粘葉綴竪本（縱七寸八分、横五寸七分）、中央題簽は「笛の卷　全」、内題・奥書は無い。挿繪も無いが其の原本には挿繪があつたらしく、處々それに相當する部分が空白の頁になつてゐる。

以上は皆流布の『笛の卷』の系統本で、全く同一の物と言つてもよいが、これと對立させて下段に收めたのは稍異なつた物である。これも高野博士藏本で、内閣本の書寫、表紙題簽には「笛の卷　全」とあるけれども、扉に

班山文庫本（内閣本寫）（本輯所收）

「牛若笛のまき物語」全

班山文庫藏本

高野藏書
班山文庫

十二

とあつて、其の裏に

「明治三十七年二月十二日内閣文庫藏本（雅和學講談所舊淺草文庫本）によりて書寫せり　原本八行十五枚本　一字一句を改めずうつしたるものなり

附記　別におなしく講談所、文庫の藏印ある一本十行十　枚本あり　引合せ參考すべきなり」

班山文庫主人しるす

と記されてある。此の本は大體に於ては流布本と同じであるけれども、詞章に異同が稍有り、特に冒頭常盤が東光坊に牛若を預ける一節は流布本には無い。且スシ附が存してゐて明らかに舞曲の台本であつた事を示してゐる。珍らしい物で、無論刊本は無い。

序に、東北帝國大學附屬圖書館に『牛若麿』と題する一本（寫）（舊狩野文庫本）が藏せられてゐるのを十年ばかり前に覽たことがあるが、これは其の表題に「牛若麿（ふえの卷未來記　つるきさんたん）　全」とある通り、普通の舞の本の中の三番を收めてあるだけで、題名の書が別に在るのではない。（三番中の『劍讃歎』は曾我物であるが、義經にも關係してゐる。）

【參　考】『翁草』に『笛之卷』、『能の圖式』に『笛卷』の名が見える。觀世流の番外『笛の卷』（天保十一年再刊の同流謠本所收）がそれかも知れないが、これは舞曲とは別で『橋辨慶』の序曲のやうなものである。但し題名上の交渉は有るのであらう。又『判官都話』の挿話として本書の内容と稍似た物語が述べられてあることは前にも屢、說いた。本書と直接關係が有るか如何かは明言出來ない。多分素材の傳說が別々に異なつた形で語られてゐるのであらう。

——考說終——

18154

牛若麿（東北帝大本）

觀世流笛の卷

昭和三年四月廿七日印刷
昭和三年四月三十日發行

定價金六圓

近古小說新纂初編

著作權所有

編著者　東京市神田區表神保町二番地　島津久基

發行者　東京市神田區表神保町二番地　矢島一三

印刷者　東京市神田區表神保町二番地　上條勇

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

發行所　東京市神田區表神保町二番地　中興館
（電話神田一二三番　振替東京四一三三番）

◇國文學の權威が一堂に集まりました◇

東京帝國大學文學部教授 文學博士 藤村作先生編

日本文學聯講 第一期 上世

上製函入頗美本
定價金二圓
郵稅十七錢

內容と其の執筆者

一、國文學講座の開設に就いて……東京帝國大學文學部教授文學博士 藤村作
二、上代文學概說……東京女子高等師範學校教授文學博士 尾上八郎
三、古事記と日本神話……法政大學文學部長兼教授文學士 小山龍之輔
四、祝祠と神と政治……法政大學文學部長兼教授文學士 小山龍之輔
五、萬葉集と文學生活……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松潛一
六、古今集より新古今集まで……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松潛一
七、源氏物語と宮廷生活……前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津久基
八、枕草子と清少納言……前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津久基
九、日記文學と女性……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松潛一
一〇、大鏡と道長時代……前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津久基
二一、西行と實朝……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松潛一

發行所 東京市神田區表神保町 振替東京四一二三番 中興館

東京帝國大學文學部教授 文學博士 藤村作先生編

日本文學聯講 第二期 中世

上製函入頗美本
定價金三圓二十錢
郵稅金二十六錢

內容と其の執筆者

一、近古文學概說……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松潛一
二、軍記物語の性質……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松潛一
三、平家物語と時代精神……浦和高等學校教授文學士 沼澤龍雄
四、太平記と吉野時代の武士……武藏高等學校教授文學博士 高木武
五、徒然草の思想……女子學習院教授文學士 佐藤幹二
六、義經記と義經傳說の展開 前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津久基
七、仇討文學としての曾我物語……學習院教授文學士 山岸德平
八、能樂の藝術的性質……女子學習院教授文學士 佐成謙太郎
九、世阿彌の藝術觀……女子學習院教授文學士 佐成謙太郎
一〇、狂言と世相……東京高等學校教授 野村八良
二一、連歌と時代……東京帝國大學文學部講師文學士 志田義秀

◇各々其の專門の研究を發表して居ります◇

發行所 東京市神田區表神保町 振替東京四一二三番 中興館

引續いて第三期（近世「上」）の部を刊行致しました◇

東京帝國大學文學部教授 文學博士 藤村作先生編

日本文學聯講 第三期 近世「上」

上製函入頗美本
定價金壹圓八十錢
郵税金十八錢

JOAKのラヂオで放送された『國文學講座』第三期の分であります。つまり近世の上卷とも言ふべきもので、著者は何れも其の專門に研究された權威ある蘊蓄を披瀝されて居ります。ラヂオの時よりも更に增補し、圖を挿みなどして完璧を期しました。

内容及執筆者

一、國學の精神……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松潛一
二、浮世草紙概說……早稻田大學文學部教授 山口剛
三、井原西鶴……早稻田大學文學部教授 山口剛
四、近世生活と文學……東京帝國大學文學部教授文學博士 藤村作
五、淨瑠璃概說……東京高等學校教授・早稻田大學文學部教授 黑木勘藏
六、近松門左衞門……東京高等學校教授・早稻田大學文學部教授 黑木勘藏
七、俳諧概說……東京帝國大學文學部講師文學士 志田義秀
八、松尾芭蕉……東京帝國大學文學部講師文學士 志田義秀
九、阿國歌舞伎から元祿劇まで……東京帝國大學文學部講師文學博士 高野辰之

發行所 東京市神田區表神保町 振替東京四一二三番 中興館

◇高等程度の國文法の新著が出來ました◇

文學博士 藤村作先生序

福岡高等學校助教授 安田喜代門先生著

國語法概說

上製美本全一冊
定價金二圓三十錢
郵税金十八錢

高等學校及び高等程度の諸學校の教科書又は參考書として用ゐられんことを欲して作られたものであります。

隨て文檢の國語科を受けられんとする人々、中等教育から一歩進んで母國語に今少し深い理解を求めんと欲する一般の人々にも、國語の本質を知るために、是非讀んで戴きたいと思ひます。

國語學は、明治以後、他の方面のすばらしい文運の發達に比し、進歩が遲々として居り、年代的背景もしつかりせず、文語・口語などいふ一種の規範文法に囚はれ、生々流動し展開する本質を忠實に凝視することが出來なかつたようですが、本書は國語史を通じて其の展開のあとを大觀し、不變の大局と推移の部分とを分けて、夫を統合的に說述を試みました。

目次大綱

第一篇 序說 言語—方言と標準語—時代語—口語の文語與と散文—音韻と語法。
第二篇 品詞論 單語と品詞—感動詞—代名詞—名詞—體言の格—形容詞—動詞の活用—動詞の職分及び容による分類—用言の存在態—用言の法—助動詞—副用語—助詞。
第三篇 文章論 文の本質—文の成分—用言の法と文の構成。

發行所 東京市神田區表神保町 振替東京四一二三番 中興館

◇あらゆる方面に採用された日本文學史の教科書◇

東京帝國大學文學部教授　文學博士　藤村作先生著

訂正改版

國文學史總說

定價二圓五十錢
郵税金十八錢

教科用（學生用廉價版）
定價金二圓
郵税金十八錢

□内容目次梗概□

緒論　國文學史と其の區別　**第一篇　大和時代**　序說　第一章前期（古事紀と日本書紀―風土記―祝詞）第二章後期（萬葉集―宣命―懷風藻と日本靈異記）。**第二篇　平安時代**　序說　第一章前期（初期の漢詩及び漢文―六歌仙と古今集―神樂と催馬樂―歌物語と傳奇的物語―土佐日記と蜻蛉日記）第二章中期（和歌と謠物―源氏物語―枕草子と日記隨筆）第三章後期（和歌と謠物―小說物語―歷史物語と傳說物語）**第三篇　鎌倉室町時代**　序說　第一章前期（歌集と歌人―宴曲―軍記物語と其の他の物語―日記・隨筆・紀行）第二章後期（和歌と連歌―軍記物語と歷史物語其の他―お伽草紙と舞の本―謠曲と狂言―徒然草）**第四篇　江戸時代**　序說　第一章前期（古學復興時代の和歌―俳諧と芭蕉―假名草紙と井原西鶴―古淨瑠璃と近松）第二章　中期（加茂眞淵と其の時代の和歌―蕪村と其時代の俳諧―狂歌と川柳―初期の讀本と洒落本―淨瑠璃と脚本）第三章　後期（後期の和歌―後期の俳諧―後期の小說―脚本）**第五篇　明治時代**　序說　第一章　前期（思潮概觀―詩歌と戲曲―小說）第二章　中期（思潮概觀―長詩と短詩―小說―戲曲）第三章　後期（思潮概觀―詩歌と戲曲―小說）

現行の國文學史教科書中で、優秀のものと稱せられ、最も汎く用ゐられて居ります。古寫本・版本等の面影を窺はせるために百數十餘個の寫眞銅版・凸版を挿入して引例に充て、傳記・解題の間に思潮の概觀や批評にも筆を及ぼし、頗る要領を得せしめた所に著者の苦心が見られます。

發行所　東京市神田區表神保町　振替東京四一二三番　中興館

クヤ書房

終